ISSN 2185-2510

第10号

国立ハンセン病資料館

研 究 紀 要

目 次

[論文]
『選ばれた島』の英訳本『MISSION TO OKINAWA』をめぐって
辻　　央 …… 1

道具を使う身体
―『地面の底がぬけたんです』にみるハンセン病療養所における
自助具、義肢、補装具の意義―
吉國　　元 …… 11

[講演記録]
ハンセン病との出逢いから
鶴見　俊輔 …… 31

解説
木村　哲也 …… 51

2023年３月

国立ハンセン病資料館
The National Hansen's Disease Museum

目　次
CONTENTS

［論文］
『選ばれた島』の英訳本『MISSION TO OKINAWA』をめぐって
辻　　央……1

道具を使う身体
―『地面の底がぬけたんです』にみるハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具の意義―
吉國　　元…… 11

［講演記録］
ハンセン病との出逢いから
鶴見　俊輔…… 31

解説
木村　哲也…… 51

[論文]
『選ばれた島』の英訳本『MISSION TO OKINAWA』をめぐって

辻　央（沖縄愛楽園交流会館）

はじめに

本稿は、青木恵哉（1893-1969）の前半生や国頭愛楽園（1952年に沖縄愛楽園と改称、以下愛楽園と略記）の開園経緯が記された『選ばれた島』[(1)]の英訳本『MISSION TO OKINAWA』について、後述する資料群から明らかとなった英訳や発刊経緯、翻訳者、発刊年についてまとめたものである。

『選ばれた島』は、青木の受洗40周年および愛楽園開園20周年の節目にあたる1958年に非売頒布品として出版された。その発行部数は明らかではないが、晩年、青木自身の手元に本の在庫はなく、復刊を願っていたという。

青木の没後、『選ばれた島』はいくつかの展開をみせる。その初期の展開に、日本キリスト教会東京告白教会牧師の渡辺信夫（1923-2020）編集による復刊[(2)]と、本稿で扱う英訳本『MISSION TO OKINAWA』発刊がある（以下、1958年の非売頒布本を初版、渡辺編集本を復刊版と記す[(3)]）。

1972年復刊版の発行部数は明らかではないが、復刊版はその後いくつも版を重ねており[(4)]、ある程度の広がりをもった様子がうかがえる。復刊版を典拠として愛楽園開園前の青木をめぐる状況を考察する中村文哉の一連の研究も存在する[(5)]。一方、これまで青木や『選ばれた島』をめぐる研究で『MISSION TO OKINAWA』について言及されることはあったが、英訳経緯や翻訳者については不明であった[(6)]。また『MISSION TO OKINAWA』そのものについての研究は見当たらない。

これまで全生病院（現、多磨全生園）の北條民雄の「いのちの初夜」や、大島療養所（現、大島青松園）の長田穂波の詩集、同療養所のキリスト教団体霊交会の会員の文芸作品が日本語以外の言語へ翻訳されたことが指摘されているが[(7)]、翻訳の経緯や出版年など明らかではない点も多い[(8)]。

後述するように『選ばれた島』の英訳は、青木の存命中に開始されたものと『MISSION TO OKINAWA』発刊に直接結びつく青木の没後に行われたものが存在する。それぞれの英訳を担った人物を先にあげると、前者は渡口薫、後者はクリストファー・ウィリス（George Christopher Willis）とマーガレット・ウィリス（Margaret Lucille Willis）[(9)]、豊永伊佐子である。

（1）『選ばれた島』と青木恵哉については、森川恭剛「青木恵哉と『選ばれた島』」（ハンセン病問題ネットワーク沖縄編『入門沖縄のハンセン病問題―つくられた壁を越えて』（なんよう文庫、2009年）14、15頁、阿部安成・石居人也「わたり、わたす、書き、つなぐ――青木恵哉という時空――」（リプリント　ハンセン病療養所シリーズ１『選ばれた島』、近現代資料刊行会、2015年）617-650頁参照。

（2）復刊経緯については、渡辺信夫『沖縄ライ園留学記』（教文館、1970年）、渡辺信夫「編者あとがき」（渡辺信夫編『選ばれた島』、新教出版社、1972年）297、298頁参照。

（3）2015年に初版と復刊版を収録したリプリントが近現代資料刊行会から出版されている（監修・解説、阿部安成・石居人也）。

（4）著者が1998年に愛楽園を訪れた際、祈りの家教会の松岡和夫執事からいただいた復刊版は、1991年９月発行の第５版であった。第３版は600部、第４版は1982年７月に500部発行されている。祈りの家教会聖堂30周年記念誌編集委員会編『祈りの家教会聖堂30周年記念誌』（日本聖公会沖縄教区祈りの家教会、1984年）80、81、189頁。

（5）中村文哉「複数の「嵐山事件」――「愛楽園」開園前の沖縄におけるハンセン病問題の一位相――」（『山口県立大学社会福祉学部紀要』第13号、2007年）、「ハンセン病罹患者の〈居場所〉―沖縄社会と〈隔離所〉―」（『山口県立大学学術情報』第１号、2008年）、「〈渡り〉が拓く〈もう一つの社会〉―後原〈隔離所〉時代の青木恵哉―」（『山口県立大学学術情報』第２号、2009年）など。

（6）国立国会図書館のNDLオンラインデーターベースは、『MISSION TO OKINAWA』の書誌情報を、出版社は香港のChristian Book Room、出版年を197-？、著者を青木恵哉とする（最終検索2022年７月27日）。翻訳者の記載はない。

（7）阿部安成『島で―ハンセン病療養所の百年』（サンライズ出版、2015年）77-80頁。田中キャサリン「ロイス・ジョンソン・エリクソン夫人と長田穂波―キリスト教宣教師と癩文学の普及―」（『大手前大学論集』第15号、2015年）124、125頁。

（8）本文に記した翻訳本以外に、次の翻訳本があることを国立ハンセン病資料館図書室の斉藤聖さんより教示いただいた。平沢保治『No Despair In Life』（訳者不明、IDEA Center for the Voices of Humanity、原書『人生に絶望はない―ハンセン病100年のたたかい』）、桜井哲夫『The Call of Tsugaru』（Charles De Wolf訳、Winds Publications、原書『津軽の声が聞こえる』）。

（9）マーガレット･ウィリスの自伝に『Your Faithfulness Reaches to The Skies —The Story of a Reluctant Missionary』（Independently published、2022年）がある。共著者ウィリアム・アレクサンダー・ウィリス（William Alexander Willis）は次男。

本稿では、次に述べる沖縄愛楽園交流会館（以下、交流会館と略記）が所蔵する二つの資料群と英訳者の一人である豊永伊佐子のメール[10]から二つの英訳やそのつながり、『MISSION TO OKINAWA』発刊までの経緯について記していきたい。

一つ目の資料群は、『沖縄県ハンセン病証言集　沖縄愛楽園編』発刊後に、愛楽園内にある祈りの家教会の石原絹子（いしはらきぬこ）司祭から沖縄愛楽園自治会に寄贈された資料である。青木直筆と推定される手稿と、青木に宛てられた手紙やはがき、新聞記事の切り抜き、写真などからなり、全体としては1000点を超える。ただし、青木との関連が不明なものや、青木の没後に混入したと思われるものも存在する。青木直筆と推定される手稿の割合は、全体の５％程度であり、青木が受け取った手紙や葉書がその多くを占めている。沖縄戦以前のものと推定される資料は数点で、ほかは米国統治下のものである。

二つ目は、2019年12月に豊永伊佐子から交流会館に寄贈された「Mission to Okinawa Papers」と記された箱の資料である。カナダ在住のマーガレット・ウィリスから「身辺の整理を始めたところ、翻訳開始時の依頼文や挿絵の原画、ノートの手書き原稿などが出てきて、焼却するつもりであったけれど、当時の思い出があまりにも懐かしく、もしそちらで保管などが出来るのならば送るので、適当に処理して欲しい」[11]と豊永伊佐子に送られ、その後交流会館に寄贈されたものである。本稿では、前者を祈りの家教会資料、後者をウィリス家資料と呼びたい。

行論としては、祈りの家教会資料を中心に青木の存命中に開始された渡口薫による英訳、次いでウィリス家資料と豊永伊佐子のメールから青木の没後に行われ『MISSION TO OKINAWA』発刊に直接つながったウィリス夫妻と豊永伊佐子による英訳について確認し、二つの英訳のつながりについて述べ、最後にまとめとしたい。

１．渡口薫による英訳

最初に、初版あとがき[12]に青木が記した英訳の起点について確認しておきたい[13]。

> 一九五四年十一月、私はこれ（「かるばりの道」と題した373枚の原稿――引用者注）を当時お迎えした八代主教さま（日本聖公会総裁主教）によって出版して戴くようにお願いしてその原稿をお届けした。
>
> そして一カ年余は瞬く間に過ぎ去ったが出版のことについては遂に何一つとして便りがなかった。そのときである。「あの原稿は英訳して出版してあげます」と旱天に慈雨とでもいうかヘフナー司祭さま（沖縄聖公会主任）の思いがけないお話があったので私は雀躍して喜び、出版社に送ってあった原稿は早速取り戻して戴くことにし丹念に読み返して見た結果、大きな欠陥のあることを知り、どう考えても活字にする価のないことがわかった。

青木が雀躍して喜んだという英訳の話はこれ以降登場せず、この件がどうなったのかは不明である。結果として『選ばれた島』発刊前に英訳本が出されることはなく、『MISSION TO OKINAWA』の発刊は、青木の没後となった。ヘフナーの提案した英訳の話は、立ち消えになったと推測されるが、この英訳の話は形を変え、後述するように『MISSION TO OKINAWA』へとつながった。

『選ばれた島』英訳に関する祈りの家教会資料を確認しておこう（表１）。渡口薫から青木に宛てた７通の手紙と、封筒がなく、差出人や宛名が不明ながら、内容から渡口薫の青木宛と推定される手紙が１通ある。また、封筒のみが２点ある（以下、資料は表１左端の番号を〈　〉で記す）。現在確認できる最も古い手紙は1963年６月27日付（消印６月29日）であるが、この手紙は青木からの手紙（３月16日付）への返信である。手紙に、

（10）豊永伊佐子さんの聞き取りを予定していたが、新型コロナの感染状況が厳しく、メールの問い合わせに回答していただいた。
（11）豊永伊佐子「青木恵哉さん自伝「選ばれた島」の英語版Mission to Okinawaについて」（2019年12月）。
（12）復刊版では、本文の最後にあった附記と著者による「あとがき」は削除され、渡辺信夫による「解題」に、あとがき全文が引用されている。
（13）青木恵哉『選ばれた島』（W.C.ヘフナー、1958年）267、268頁。

表１

	差出人	宛名	形態	年月日	消印
1	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（６枚）	1963年６月27日	1963年６月29日
2	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（７枚）	1967年10月29日	1967年10月31日
3	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（12枚）	1967年11月14日	1967年11月15日
4	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（４枚）	1967年12月20日	1967年12月20日
5	渡口薫	青木恵哉	手紙のみ（９枚）	年不明１月８日	
6			手紙のみ（４枚）	年月日不明	
7	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（４枚）	1968年３月７日	1968年３月９日
8	渡口薫	青木恵哉	封筒と手紙（４枚）	年不明４月４日	年不明４月５日
9	渡口薫	青木恵哉	封筒のみ		1968年２月６日
10	渡口薫	青木恵哉	封筒のみ		

青木の療養所をめぐる旅行や青木の姉の安否を気遣う文面があることから、青木との関係は以前から時間をかけてつくられたものと推測される。この１通を除いて手紙は、1967年の秋から翌1968年の春にかけて出されている。渡口は、青木の最晩年に頻繁な手紙のやりとりをしていた人物の一人である。

渡口の経歴は定かではないが、青木と手紙のやり取りをしていた1960年代は鹿児島市在住であった。父親の遺骨を沖縄で納めたという記述から、父方は沖縄にゆかりがあり、後述するように渡口は少なくとも1950年代初頭沖縄で暮らしていた。手紙に「私は中学校の免許と高校英語教師の仮免許はあり、栄養士、衛生検査技師の免許はあります」〈４〉とあり、いくつかの資格を所持していたようである。実際に病院の勤務経験もあったようで、加齢のため愛楽園内の重病棟に入室することが幾度もあった青木の健康を気遣う文面が度々登場する。傷の手当てに殺菌力のあるオリーブオイルを使用してみてはどうかという勧め（写真１）とともに「那覇のリュウボウ（百貨店――引用者注）やその他スーパーマーケットに食品部にきっとあると思います、那覇に出かける人にご依頼なされば如何でしょう」と具体的な入手場所の提案もあわせて記されている〈５〉。

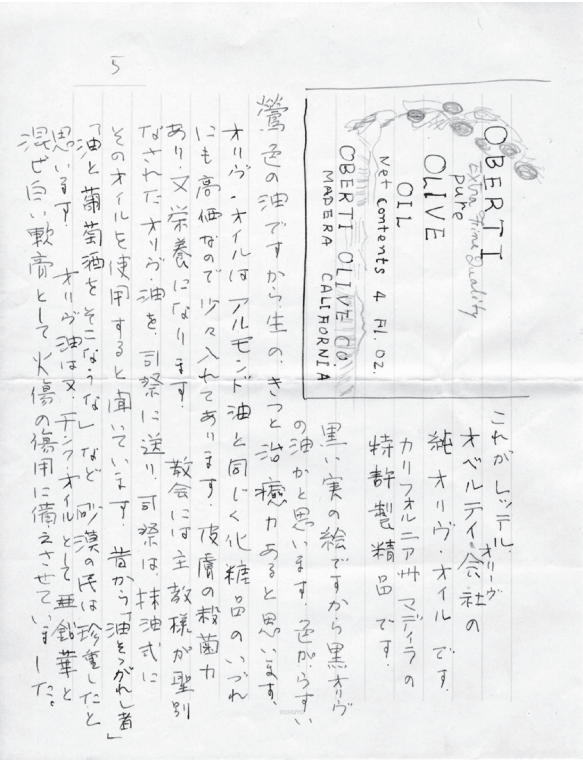

写真１

青木と渡口の手紙のやり取りが始まった時期やきっかけは定かではないが、青木と渡口を結ぶつながりは教会であった。手紙に渡口は、「沖縄三原の聖公会で、教会内でノーマン・Ｂ・ゴッドフリー司祭様やヘフナー司祭様の英語の伝道集会のお話を青少年の中に混って座して聞き聞きする中に訳する耳が開かれ」たと英語に親しむきっかけは沖縄聖公会の伝道集会であったと記している〈３〉。ゴッドフリーとヘフナーの来沖は1951年で、ゴッドフリーの帰米は1953年である[14]。少なくとも渡口は1950年代初頭、沖縄で暮らしていたようだ。

渡口は、兄からの要請で、ロウエル・エル・ホウの「人の必要と神の行動」およびアーサー・W・

（14）　新城喬・高橋亨・棚原恵正・古見英一編『聖公会の歩み――宣教25周年記念誌』（日本聖公会沖縄教区、1976年）106頁。

ロビンソンの「精霊と個人」を訳したという一文が手紙にあり、翻訳の経験はあったようだ。ただし、「本として未だ脱稿したのではありません」ともあり、この２冊が出版されたのかはわからない〈２〉[15]。

『選ばれた島』英訳の話は、翻訳について書かれた上記〈２〉の手紙に記されている。霧島で中学校教員をしていたという渡口は、大阪救癩協会の栗山東里から『選ばれた島』を贈られたが、仕事に忙殺され、読むことができなかったという。自身の状況と『選ばれた島』の英訳について少し長くなるが引用する。

> 辺地の人事不足で（校長先生以下六名の職員）教科の勉強の他に、雑務が多く、仲々、御本が読めませぬ中に、土曜日直が毎週廻って来まして、とう〳〵医者にかゝるため山下りも出来ませず、暮に発病、入院駆け込みましたわけで、とう〳〵院内で漸く入院中に、拝読いたしました次第でございました。（中略）たゞ今は、もう注射もせず、服薬もせずとよく、専ら要心【ママ】して体力を養い家事に当って、居りますが、ふり返って考えてみますと、今再び社会に出て、仕事に向う前に、何となく、先生の「選ばれた島」のことが気にかかります。東京にいました頃、もうかれこれ十四五年になりますか、ヘフナー司祭様が、先生の原稿をお持ちになって訪ねられ、「これを訳して下さいませんか」と御依頼を受け、当時、私は語学力も未だ幼稚で、丁度腹膜炎で安静にしていました時とて、誠に申し分けなく誰方か英語の出来る方にと、お断りいたしましたのでした（中略）けれども、十年経っても何年かかっても司祭様が御依頼なさったことは果されねばならないと、私は憶えて居ります。訳し終えて献じなければ心のしこりになって、いつまでも残りますので、又御霊母様ハンナ・リデル女史の御霊に怠慢は申し分けないことと存じまして甚だ身勝手なこととは存じますが、又、公のことでもありますので、その後、御本の訳本、発刊終えましたかどうか、御連絡ありましたものか、おうかがいお赦しをお願い申しましたわけでございます。たとい、どなたかお始めになって居られるか知れませんが、私は私なりの訳し方で、又他の英語を話す群のために完え備えておかねばならない気がいたし始めの数頁にかゝって居ります。一日一頁の歩みです。

この手紙によれば、本節冒頭で引用した初版あとがきに記された英訳に、渡口が関係していたことがわかる。ヘフナーが渡口に英訳依頼をした際、青木の原稿を持参していたようである。しかし、渡口は自身の体調不良と語学力の不安からヘフナーの提案を断ったという。

死をも覚悟する状況からの復調であり、忙殺された日常からの解放であった渡口の入院は、『選ばれた島』を読み、「心のしこり」として残っていた英訳に改めて向き合う時間となったのだろう。英訳を「公のことでもあ」ると認識する渡口は、青木に『選ばれた島』の英訳本が発刊されたかを確認している。同時に、その返答を得る前に「私は私なりの訳し方で」「始めの数頁」英訳にとりかかっており、『選ばれた島』英訳に対する強い意志を感じる。また、英訳に必要な人物や地名の読み方、補足として追加する説明への協力などが記されている。

約２週間後の手紙〈３〉には、退院後、家で養生している渡口に「沖縄聖公会時報」や「祈りの家の週報」、「あだんの実」[16]とともに見舞い金が同封されていたことが記されている。手紙には「私如きものにこの仕事をおまかせ下さいました事を感謝申し上げます」、「一途御書の翻訳にいそしむつもりで居ります」と青木から『選ばれた島』英訳について了承が得られた様子がうかがえる。

12月20日付の手紙〈４〉では、「たゞ今とりかかっていますこと、主に訳文ですが、これが来年の十月位迄かかる予定です」と英訳に必要な大まかな期間が示された。その後の手紙に「たゞ今三十三頁終えました」〈５〉、「たゞ今五七頁に来て居ります」〈７〉と進捗が記されている。

（15）渡口が翻訳したという２冊について、2021年11月に国立国会図書館人文総合情報室で調べてもらったが、有益な情報は得られなかった。
（16）沖縄ハンセン氏病予防協会編集発行の新聞。

前述した、英訳の課題となる人や地名の読み方について、「誠に申し分けございませんが、先生のお具合のよい時、本当にゆっくりで宜しうございますから、一度になさいませんよう、或いは安静でいらしたらどなたかに代わって書いていただいてもよろしゅうございますが、同封の質問欄にお答えいたゞけませんでしょうか。主に人の御名前、名称です」、「それから外人の方のお名は、もし書簡の上書きなどでお思い出し下されたらそれも宜しくお願い申し上げます」と青木の体調を配慮した上で、回答を求めている〈５〉。質問項目と思われるものが残っており、おそらく７項目の質問であったと思われる。内容は回春病院２代目院主ハンナ・ライトの綴りや聖バルナバ医院のコンウォール・リーの敬称についてである。

渡口の要請に応えて青木は、様々な人へ問い合わせをしたのだろう。当時、大島青松園で園長をつとめていた野島泰治などからの回答がある。野島からの回答は1968年２月上旬、４回にわたっており、最初の回答が記された２月１日付の葉書は速達である。野島の回答内容は、青木に洗礼を授けたアメリカ人宣教師エリクソンや徳島で伝道活動をしていたアメリカ人宣教師ローガン、回春病院院主ハンナ・リデルなどの人名やハワイのカリヒ収容所の綴りであった。野島は最初の葉書で「戦前の資料を高松の戦災で焼きましたので大島の倉庫で探さねばならない」としながら、後送の葉書にカリヒ収容所の概略や1933年の患者数、保育所の人数、収容所があった場所の現在についての追加説明を記している。野島以外の回答者は分からないが、内容から回春病院と草津の教会関係者と推定される。

照会への回答は、青木から渡口に回送されたのだろう。渡口は手紙に「コンウォール・リーさん方のお名を確かめ下され、有難う存じました。又、先にはリデルさんその他、各先生方のをお知らせ下さいまして有難う存じました」〈７〉と記している。

また、回春病院内の降臨教会で司祭をつとめた秋山禋範から青木に宛てられた手紙に、「貴著“選ばれた島”が渡口さんの御盡力で英訳中の由、大変うれしいことゝ存じます。（中略）どうぞそれが、実現しますように祈っています」との一文がある。渡口の『選ばれた島』英訳は、青木と渡口の二人だけが知る話ではなく、もう少し広い人々が知るものとなっていたようだ。

現在確認されている渡口からの最後の手紙は、青木が亡くなる約一年前に出されたもので、「訳文は七十四頁に至って居ります」と本文のおおよそ３割が英訳されていたようである〈８〉。この手紙でも「質問申し上げましたフリガナ付けも詳細に御答え下さいまして大変有難う存じました」という一文があり、読み方などの確認がこのときも行われていたことがうかがえる。

また、別の課題があったことも記されている。それは、『選ばれた島』に登場するハンセン病発病者の名前をどうあらわすかであった。手紙には、回春病院で療養していたハワイ人、ジョージ・カホイワイについて、次のように記されている。

> ジョージ・カホイワイさんは変名にした方がやはりよろしいとのこと、ハワイ語が分らず困っていますが、一まず「ジョージ・カリオメーレ」さんとしておきましたが邦文の方とさして変らず、又気づかずに、さしさわりないと思いますが、如何がでしょうか、強いて訳せば「カリ」は沖縄のカリー（景気のよい、祝賀された、めでたい、恵み多い）（中略）「メレ」は色のついた、有色のメラネシアのメレ、（ポリネシア人の）有色・黒をもじりました、ジョージ・カリオメーレさんです。よい名があればお知らせ下さい。

ジョージ・カホイワイの変名については、後述する。

この手紙の約１年後に青木は亡くなる。渡口が青木の死をどのように知ったのかは不明だが、渡口は青木の葬儀に弔電を送っている[17]。

（17）入園者自治会文化部編集室編「愛楽園ニュース」第９号（沖縄愛楽園入園者自治会、1969年４月）２頁。

２．ウィリス夫妻と豊永伊佐子による英訳

青木の没後に始まり『MISSION TO OKINAWA』発刊に直接つながる英訳に関わった三人の人物について、簡単にふれておきたい。

クリストファー・ウィリス（1923-2012）は、カナダから中国に移住し、伝道活動に携わっていた両親のもと、生まれている。1941年、カナダのマギル大学（McGill University）に入学し、医学を専攻。1948年に大学を卒業。同年に、病院研修の際知り合ったマーガレットと結婚した。シンガポールやボルネオ、カナダのモントリオールなどを経て、沖縄県立中部病院で研修医に臨床技術を教える講師として、1975年の夏に沖縄へ移住。病院で、カナダから帰国したばかりの豊永一隆医師と親交を深めた。1980年、モントリオールに戻る。

マーガレット・ウィリス（1927-）は、カナダのケベック州ショービルで生まれている。冬になると肺炎を患うことが度々あった父を看護した経験が、看護に興味をもつきっかけであったという。1945年、モントリオール総合病院の看護学校に入学し、1948年に卒業している。1947年にクリストファーのプロポーズを受けたが、マーガレットによれば、彼は医療宣教師になるつもりで、宣教師としてついてくることが条件であったという。各地で看護師などの仕事と伝道活動を行った。沖縄では、英語を学びたいという医師婦人会の要望を受け、聖書を教科書として英語を教える活動を行った。その会で、豊永伊佐子と出会う[18]。

豊永伊佐子（1942-）は、福岡県小倉生まれ。大学卒業後、出版社や国立病院の院長秘書として働いた後、渡米。同地で豊永一隆医師と結婚。ニューヨーク州立大学で英語を学ぶ。カナダに移住。ビザ更新のため、一時帰国した際、沖縄の病院を紹介され、1975年末に沖縄へ。1981年に再度、渡米[19]。

ウィリス家資料を確認しておこう。ウィリス家資料は、英訳の直筆ノート、英訳本に入れる予定であった挿絵や青木関連の場所で撮影された写真、英訳のため入手したと思われる英文資料、書籍などである。内容が確認できていない手書きの英文資料もある。書籍は、英訳者の一人であるクリストファー・ウィリスの父の自伝『Unless A Grain Of Wheat...The Life of G. Christopher Willis Ⅰ―A STUDY IN SPIRITUAL FRUITFULNESS』（W. A. Willis、2010年）、内田守編『ユーカリの実るを待ちて―リデルとライトの生涯―』[20]（リデル・ライト記念老人ホーム、1976年）、小冊子『ESCAPED AS A BIRD』[21]である。

ウィリス夫妻が、青木や『選ばれた島』について、いつ、どのように知ったのかは、明らかではない。愛楽園を訪れる前に接触のあった沖縄の教会の可能性もあるが、豊永によれば、「沖縄に来る以前、東部カナダでハンセン病のミッションをしている方と知り合い、しばらくの間この病気に関するミッションを学ぶ過程で青木さんのことを知り、とても感動した」経験があったという[22]。

『選ばれた島』英訳の件で愛楽園を訪問したウィリス夫妻について、徳田祐弼（とくだ ゆうすけ）[23]の1976年11月21日付、横田富志子（よこた とし こ）[24]宛ての手紙に記されている。愛楽園園長の犀川一夫（さいかわかずお）からウィリス夫妻を紹介された徳田は、マーガレットから『選ばれた島』英訳について質問をされたという。英訳は渡口薫によってなされ、英訳草稿はブラウニング主教が預かっていると徳田が説明したところ、発刊できない理由について、さらなる質問を受けたという（句読点を適宜加えた）。

（18）W. A. Willis『Unless A Grain Of Wheat...The Life of G. Christopher Willis Ⅰ―A STUDY IN SPIRITUAL FRUITFULNESS』（W. A. Willis、2010年）、前掲、Margaret L. Willis・W. A. Willis『Your Faithfulness Reaches to The Skies ―The Story of a Reluctant Missionary』。

（19）豊永伊佐子からのメール（2022年８月11日）。

（20）徳田祐弼が1977年２月に送った書籍の一冊と思われる。

（21）前掲、田中キャサリン「ロイス・ジョンソン・エリクソン夫人と長田穂波―キリスト教宣教師と癩文学の普及―」124-125頁。

（22）豊永伊佐子からのメール（2022年４月27日）。

（23）1900年石垣島生まれ。十代でハンセン病を発病し、1920年回春病院に入院。星塚敬愛園を経て、1947年愛楽園に転園。愛楽園自治会の前身となる共愛会の総代を６期つとめる。青木と共に祈りの家教会の伝道師や執事として活動。青木の没後、祈りの家教会の司祭となる。遺稿集に祈りの家教会編『主の用なり―故司祭バルナバ徳田祐弼遺稿・追悼文集』（徳田その、1985年）がある。

（24）日本聖公会沖縄教区の伝道師。

『それなら何故今日まで発行されないのか』と問われるので『徳田はその後の事情は存じません』。『英訳が完全でないので手を入れる必要があるのか』、『資金不足で発行が出来ないのか』。『以上の二つの中の一つだと思います』、『或は二つが、まだ英文発行の出来ない原因かもわかりません』と申し上げましたら、ブラウニング主教さんに問合せて、もし資金不足が原因なら自分ウィリス夫人がその資金を出してもよい。ブラウニング主教さんに問い合せて御返事を聞かせて下さい。

『選ばれた島』の英訳の話は、横田からブラウニングへ照会され、徳田に何らかの回答があったと思われる。1977年２月22日消印の徳田のウィリス夫妻宛ての葉書には、会食に対するお礼とともに、「青木氏“選ばれた島”英訳出版よろしく御願します」とウィリス夫妻らに英訳をお願いする文面や、『ユーカリの実るを待ちて―リデルとライトの生涯―』などの書籍を送ったことが記されている。また、「運転して戴いた先生と通訳の奥様にくれ〳〵もよろしく」という一文も見え、この夫婦は豊永夫妻ではないかと推測される[25]。おそらくこのときを含め、同年５月と11月の３回にわたって、愛楽園内や青木が沖縄で最初に拠点とした備瀬（びせ）などの青木関連の地をめぐり、写真撮影をしたのだろう。愛楽園のある屋我地（やがじ）島と橋でつながる奥武（おう）島に建てられた「のがれの島」の碑などいくつかの場所では徳田の説明を受けたという。

その後の経緯は、豊永伊佐子によれば次のようになる[26]。

「選ばれた島」（復刻版です。初版の存在は知りませんでした）を頂き、読み翻訳を勧めました。しばらくしてWillisさん達に伴われて、丘の上にあった教会に出かけ、奥に仕舞われていた重たい風呂敷包を受け取りました。それが渡口薫さんという方が訳された原稿だったのです。

（中略）当時私はカナダから帰国したばかりであり、その前にニューヨーク州立大学で英語を学んでいましたので、（中略）本から直接訳していきました。（中略）当時、私には、1975年５月に生まれた娘の子育て真っ最中の合間での翻訳作業でしたので、出来た分からWillisさんにお渡ししていたと思います。何故ならより洗練された文章と、そのままの翻訳文では説明し切れないニュウアンスを英語に置き替えて頂くためです。

説明を加える。豊永によれば、復刊版の感想をウィリス夫妻から求められ、読了後「素晴らしい本である。沖縄のライの歴史、特に愛楽園への道のりが詳しく一ライ者の目で描かれています」[27]と答えたことが、英訳を始めるきっかけになったという。ブラウニングの下にあったという渡口の英訳草稿が返却された時期は不明であるが、数十枚の英訳草稿は牧港（まきみなと）諸魂教会[28]に保存されていた。英訳草稿は、ウィリス夫妻に貸し出されたが、その後返却したという。

英訳は、引用のように復刊版をもとに進めたという話がある一方で、「オリジナルの（中略）訳文を利用した記憶がなかったので、（カナダのマーガレットさんに――引用者注）質問したところDr. Willisが直訳文を正しい英文に直し、それを再び私が日本文と照らし合わせて、意味が正しく訳されているかをチェックしていった」[29]という話もある。両者は並行で進められたのか、後者が最初に試みられ、その後に前者となったのか、定かではない。

英訳草稿の手書きのノートは５冊あり、推敲の跡が見える（写真２）。残念ながら英訳開始や終了の日付はない。豊永によればノートの筆跡の一部は、マーガレットの文字であり、渡口の草稿や豊永伊佐子の訳文を修正しながら書かれたものではないかという。豊永やウィリス夫妻の手でまと

（25）豊永伊佐子によれば、1977年２月にウィリス夫妻と一緒に初めて愛楽園を訪れたという。
（26）豊永伊佐子からのメール（2022年７月21日）。
（27）前掲、豊永伊佐子「青木恵哉さん自伝『選ばれた島』の英語版Mission to Okinawaについて」（2019年12月）。
（28）浦添（うらそえ）市牧港にあった諸魂教会は、沖縄県中頭郡（なかがみぐん）北谷（ちゃたん）町に移転。跡地に「ポート・ヒロック」という介護付有料老人ホームが建てられている。
（29）豊永伊佐子からのメール（2022年４月27日）。

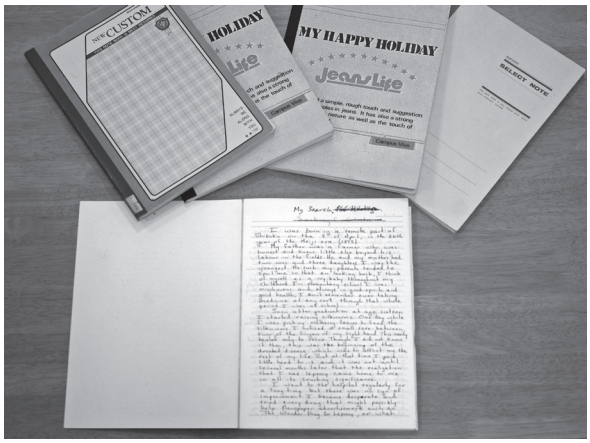

写真２

写真３

められた英訳草稿は、より洗練された英語にするため、カナダのウィリス夫妻の友人に送られ、カナダと沖縄を往復したという。

文中に挿入する絵の制作を、英訳作業とあわせて進めていたようで、９種類の挿絵がある（写真３）。『MISSION TO OKINAWA』巻頭に掲載された遍路の順路を記した地図の下絵（手前中央）は、豊永が描いたものであるという。愛楽園退所者に依頼したという残りの８枚は、紙幅の都合で掲載できなかったという。

出版は、まず沖縄の出版社にあたり、次いで講談社に打診したものの、快い返事をもらうことができず、香港でChristian Book Roomを経営していたクリストファーの姉フランシス・ウィリス（1921-2012）の協力を得て、自費出版することになったという[30]。

不明となっている『MISSION TO OKINAWA』の発刊年に関して述べておきたい。ウィリス家資料にクリストファーが雑誌「Okinawa Passtime」に執筆した「BOOK REVIEW」のコピーがある。この書評には、『MISSION TO OKINAWA』が沖縄で近日発売予定であることが記されている。「Okinawa Passtime」は沖縄の米軍基地内で流通したと思われる週刊の雑誌であるが、沖縄県内の機関にほとんど所蔵されておらず[31]、書評掲載号の確定はできていない。

『祈りの家教会聖堂30周年記念誌』年表、1980年４月の項に「故エパフラス青木恵哉執事の著書「選ばれた島」の英訳出版が、沖縄県立中部病院のウィールス医師の御尽力でされた。これは香港で2000部印刷（中略）300部を祈りの家教会に届けて来られた」と記載されており[32]、『MISSION TO OKINAWA』の出版は1980年としていいだろう。

書籍は、沖縄の米軍基地内で販売が試みられたが、多くは沖縄にある聖公会の書店で販売されたという。

３．二つの英訳のつながり

これまでみてきたように、青木の生存中に始められた渡口の『選ばれた島』英訳は初版をもとにしたものであり、青木の死後、ウィリス夫妻と豊永によって行われた英訳は復刊版をもとにしていた。前者の英訳草稿の所在は現在わからず、両者を突き合わせて確認することはできないが、両者のつながりをみていきたい。

初版と復刊版の異同や復刊版の問題点についてはすでに言及があるので[33]、ここでは措くが、復

(30)　前掲、豊永伊佐子「青木恵哉さん自伝『選ばれた島』の英語版Mission to Okinawaについて」（2019年12月）、豊永伊佐子からのメール（2022年７月21日）。

(31)　沖縄県図書館横断検索「みーぐるぐるサーチ」で「Okinawa Passtime」を検索した結果、県立図書館と国会図書館の２館のみが該当。ともに1977年４月発行の１冊が所蔵されている（最終検索2022年９月17日）。

(32)　前掲、祈りの家教会聖堂30周年記念誌編集委員会編『祈りの家教会聖堂30周年記念誌』198頁。

(33)　末吉重人（すえよし）「「愛楽園」創設者の青木恵哉著『選ばれた島』について――現在流通する復刊本と初版本との異同が意味するもの」（『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第９巻第１号、2005年）、阿部安成「復刊事情――ハンセン病療養者の著作『選ばれた島』をめぐる――」（滋賀大学経済学部Working Paper Series No.223、2015年３月）、前掲、阿部安成・石居人也「わたり、わたす、書き、つなぐ――青木恵哉という時空――」620-625頁。

刊版「解題」で渡辺信夫が述べた変更点について確認しておきたい[34]。

本書は初版本の忠実な翻刻ではない。広く読まれることを願って刊行される本書は、その方針のもとに編集しなおされた。けれども、ごくわずかリライトされただけである。古典的な意味を獲得した本書は、もはや書きなおさるべきではない。漢字を少なくし、読みにくい固有名詞に「ひらがな」を添えた程度である。ただし、救ライ史の古典に属する書物に仮名（初版においては病者の名はほとんど全部仮名であった）人物を登場させては資料としての価値がなくなるので、人名はみな調べて実名になおし（傍点は引用者による）、それに伴い文章を書き直す必要の生じたところはなおした。

このように、原形をなるべくとどめたため、必要な説明はすべて注の形にして本文の後に収めた。

英訳に関して、漢字をひらがなに直した影響は大きくないように思えるが、難読固有名詞の読みをひらがなで補った点は、プラスに働いただろう。また、復刊版には４つの地図が挿入されているが、『MISSION TO OKINAWA』巻頭にそれらを参照したであろう本部半島とその周辺の地図が掲載されている。『MISSION TO OKINAWA』の目次に関しては、「初版のほぼ逐語訳となっていて、英訳目次は初版のそれに対応している」ことが阿部安成によって言及されている[35]。

初版と復刊版の登場人物名を確認すると、備瀬の隔離小屋で暮らす寛一は、復刊版では比嘉権太郎となり、現在愛楽園が立地する屋我地島大堂原の土地購入を助けた康永は、復刊版では大城平永となっている。姓だけが記されていた人物については、復刊版は注で補足している。ただし、復刊版で、登場人物の名前がすべて実名になおされたのではないことには留意したい[36]。

『MISSION TO OKINAWA』の登場人物名は、前述の比嘉権太郎はKantaro Higa、大城平永はHeiei Oshiroのように復刊版本文に準じているようにみえる。復刊版の注に記された名前の補足については、反映されていないようである。岸名や知念、野町は注でそれぞれの名が記されていたが、『MISSION TO OKINAWA』ではKishina、Chinen、Nomachiとなっている。一方で、復刊版では玉城平助とされた名前が、『MISSION TO OKINAWA』では初版に記された仮名、Seisuke（清助）に戻されており、英訳は復刊版を元にすべてなされたのではなく、渡口訳も参照されたと推定される。また、福岡県生まれの豊永は、訳にあたって東江などの沖縄特有の地名や人名の読み方が分からず、苦労したという。地名や人名などの読みについても、渡口訳が参照されたと考えられる。

『MISSION TO OKINAWA』に残る渡口訳の明らかな痕跡は、回春病院のハワイ人患者の名前、George Kaliomeleである。この名前は、初版にも復刊版にも登場しないもので、青木と渡口のやり取りのなかで、渡口が提案したものであった[37]。

おわりに

『選ばれた島』の英訳や『MISSION TO OKINAWA』発刊経緯、２つの英訳のつながりについてみてきた。『選ばれた島』発刊以前の1950年代半ばに登場した英訳は、立ち消えとなったように見えたが、「かるばりの道」英訳を打診された渡口薫によって、青木の最晩年期に初版を元にし、始まった。渡口が英訳を始めた動機は、依頼者であるヘフナーに対する「心のしこり」、そしてハンナ・リデルの御霊に申し訳ないというものであったが、そのような後悔からだけではな

（34）渡辺信夫「解題」（渡辺信夫編『選ばれた島』新教出版社、1972年）13頁。

（35）前掲、阿部安成『島で―ハンセン病療養所の百年』119、120頁。

（36）例えば渡久地の隔離小屋で暮らしていた源次郎は復刊版でも同じ名で記され、巻末の注で「玉城といったらしい」と補足されているが、沖縄キリスト教会機関誌『ゴスペル』第８号（1950年10月）に掲載された青木の「思い出の記――源次郎さんの死」では、玉城とは異なる別の姓が記されている。また、初版で太田となっていた人物は、復刊版で徳田祐弼に直されたが、前掲、祈りの家教会編『主の用なり――故司祭バルナバ徳田祐弼遺稿・追悼文集』（徳田その、1985年）に、戸籍に最初に記された名前は徳田祐弼ではなかったことが記されている。青木の資料から少なくとも徳田が青木と回春病院で暮らしていた時代は、最初に戸籍に記された名前で呼ばれていたと推定される。

（37）表１〈８〉。

く、『選ばれた島』がキリスト教信仰をもつものにとって「得がたい貴い」本であり、世界のハンセン病発病者にとって「大いなる慰めと励まし」を与えるなどの初版を読了したことで明確になった渡口自身の理由もあった[38]。「十年経っても何年かかっても」英訳したいと渡口が述べ、青木をはじめとした様々な人の協力を得ながら進められていた英訳作業であったが、青木の没後、未完のまま渡口の手を離れたと推定される。渡口の手を離れることになった原因は分からないが、青木の存在や青木との手紙を通じたつながりが英訳を推進する大きな力となっていたのかもしれない。

青木の没後に始められたウィリス夫妻と豊永の英訳は、復刊版をもとにしたものであった。『MISSION TO OKINAWA』の終章Epilogueに、復刊版解題をもとにしたと思われる愛楽園開園後の青木についての記述が掲載されるなど復刊版の影響は明らかだが、渡口の英訳草稿が引き継がれることで、初版をもとにした渡口訳の痕跡が『MISSION TO OKINAWA』にのこされた。復刊版に登場しない初版の人物名が『MISSION TO OKINAWA』に登場するのは、このことに起因していると考えられる。『MISSION TO OKINAWA』の目次立てが、阿部の指摘する「初版に対応している」要因もここにあるだろう。

英訳に際し、徳田の助力はあったが、ウィリス夫妻の自費出版で『MISSION TO OKINAWA』が発刊されたことは、祈りの家教会や聖公会の関与の希薄さや、ウィリス夫妻の自発性にもとづく企画という性格があらわれているようにみえる。

渡口とウィリス夫妻らの『選ばれた島』英訳は、組織的後ろ盾をもたないなかでそれぞれの自発的な行動にもとづいて行われたものであり、『MISSION TO OKINAWA』は様々な人の協力を得て、発刊されたものであることを、強調しておきたい。

本稿では、英訳に携わった人々の資料から論じてきたが、『選ばれた島』英訳の起点となり、また渡口の英訳草稿を保管していた聖公会が、『選ばれた島』英訳についてどのような意向をもち、関わろうとしていたのかについては分かっていない。現在所在のわからない渡口の英訳草稿についても今後の課題としたい。

(38) 表1〈2〉。

［論文］

道具を使う身体

―『地面の底がぬけたんです』にみるハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具の意義―

吉國　元（国立ハンセン病資料館）

はじめに－先行研究の整理

障害のある身体がその障害を補うために道具を使う。それはどのような経験なのだろうか。道具を使うことで、身体の内側で何が起こり、道具によって何が変化したのだろう。

本稿は、国立ハンセン病資料館の企画展「生活のデザイン　ハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具とその使い手たち」[1]（以下、「生活のデザイン」展）（担当：西浦直子、吉國元）の開催を通じて得た知見を展開し、同展で紹介をした藤本としの『地面の底がぬけたんです』[2] を用いて、障害を補うための道具を使ったハンセン病患者・回復者の身体とハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具の意義を明らかにする。

「生活のデザイン」展のフライヤー

ハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具に関連する先行研究には、療養所の低劣な医療と福祉の象徴とされてきたブリキの義足を、「療養者自らが限られた環境下で考案した、生活の自立を保障する道具」[3] と捉え直し、生活史的、文化史的な検討をした西浦直子による論文[4]がある。さらに、これまで主に戦争史（傷痍軍人研究）と社会福祉史の観点に留まって論じられてきた義肢装具に関して、新たにハンセン病療養所における義肢装具と自助具について概観したのが橋本彩香による研究 [5] である。

「生活のデザイン」展は、上記の研究を踏まえて、ハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具を一望し、それらに見られる身近な材料を利用した創意工夫や、道具の使い手と作り手（義肢装具士）が対話をして道具を製作するやり取りなどを、「生活」[6] のなかにある「小さな自由」[7] を生み出す営みと考えた。さらに、昨今の医療とリハビリテーションの現場で注目されている、使い手の「その人らしさを実現する工夫」[8] の萌芽をそれらの道具に見いだした。

関連して、ハンセン病患者・回復者の身体感覚を指摘した直近の研究に、松岡弘之による検討 [9] がある。松岡は藤本の『地面の底がぬけたんです』を用い、時期は1941年頃までに限定し、療養所は第三区府県立外島保養院（以下、外島保養院）を中心に、療養生活と自治に女性が果たした役割について検証し、関連して、藤本の語りに見られる

---

(1)　会期：2022年３月12日（土）―2022年８月31日（水）。

(2)　藤本とし『地面の底がぬけたんです』（思想の科学社、1974年）。

(3)　西浦直子「補装具にみるハンセン病者の生活像―全生病院におけるブリキの義足の製作と使用をめぐって―」（『国立ハンセン病資料館　研究紀要』第７号、国立ハンセン病資料館、2020年）44頁。

(4)　前掲、西浦直子「補装具にみるハンセン病者の生活像―全生病院におけるブリキの義足の製作と使用をめぐって―」37-45頁。

(5)　橋本彩香「国立療養所多磨全生園で製作された義肢装具、自助具」（『国立ハンセン病資料館　研究紀要』第９号、国立ハンセン病資料館、2022年）。

(6)　患者の終生隔離を目的とした近代日本の隔離政策によって、患者・回復者はハンセン病療養所を生活の場とせざるをえなかった。

(7)　この表現は次の短歌を典拠とした。「足の疵癒えて足より風呂に入るこの小さなる自由ほこらし」山岡響『雪椿の里』（短歌新聞社、1985年）91頁。

(8)　義足にみるオリジナリティー（個性）の実現とその可視化については、木下直之「義足考――九〇四―二〇二〇」（神奈川大学日本常民文化研究所編『歴史と民俗』37、平凡社、2021年）271頁、280頁を参照。

(9)　松岡弘之「藤本としにみるハンセン病療養所とジェンダー　―リプライにかえて―」（『歴史科学』No.247、大阪歴史科学協議会、2021年10月）。

「病状の程度やその進行がもたらす身体感覚の変容」[10]と「重症者の実際の暮らしぶり」[11]を指摘している。同論文は必ずしも個別の日常生活動作の分析については主眼に置いていないが、重度の障害があった女性の入所者の身体感覚と彼女たちが置かれた療養所の環境と条件を指摘する重要な研究である。

また、松岡の指摘を敷衍した西浦直子の考察[12]がある。西浦は「ハンセン病による重度の障害のある女性が記した、暮らしと障害をめぐる作品」[13]として、藤本の『地面の底がぬけたんです』と合わせて、高杉美智子、宮﨑かづゑ及び、津田せつ子の随筆[14]をあげ、共通して「日常的な会話や動作、炊事や洗濯、裁縫といった「女性としてのふるまい」を通して」、ハンセン病による障害が「具体的にかつ克明に描かれている」と指摘した[15]。

全盲で手足に重い障害があり、詩や随筆など、旺盛な執筆活動を行った人物としても知られている藤本とし（1901-1987）は、19歳[16]の時にハンセン病を発病し、民間の木下病院（本郷区千駄木町）に入院（のちに通院）、その後は身延山の深敬園に入園、後に外島保養院に転所した。1934年には第一室戸台風の被災により、第一区府県立全生病院（現・国立療養所多磨全生園）の委託患者となり、後に外島保養院が国立療養所邑久光明園として再建後に帰園、同園で死去した。

『地面の底がぬけたんです』は、ハンセン病療養所の入所者自治会機関誌『楓』（邑久光明園）、『愛生』（長島愛生園）、『多磨』（多磨全生園）、『甲田の裾』（松丘保養園）及び、邑久光明園盲人会機関誌『白杖』などに掲載された藤本の随筆を、FIWC[17]の関西委員会が奈良県奈良市に建設した交流（むすび）の家[18]の初代管理人であった飯河梨貴（いいかわりき）[19]（1914-1997）が集めた『随筆集　藤本とし』（復権文庫、1970年）を基にし、新たに３篇の随筆[20]と当時の思想の科学社の編集者であった那須正尚（なすまさなお）による聞き書き[21]を加えて再編集したものである。後述する通り、この聞き書きもまた藤本の生活と障害のあり様を伝える重要な仕事である。

藤本とし
『地面の底がぬけたんです』初版本
（思想の科学社、1974年）
装幀は飯河梨貴による

「生活のデザイン」展では、この『地面の底がぬけたんです』を含む、障害を補う道具について

（10）前掲、松岡弘之「藤本としにみるハンセン病療養所とジェンダー　―リプライにかえて―」41頁。

（11）同前。

（12）西浦直子「地域との交流／ジェンダーと障害をめぐって」（『人民の歴史学』 第232号、東京歴史科学研究会、2022年６月）。

（13）前掲、西浦直子「地域との交流／ジェンダーと障害をめぐって」15頁。

（14）高杉美智子『生活記録　みまもられて生きむ　高杉美智子』（復権文庫、1971年）、宮﨑かづゑ『長い道』（みすず書房、2012年）、津田せつ子「地に爪痕を残すもの」（『随筆集　曼珠沙華』渡辺立子、1981年）。

（15）前掲、西浦直子「地域との交流／ジェンダーと障害をめぐって」15頁。

（16）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』における藤本の発病の年齢には異同がある。第二部の年表には、「十八歳の時発病」（236頁）とあるが、藤本の随筆には「十九になったとき魔の手がとつぜん襲ったのである。発病」（45-46頁）とあり、また症状の表れが「十九の秋」（106頁）という記述もある。本稿では複数ある藤本自身の記述を考慮して、発病の年齢を十九歳とした。

（17）「フレンズ国際ワークキャンプ」のこと。1956年にアメリカ・フレンズ奉仕団（AFSC）の内部組織として発足。1961年に独立した。奈良県奈良市に所在する交流の家を設立・拠点とし、国内外でワークキャンプを行った任意団体。FIWCについては、木村聖哉・鶴見俊輔『「むすびの家」物語』（岩波書店、1997年）を参照。

（18）ハンセン病回復者が気兼ねなく使える宿泊施設として建てられた。

（19）それまではタイピスト、次に劇団の俳優をしていたが、53歳の時に自ら志願し、交流の家の初代管理人となった。ハンセン病回復者の書いた文章をタイプし、「復権文庫」と名付けて限定出版。『随筆集　藤本とし』（復権文庫、1970年）及び、高杉美智子『生活記録　みまもられて生きむ　高杉美智子』（復権文庫、1971年）などがある。1993年に管理人を辞した。飯河梨貴については、前掲、木村聖哉・鶴見俊輔『「むすびの家」物語』248頁を参照。

（20）新たに「アカシヤの土堤」（『楓』第８巻第12号、1954年12月）、「音に聞く」（『楓』第９巻第１号、1955年１月）、「うすら日」（『楓』第33巻第11・12合併号、1970年11月）が収録された。

（21）聞き取りの書き起こし原稿は飯河梨貴のアドバイスにより、藤本のひとり語り形式に改められた。木村聖哉「『地面の底がぬけたんです』出版をめぐる物語」『楓』（通巻597号、2021年１・２月合併号）を参照。

写真①　「生活のデザイン」展の会場風景

綴った入所者の短歌、俳句、詩、随筆及び聞き取りなどを実物の資料と合わせて紹介し、療養所における自助具、義肢、補装具を多角的に、また使い手の声が重なり合うように展示した（写真①）。先述の高杉美智子の随筆及び、宮﨑かづゑの証言映像も含まれた。

一方、本稿が用いるテキストを『地面の底がぬけたんです』に限定するのは、先の文献の中で特に登場する道具が多く、またそれらがひとりの入所者の生活のなかで、どのような体系で使われていたのかを示す証言であるからである。つまり、藤本が記述した生活の中の様々な細部とその繋がりから、療養所における自助具などの道具を捉え直すことが本稿の狙いとなる。

本稿の構成は以下となる。

まず、第１章は、『地面の底がぬけたんです』を通して、先の松岡の指摘にある「病状の程度やその進行がもたらす身体感覚の変容」が、その後、どのようにしてハンセン病療養所における自助具などの道具と密接に結びついて、さらに障害を補うかたちで変容したのかを検証する。

第２章は松岡及び、西浦が触れている洗濯について考察し、患者作業によるそれと、主体的な生活動作としてのそれを対比し検討する。

第３章は『地面の底がぬけたんです』の中で特に藤本が愛着のある道具として記述しているラジオについて述べる。筆者は「生活のデザイン」展で展示をした自助具付きのラジオや関連する写真に触れ、さらには回復者との面会を通じて、藤本とラジオとの関係について理解を深めることが出来た。ここでは、藤本と同じく全盲でラジオの聞き手でもある（あった）、国立療養所多磨全生園の北高[22]、田代馨[23]の姿と合わせて、ハンセン病の回復者がラジオを通じて何を希求し、その願いがどのような身体感覚を形成したのかを論ずる。

第４章は「意のままにならない道具」として、『地面の底がぬけたんです』で語られる食事のための自助具に注目し、障害のある身体が道具の使い方を取得するまでの苦労、試行錯誤及び、葛藤について述べる。

第５章は療養所における自助具などの道具が、日常生活動作の実現に留まらず、生活範囲の拡大に繋がったことをまとめ、松岡が指摘した「重症者の実際の暮らしぶり」が実際にはどのような空間を横断したのかを述べる。

最後に第１～５章の考察を総合し、療養所における自助具、義肢、補装具などの道具の意義を明らかにし、本研究における今後の課題を示したい。

１．『地面の底がぬけたんです』にみる障害とそれを補う道具

１）重症者の実際の暮らしぶり

藤本は日常における様々なシーンや、記憶を辿る記述の中で、自身の身体におけるハンセン病の症状とそれに伴う後遺症について語っている。前者は、顔に出た皮疹[24]、知覚神経麻痺[25]、運動神経麻痺[26]及び、自律神経麻痺[27]などである。後

（22）北高（1932-）兵庫県生まれ。1949年に発病。1959年に国立療養所長島愛生園に入所し、1984年に国立療養所多磨全生園に転園。作陶に熱中する。1992年に足穿孔症のため、左足を切断。その後は後遺症がもとで失明。

（23）元・多磨全生園入所者自治会会長。本名「松本馨」、著作によって筆名「松木信」「田代馨」を使用。「生活のデザイン」展のフライヤーやポスターで引用をした「不自由者の自主性ということ」（『多磨』第41巻　第11号、1960年11月）の初出に倣い、本稿では「田代馨」と表記する。2005年没。

（24）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』46頁。

（25）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』12頁、24頁など。

（26）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』295頁など。

（27）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』66頁など。

者は失明[28]、運動･知覚神経麻痺に起因する手指の屈曲と欠損[29]、運動･知覚神経麻痺に起因する足の変形と欠損[30]、さらに暑苦症状[31]や口角下垂[32]と思われる障害についての叙述もある。

その藤本の身体が置かれた場は、国公立のハンセン病療養所に限定すると[33]、1929年～1934年まで第三区府県立外島保養院、1934年～1938年まで第一区府県立全生病院（現・国立療養所多磨全生園）、1938年～1987年まで第三区府県立癩療養所光明園（現・国立療養所邑久光明園）となる。先に挙げた後遺症障害はこれらの療養所で行われていた患者作業[34]、戦時下の貧しい医療体制[35]及び、苛酷な食糧・栄養不足[36]に起因しているのが判る。

また、障害を検討するに際して、「生活のデザイン」展では、入所者が置かれた状況の変化[37]を概観することに加え、化学療法の導入以降も深刻であった知覚神経麻痺という経験をどのように捉え、伝えるかを課題のひとつとした[38]。何故ならハンセン病が治癒してもなお、多くの障害が手指や足などから痛さ、熱さ、冷たさなどの感覚が失われる知覚神経麻痺に起因し、受傷に痛みを感じないだけに、一般的な痛みへの想像力や共感では理解が難しいからだ。

この課題に対しては、多くの患者・回復者が知覚神経麻痺についての証言や記述を残しており、そういった当事者の声が彼ら・彼女たちの身体とそれをめぐる状況について知る手掛かりとなった。

松岡による検討もこうした語りを分析した研究のひとつであり、同研究は『地面の底がぬけたんです』の中で、藤本が身体感覚についてたびたび強調している点に注目する。先の知覚神経麻痺については「麻痺というのがねえ、ほんとにわかってもらいにくいのです」[39]という藤本の語りを紹介し、続けて「触覚・痛み・温度・重量感が失われるなかで、藤本がよりどころとしたのは「自分の骨に抵抗がくる」という感覚であり、目であった。だが、その視力も一九四八年になって突如奪われてしまった」[40]と書く。さらに、失明した藤本が舌で行っていた同じく失明者の夫の入れ歯の掃除[41]について言及し、「身体感覚の変容」と「重症者の実際の暮らしぶり」について、「夫婦という私的な空間のできごとのなかに封じられ、容易に浮上しにくい構造があった」[42]と考察している。

本項ではこの松岡の指摘に対して、夫が必ずしも介在するとは限らない他の生活のシーン、さらに身体感覚の変容と平行して語られる道具や自助具について検証することによって、新たな知見を付け加えることを試みたい。

『地面の底がぬけたんです』の中には、マーガ

---

(28) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』８頁、24頁など。

(29) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』295頁など。

(30) 同前。

(31) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』66頁、90頁など。

(32) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』305頁。

(33) 藤本は1919年～1920年頃まで本郷千駄木町の木下病院に入院、1925年～1929年まで身延山深敬園に身を寄せたが、本稿ではその後の国立ハンセン病療養所における生活に限定し検討する。

(34) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』266頁など。

(35) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』290頁。

(36) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』162-163頁、291頁など。

(37) 療養所によって状況は異なるが、患者作業が行われた時期、プロミンの導入以降、それまでの付添看護が切替わり療養所に職員が配置された時期、義肢装具士を配置した1987年頃以降、また入所者が超高齢化している現在という区分となる。

(38) 「生活のデザイン」展の関連イベントであるトークセッション「生活のデザインをめぐって」（2022年６月17日　国立ハンセン病資料館企画展示室よりオンライン配信）において、担当学芸員の西浦直子がこの課題について述べている。https://www.youtube.com/watch? v=Oi_U32lnVzc&t=0s（最終閲覧日2023年２月８日）。

(39) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』318頁。

(40) 前掲、松岡弘之「藤本としにみるハンセン病療養所とジェンダー　―リプライにかえて―」40頁。

(41) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』269-270頁。

(42) 前掲、松岡弘之「藤本としにみるハンセン病療養所とジェンダー　―リプライにかえて―」41頁。

レット[43]、桜[44]、くちなし[45]及び、芍薬[46]などの花を舌で愛でる描写があり、さらに舌読[47]や点筆[48]についても語られていて、夫の介助を目的とした日常生活動作や患者作業のほかに、藤本自身の欲求や自己実現に基づいた身体の動作も描かれている。

さらに、『地面の底がぬけたんです』に登場する障害を補う道具は、「白杖」[49]、「ゴム紐」[50]、「インターホン」[51]、「点筆」[52]、「扇風機」[53]、「ピンセット」[54]、「ゴムと団扇」[55]、「点字読書用のベニヤ板とゴム紐」[56]、「義足と松葉杖」[57]、「ゴム靴」[58]、「鬘」[59]、「盲導鈴」[60]、「ラジオ」[61]、「トランジスター」[62]、「草履」[63]、「補助具をつけた扉」[64]、「タオル」[65]、「点字器」[66]及び、「スプーン、フォーク、ゴム」[67]など多岐にわたっている（表①参照）。

これらの道具を表①で整理することによって、目的の日常生活動作に合わせて、様々な道具が適材適所に使われていることが判った[68]。合わせて、障害を補う道具と平行して、火箸[69]、湯呑[70]などの様々な器もの[71]、蒲団[72]、盥[73]及び、バケツ[74]などの生活道具も多く『地面の底がぬけたんです』に登場し、中には失明と手の障害を補い、身体を拭くために「先の両端に細い紐を橋のように渡し、その左右を糸で縫いつけ」[75]たタオルや、同じく手の障害を補い、箸の代わりとなるフォークとスプーン、暑苦症状をやわらげる扇風機のように一般的な生活道具と自助具との見分けが難しいものもあった。

このように多岐にわたる道具が繰り返し語られている点で、藤本が随筆という自己の見聞・体験・

(43) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』118頁。
(44) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』146頁。
(45) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』168頁。
(46) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』230頁。
(47) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』299頁。
(48) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』301頁など。
(49) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』13頁など。
(50) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』14頁など。
(51) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』30頁など。
(52) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』51頁など。
(53) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』67頁など。
(54) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』80頁など。
(55) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』90頁。
(56) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』101頁。
(57) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』110頁。藤本は足に重い障害があったが、本書においては義足、松葉杖の使い手ではない。
(58) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』112頁。
(59) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』174頁。ハンセン病の症状である脱毛についての言及があるが、藤本本人についてではない。
(60) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』181頁。
(61) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』188頁。
(62) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』189頁。
(63) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』217頁。
(64) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』244頁。
(65) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』228頁。
(66) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』300頁など。
(67) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』305頁。
(68) 藤本の叙述では必ずしも①障害②目的の日常生活動作③それを実現するための道具の順番に記されていない。表の制作にあたっては、前後の文意を参照し、筆者が適宜補足した項目もある。
(69) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』38頁。
(70) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』100頁。
(71) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』180頁。
(72) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』36頁。
(73) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』131頁。
(74) 同前。
(75) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』228頁。

所感などを綴る文学形態を用いて、極めて自覚的に療養所おける自身の生活、松岡のいう「重症者の実際の暮らしぶり」[76] が障害を補う道具並びに、様々な生活道具と密接に結びついていることを明らかにしている。

2）自己認識・藤本の身体像

『地面の底がぬけたんです』に表れる身体感覚を考察するにあたって、まずは藤本が障害のある自身の身体をどのように捉え、表現をしていたのかを整理する。

まず、題名となった「地面の底がぬけたんです」は藤本がハンセン病の発病を診断されたときに由来している [77]。藤本はそれを、身体のよって立つ基盤が突然失われた衝撃としている。

松岡も引用している「目を失うのは全部なくす」[78] ことに関しては、この言葉に続く記述にも注目をしたい。

「目を失うってことは、これは失ってみて心底わかるんですけど、全部なくすってことなんです。この病気は麻痺が深いから。

近さや遠さを計るのはもちろん、ものにさわったりものを握ったりするのも、みんな目です。お炊事や洗濯だって、目で切り、目で洗い、目でしぼってたのですし、目で書いてたわけで、もう、しばらくは、ものを言う気力もなくて……」[79]。

「目で見て切る、目で見ながら切る」などではなく、「目で切り、目で洗い、目でしぼる、目で書く」という端的な描写は、知覚神経麻痺のある手に代わって視力が日常生活動作を行う手応えを身体の内側から表している。

しかし、やがて視力をも失ったときに「全部なくす」という身体像が登場する。この表現は多様であり、記述によっては深刻さも異なる。

「盲杖日記」にある「手の喪失」という詩には「私は朽ちた一本の柱」という悲壮な表現がある [80]。

また、「自然薯のように命の根を深く島土にうずめて悠然としている。見ようによっては無気力の標本、人間のぬけがらである」[81] は障害が重いために療養所の外へ出ることが適わない状況を、やや自嘲を交えて記述している。

「あとはもうかまぼこになるだけ。かまぼこ、これは私の別名」[82] という表現もあり、これは「邪魔にならないように、いつでも押し入れの柱にくっついている」[83] 自身の身体を意表をつくもので喩えている。一方、厳しさを帯びるのは、先述した那須正尚による聞き書きである。

「この病者は、生きているうちに二度死ぬっていうんです。一度はライになった時、二度めは失明した時です」[84]。

このような身体像を通じて、藤本は繰り返しハンセン病による後遺症障害と失明の深刻さを語り、それがいかに「全部なくす」と言わしめるほど多くのものを身体から奪ったのかを訴える。この「全部なくす」のは触覚、視覚という身体の感覚だけではなく、日常生活の中の多くの可能性や、それがもたらす歓びからの切断でもあったことを留意したい。

3）身体感覚の変容

ここでは、先述の「全部なくす」身体状況がその後どのように変化をしたのかを辿りたい。『地面の底がぬけたんです』に収録されている園内誌などに発表された随筆は、自己を見つめ、生き抜く静かな決意を綴った表現が多い。例えば、障害に立ち向かう工夫については、「わが手で生の歓

(76)　前掲、松岡弘之「藤本としにみるハンセン病療養所とジェンダー　―リプライにかえて―」41頁。
(77)　前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』236頁。
(78)　前掲、松岡弘之「藤本としにみるハンセン病療養所とジェンダー　―リプライにかえて―」40頁。
(79)　前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』295-296頁。
(80)　藤本とし「手の喪失」『地面の底がぬけたんです』90-91頁。
(81)　前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』148頁。
(82)　前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』102頁。
(83)　同前。
(84)　前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』320頁。

びをかちとるために、残された可能を、えぐりだすことを学んだのである」[85] という記述がある。

随筆「闇にある道」[86] は失明してから聴覚と嗅覚に頼らざるをえなくなった新しい日々の始まりについてであり、冒頭は、「音と、声と、匂い。私は毎日この三つに縋りついて生きている」[87] という語りから始まる。これは、先の「残された可能を、えぐり出す」具体的な実践についてであり、ここでは藤本がどのような表現でそれを記述しているのかに注目をしたい。

聴覚については、「木製、ポリ製、ガラス製、瀬戸物、金物など、これらの容器をいくら探ってみても、麻痺深い手では、何で作ってあるのかさっぱり見当もつかないが、これを一つポンと打つと、瞬間その音色でたちまち区別がつくのである」[88] と書き、聴覚によって手 [89] に触れた容器の素材や質感を判別している。

次に嗅覚については、「花のかおり、新しい畳のかおり、お茶、果実のかおり。私にとってこれらは匂いの最たるものである。しかし生活の便宜のために鼻を用いるとなると、美臭ばかりを珍重がってはいられない。自分と他人のタオルや着類の嗅ぎ分けから、押入れの湿乾、腐敗食物の発見、ごみ箱のありか、お手洗等々、こまかくいえば数えきれない程の匂いを、鼻は識別しなければならないのだ」[90] と書き、様々なモノ、道具や空間に鼻を近づけてそれを把握しようとする失明者の姿を想像することができる。

これらの記述が伝えるのは、障害のある身体が生活を取り戻す過程で、残された感覚を活かし、日常生活の中にある様々なモノと出会い直している様子である。さらにそれは単にモノの認識に留まらず、例えば、「自分と他人のタオルや着類の嗅ぎ分け」が入浴、「腐敗食物の発見」が食事に関連する一場面を表すように、モノとの接触は日常生活の様々な場面に身体を繋げていくための必要不可欠な手続きであることが判った。

藤本は同じく随筆「闇にある道」のなかで、人の助けを借りずに自力でモノを把握することに関して、「自力で理解し得たこの歓びには、少しばかり誇らかなものさえ加わって、ほのぼの身内がぬくくなる。生きているのだと、そう思えてくる。これが明日へつながる力になるのだ」[91] と書いており、「全部なくす」と思われていた身体が、「ほのぼの身内がぬくくなる」ほどに変化をしたことも記している。

２．洗濯の意義

ここまで検討した通り、障害のある身体は残された感覚を活かし、時に道具を補助としながら、日常生活の様々な場面へと繋がった。また、このような実践は「身内がぬくくなる」生の充足感を得る契機ともなった。

ここでは関連して、松岡及び、西浦が言及している洗濯について考察する。

まず、松岡は療養所における女性の生活空間に関わる三つの局面に「文字・作業・結婚」をあげ [92]、作業に関しては、外島保養院における女性が担った患者作業の洗濯に着目する。

藤本はそれについて、「女は洗濯です。洗濯といっても、コンクリ板みたいなところに拡げて、石鹸をこすりつけて荒いハケで洗うんです。（略）自分が洗濯する受け持ち区域というのが、それぞれありまして、そこから何枚って勘定してきてや

(85) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』33頁。

(86) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』179-186頁。初出は『多磨』（第49巻第２号、1968年２月）。なお、『地面の底がぬけたんです』における随筆の題名は「闇のある道」であるが、初出の題名は「闇にある道」であることが判った。随筆の内容を検討したところ、「闇にある道」が正確と思われるため、本稿及び表①では初出の「闇にある道」とする。

(87) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』180頁。

(88) 同前。

(89) 手で把握することが困難な小さなモノの場合、歯を当てる場合もある。

(90) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』184頁。

(91) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』180-181頁。

(92) 松岡は「文字」に関して、外島保養院において、失明前の藤本が同部屋の他の女性の入所者の私信を代筆していたことに注目し、続いて、療養所内に設けられた外島学園の学びの意義について記述している。「結婚」に関しては、手足に不自由はないものの失明していた夫との「互いの不自由を補いあう」夫婦生活、療養所内で行われた通婚、断種手術及び、女性の入所者による職員家族の子供へのまなざしを挙げ、「男女の身体経験の差異を反映した可能性」を指摘している。前掲、松岡弘之「藤本としにみるハンセン病療養所とジェンダー　―リプライにかえて―」41-42頁。

るんですけど、荒仕事でねえ、あたしにはつらかった」[93] と語っており、ハンセン病療養所で強いられた労働の過酷さを伝えている。松岡は「作業における男女の分業や勤務実態や実績評価のありよう、実務的な処理過程などは、なお不明な点も多く」[94] としながら、「短い襦袢を着て、縄で胴を縛りあげる格好」[95]、「洗濯作業にはそれぞれ担当区域があり、洗濯して糊付け、アイロンがけを行い、もとの場所に戻」[96] す女性の作業を、男性が担った道路補修、豚舎・鶏舎の掃除、包帯やガーゼの再生と対比する [97]。

一方、時代はくだり、藤本が主体的に行っていた洗濯が『地面の底がぬけたんです』に描かれている。

「今年は我が家にも洗濯機があるのだが、頼めばすぐにでも洗って貰えるのだが、みんなに笑われながら私は時々手でする。“気兼ね”。これであろうか……。しきたりへの郷愁めいたものであろうか……。いや、それよりも遙かに強く私の心を捉えるのは、盲目となってからの私が刻んだ盥の中の日記である。

昭和二三年の晩秋、私は襦袢とタオルと座蒲団カバーを抱えて、初めて探りながら盥の前に立った。つい先日までは夜でも読書が出来た眼である。それが俄に闇となった惨めさ。諦めきれない―、しかし諦めねばならぬ涙がポタポタと落ちた。何しろ十指をなくすほど、手が深く麻痺してからの失眼である。勘の悪さもてつだって、この日の洗濯は言いようもなく辛かった。それから幾春秋。その間にはむろん先人の知恵も借りた。が、障害度は千差万別なのである。甲に出来ることが乙にも可能とは限らない。したがって本当に身につく知恵は、自分の体を目的に向かって幾度も幾度もぶっつけて、そこから生み出すより方法はないのである」[98]。

「私は四肢の不自由な、しかも盲者のする洗濯のコツを、盥からどれだけたくさん教えられたことか。やるせない無聊をどんなに慰められたことか。盥は不運をかこつ私の耳に、いつもこう囁きつづけてくれたのである。洗い物に呑まれるな。あなどるな。用具でも布でも触れるものを師と思え。愛情をもってすべてを扱え、そこから工夫が生まれる」[99]。

先の患者作業における洗濯と対比すると、藤本が置かれた状況の変化に気づかされる。まず、療養所の運営体制である。被災する1934年までの外島保養院では女性の患者に洗濯を強いていたが、1964年頃 [100] の国立療養所邑久光明園には洗濯機があり、藤本の洗濯物は頼めばすぐに洗って貰える状況にある [101]。しかし、この状況の変化のなかで藤本は1948年に失明をし [102]、失明直後は自身で洗濯をしなければならなかったことも判る。

そして、1964年頃の藤本は、それでもあえて手で洗うこと選択する。「みんなに笑われながら」と「私は時々手でする」という記述に藤本の主体性が表れている。つまり、前者は失明者が盥で洗濯をすることが1964年時点の療養所では珍しいことを示し、後者は手で洗濯することが日課ではなく任意の選択であることを示している。また、藤本はこのことによって、晴眼の友人に「ほんまに酔狂な人やなあ」とも言われる [103]。

続いて、道具についての捉え方が患者作業にお

(93) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』266頁。

(94) 前掲、松岡弘之「藤本としにみるハンセン病療養所とジェンダー　―リプライにかえて―」42頁。

(95) 同前。

(96) 同前。

(97) 同前。

(98) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』130-131頁。

(99) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』131頁。

(100) 盥と手による洗濯について記述している随筆「朝」の初出は『楓』（第28巻第11号、1964年11月）。

(101) 藤本のために洗濯を行っていたのが付き添いの入所者か、もしくは職員であるかはここでは判別出来ない。邑久光明園盲人会編『白い道標―邑久光明園盲人会40年史』（邑久光明園盲人会、1995年）の邑久光明園盲人会年表によると、看護切替準備委員会の設置は1962年、1964年には「全患協実施の「看護切替え六・五闘争」に盲人会と自治会と共に強力な運動を行う」とある。続いて1968年２月に「「看護切替準備委員会」は看護切替もほぼ完了したので解散」とある。359-362頁。

(102) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』294頁。

(103) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』131頁。

けるそれと、後年の主体的な洗濯におけるそれとは異なっている。前者はコンクリ板、石鹸、荒いハケなどが荒仕事の過酷さや療養所の貧しさを伝え、後者の盥については、失明した直後の洗濯の困難さを振り返りながらも、やがて洗濯を通じて精神的に何を獲得するかに重きを置いている。

さらに藤本は、療養所における様々な障害には、それぞれ個別の工夫で対応するしかないと説き、ここでも「残された可能を、えぐりだす」、モノとの出会い直しが、自身の体を使った無骨な訓練として語られている。

一方、指摘しておきたいのが、手指や足の受傷は患者作業に起因するだけではなく、主体的に選びとった日常生活動作によっても起こることだ。つまり、入所者にとっては目的の日常生活の実現（自己実現）をとるか、あるいはそれを諦めて安静をし、手指や足をいたわるかは、場合によってはせめぎ合うことになる。手足を使う洗濯や炊事、あるいは菜園によって受傷する場合もあり、これは入所者本人と医療の側にある、双方にとっての葛藤である[104]。

さて、松岡及び、西浦の指摘を整理すると、松岡は女性の生活空間に関わる局面のひとつに性別によって振り分けられた患者作業があったとし、西浦は『地面の底がぬけたんです』を一例とする重度の障害があった女性の作品には、共通して「炊事や洗濯、裁縫といった「女性としてのふるまい」を通して」[105]、「ハンセン病による障害が具体的にかつ克明に描かれ」[106] さらに「女性としての生きにくさが表現されている場合も少なくない」[107]と指摘する。前者は療養所の運営体制とその構造について、後者は障害の重さとジェンダー規範を軸とした優れた考察ではあるが、一方で藤本の記述にある、1964年時点ではやらなくても済む、しかし本人の意思によって行う、手と盥による洗濯はどのように解釈すべきだろうか。

藤本は続けて、「敷物や着物はおろか、掛蒲団の大包布まで苦もなく洗える自信を得たのは何時の頃からであろう。漕ぎあげて、山盛りのバケツを干場へ運ぶときの嬉しさ。麻痺深い手には難中の難物、小型のハンカチを何枚も洗い終えたときに人知れぬ誇らしさ。私は今でも盥の日記に、この楽しさを刻みたいのだ。しばらくでも動的な生を燃やしたいのだ」[108] と書く。

確かに療養所は苛酷な労働を入所者に強いてきた。戦後にかけて状況は変わり、また失明したことにもよって、洗濯は藤本にとってのかつての患者作業ではなくなった。しかし、手指の受傷の可能性があったにせよ、また洗濯機が療養所に導入されたにも関わらず、藤本は時に手と盥で洗濯することを求め、それが「やるせない無聊を慰めること」にも繋がった。この盥の挿話が伝えるのは、日常生活動作の実現が、必ずしも合理性や効率が優先される訳ではないことだ。また、依然として「女性が担うものとされてきた身の回りの細かな仕事」に関する、ジェンダー規範をめぐる問い[109]がある一方で、藤本の記述にある「自信」「嬉しさ」「誇らしさ」「楽しさ」も見逃せない。「山盛りのバケツ」もまた生の充足感の表れである。

３．掌中の玉ーラジオの意義

１）それぞれのラジオ

藤本及び、患者・回復者が願ったのは、歩く、食べる、入浴などの日常生活動作の実現に留まら

（104）「生活のデザイン」展では関連して、成田稔（国立療養所多磨全生園名誉園長）の証言を紹介した。「先生、先生はナスが嫌いか。おれは〝焼きナス〟が大好きだ。だからつくるんだ。先生は高給とりだからな、わかっちゃいないんだ」成田稔『看護の足もと“看護の行為と看護の原理”を問いなおす』（日本看護協会出版会、1988年、引用は同書再版国立ハンセン病資料館、2013年）４頁。ここでは手指や足の受傷及び、その傷に菌が入りかねないというリスクがある中で、焼きナスを食べたいがために菜園を行う入所者の様子と、それを見守るほかない医者の葛藤が表れている。

（105）前掲、西浦直子「地域との交流／ジェンダーと障害をめぐって」15頁。

（106）同前。

（107）同前。

（108）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』131頁。

（109）藤本が行っていた夫の入れ歯の掃除があった一方で、暑苦症状をやわらげるために藤本の夫が藤本に団扇を扇ぎたてる挿話などもあり（同前、67頁）、『地面の底がぬけたんです』における、夫婦における性別役割分担やその歪さについては判断が難しい。ただし、藤本は園内誌『楓』に園における老人食の必要について、「女は喉から手のでる程に求めていましても、それがなかなか声にはなりません」と書いており、園における発言権が、性別によって、また年齢によっても、公平ではなかったことを書いている。藤本とし「食事について」（『楓』第31巻第６号、1968年６月）７頁。

ない。ここでは『地面の底がぬけたんです』にも言及があり、聴覚を頼りにする失明者にとって特に重要なラジオについて考察する。

「よきラジオ買はむと思ふひとりいて貯へしぜにを心にかぞふ

これは十一年前の私の歌である。何もかも節約して、幾年もかかって、ようやくラジオを手に入れたとき、一番星をみつけておどる子心のように、深い、そしてさわやかな感動がわいた。まず横をさぐり縦をさぐり、麻痺をまぬかれている唇でダイヤルとスイッチをおぼえ、初めて自分でかけてみたとき、流れでた音楽はカラタチの花であった。

掌中の玉！それからのラジオは、私にとって正にこれであった。大切に大切に心のかてとし、無聊の友として十年を経たのである」(110)。

入所者のためのラジオ放送が療養所内または失明者が多く住む特別重不自由舎になかったわけでない。しかし、個人で持つことが出来るラジオがより重宝されたのは、聞き手の好みに合わせて放送局や番組を選ぶことが出来、さらに聞き手が主体的にラジオを点けたり消したりすることが出来るからである(111)。ここでは、前者が療養所における公的な放送であり、後者は私的なものとなる。

次の項では、ラジオを聞く北高の様子を紹介し、身体とラジオとの間にある距離を考察して、改めて藤本の記述に戻りその意味を検討する。

2）北高とラジオ

国立療養所多磨全生園に暮らす北高の居室を西浦直子と訪ねたのは、2021年12月25日、「生活のデザイン」展に関連するイベントの打ち合わせのためである(112)。北の居室に到着した時に網戸の扉越しに見えたのは、ベッドの上に横になって、ラジオを両手の間に抱きかかえてニュース放送を聞いている北の姿であった。本展の準備のため、自助具付きのラジオについては知っていたが、回復者が日常生活の中でどのような姿勢でラジオを聴いているかは、この時初めて筆者は目にした。ラジオに関しては技術の発展もあり、棚や机の上に置き、リモコンで操作をすることが一般的と思っていたが、そうではなく、家電製品を布団の上に置き、身体を密着させて聞く姿勢に失明者の生活範囲について考えさせられた。合わせて、ラジオの形状は細長く角が丸い形のもので、それは体のそばに置いて聞くには適した造形に思われた。また同園の菅野太洋義肢装具士が取り付けた、操作を円滑にするための突起状の自助具をボタンやスイッチなどに見ることが出来た(113)。

西浦と筆者が声をかけて入室を知らせたら、北はラジオを切り、ゆっくりベッドから降りて私たちと対座する姿勢になった。打ち合わせの中でラジオについては聞かなかったが、ラジオを聞く北の姿勢が特に印象に残った。

3）ラジオに見る身体感覚の表れ

ラジオを聞く姿勢に合点がいったのは、北を訪ねたしばらく後に、田代馨の居室を撮影した鈴木亜希子の写真②を目にしたときである。写されているのは、ラジオを腕の中に抱えて聞いている田代の姿で、それは北の姿と重なるものだった。さらに、先の藤本の記述を手掛かりとして、ラジオを聞く失明者の所作には限られた生活範囲に由来する以上に、次の３つの理由があることが判った。

まず、北、田代は共に失明をしており、さらに両手指に障害がある。この障害を補うために、北、田代のラジオには障害を補い操作をしやすくするための突起状の自助具が取り付けられている。つまり、ラジオがそれぞれの身体のそばにあるのは、

(110) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』188頁。

(111)「この度のホームラジオの据え付けは大きな喜びでした。これまでも、園内スピーカーよりのラジオは耳にしておりましたが、やはり自分の好きな番組を選んで聴ける自由は、何ものにも勝る喜びです」兵頭亀吉「6　嬉しいラジオ」（大島青松園盲人会編『わたしはここに生きた―大島青松園盲人会五十年史―』大島青松園盲人会、1984年）43頁。また、「生活のデザイン」展では関連して山岡響の短歌を紹介した。「暗の世界のひと日の頁閉づるべく手探りにラジオのスイッチを切る」林芳信編「手探りの雑唄」（『多磨』第41巻第10号、1960年10月）18頁。

(112) 講演会で北をゲストに招く予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大のため中止となった。

(113)「生活のデザイン」展の関連イベントである講演会「生活のデザインができるまで―願いをかたちにする人びと―」の第１回（2022年７月31日開催　国立ハンセン病資料館企画展示室よりオンライン配信）において、国立療養所多磨全生園の菅野太洋義肢装具士が北高のラジオに取り付けた自助具について述べている。https://www.youtube.com/watch? v=vYah_g1UW1w&t=4067s（最終閲覧日2023年２月８日）。

操作をするために必要な近さのためである。さらに田代の場合は、舌先や唇で操作をしており[114]、これは「横をさぐり縦をさぐり、麻痺をまぬかれている唇でダイヤルとスイッチをおぼえ」[115]という藤本の記述と重なるものである[116]。

次に、失明し後遺症の重い入所者にとって、好みの番組を選ぶことが出来るラジオは「何よりの楽しみ」[117]な時間をもたらしていたに違いない。操作をするための物理的な近さに加え、ここでは道具との心理的な結びつきを見ることが出来る。藤本はそれを「掌中の玉！それからのラジオは、私にとって正にこれであった。大切に大切に心のかてとし、無聊の友として十年を経たのである」という言葉で表している。

最後に、隔離政策による社会との隔たりがあるなかで、社会の情報を知ることが出来る、放送を通じて療養所の外と繋がることが出来るのがラジオの意義である[118]。くわえて、藤本の「無聊の友」という記述に見られる通り、長年お金を貯めてまでラジオを求めたのは、娯楽が制限された自身の身体状況に加え、閉じられた療養所内の気の晴れない時間を紛らわせたいという願いもあったからだ。

以上のことを念頭に置いた上で、ラジオは単に聴覚でのみ楽しむ娯楽や情報収集といえるだろうか。北の姿勢に関していえば、愛着のある道具に心の拠り所を見いだし、北が全身をその道具に委ねているように筆者には思えた。

合わせて藤本はなぜ、「まず横をさぐり縦をさぐり、麻痺をまぬかれている唇でダイヤルとスイッチをおぼえ」という操作方法を克明に記述したのだろう。

それは、唱歌との邂逅の前に、やはりここでも身体がモノに馴染むまでの無骨な試行錯誤が必要だったのだと藤本は強調しておきたかったのだと考えられる。これも先述の「残された可能を、えぐり出す」具体的な実践であり、単に聞ければいいという目的ではなく、目的の実現に至る過程が叙述されている。

聞き手の姿勢に加え、ラジオに見られる自助具などの工夫はラジオを聞きたいという強い願いの造形的な表れである（写真③）。それぞれの道具に使い手の固有性を見ることも出来るが、一方で、北、田代及び、藤本の似通う姿勢は、療養所や時代を超えた特徴的な身体感覚の表れとも言えるだろう。

写真②　田代馨の居室［多磨全生園］1996年
撮影：鈴木亜希子
国立ハンセン病資料館蔵

写真③　自助具付きのラジオカセットコーダー
［多磨全生園］年代不明
［縦41.0×横37.2×奥行19cm］
国立ハンセン病資料館蔵

(114) 鈴木亜希子の写真に舌と唇でラジオを操作する田代の姿を撮影したものがある。（国立ハンセン病資料館蔵）。

(115) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』188頁。

(116) 北の場合は舌先や唇ではなく、自助具を頼りに手でラジオを操作している。

(117) 水原政志「ハンセン病盲人の自助具について　テレビとラジオ」（前掲、邑久光明園盲人会編『白い道標―邑久光明園盲人会40年史』）211頁。

(118)「私にとってラジオは、社会に向かって開かれた窓であり、ただ聴いて楽しむだけではなく、新しい知識と教養をも与えてくれます」藤田英夫「29　ラジオと私」（前掲、大島青松園盲人会編『わたしはここに生きた―大島青松園盲人会五十年史―』）117頁。

４．意のままにならない道具

１）食事における自助具

第１章では様々な道具が日常生活動作を助け、第２章では盥で行う洗濯が精神の鍛練に繋がったこと、さらに第３章ではラジオとの親密な関係が身体と道具との近さに表れると指摘した。しかし、道具は必ずしも思い通りに身体に馴染み、障害を補助したわけではない。この項では『地面の底がぬけたんです』にある聞き書き「日常素描」を用いて、意のままにならない道具としての自助具を考察する。

藤本は食事のための自助具について、以下のように聞き手の那須正尚に語っている。

「箸は使えませんから、食事はだいたいスプーンかフォークです。手首のここのところに、硬いゴムをキリキリッとはめまして、その間にはさむんです。ですけど、スプーンの柄をかっちりさせられないでしょ、硬いといってもゴムの間にはさんだだけですから。それで、食べてるうちに、あっち向きこっち向きして。なかなかむずかしいんです。

この右手首の、この筋はね、長年のゴムでついたんです。一日中ここにゴムやってると、なにかにつけて重宝なんですけど。だけど、筋がついて赤くなるくらいならいいけど、近ごろは腫れてくるんです。ですから、ずっとははめないようにしてるんです。

まあ、あなた方には見当もつかないことでしょうけど……。

ともかく食べるって大仕事なんです。それですから、他人さんの前でものをいただくってことを、なるべく避けるようになってしまうんです。見苦しいもんでね」[119]。

この語りに関して、以下の３つの点に注目をしたい。

①　意のままにならない道具

掌とゴムの間にはさんだスプーンまたはフォークは速やかに食事動作を補助せず、使い手は道具を使いこなすのに苦労をしていた。

②　自助具の両義性

日常生活動作の実現と引き替えに使い手の身体を傷つけてしまうという一部の道具にみられる両義性がスプーン、フォークとゴムにも見られる[120]。

③　見られることを厭う身体

自助具を使って食事をする姿を他人に見られたくないという意識がある。

以上の①～③には、「生活のデザイン」展で力点を置いた道具に見られる「その人らしさの実現」や、道具を通じた「生活の中にある小さな自由の獲得」という解釈[121]とは異なる道具の側面を示している。例えば、①②と関連して、『地面の底がぬけたんです』には、藤本が点筆の習得に苦労をし、最終的に点筆による執筆を断念したことが語られている。その理由は点筆をうつにあたり、ペン軸を頬に押し当て力を入れなければならず、これが頬の受傷の原因となったからだ[122]。一方で、「それ（点筆のこと－引用者注）を頬でおさえて打ち進んでいると背に幾筋かの汗が流れる。せつない！だが私は生きている。たしかにこの時間だけは生を呼吸しているのだ」[123]という記述もあり、たとえ挫折するにせよ、道具を習得するまでの訓練が生の実感へと繋がったことも見落とせない。

次に②③に関連して、国立療養所多磨全生園の後藤直生義肢装具士によると、手指に障害を持ちながらも、フォークやスプーンの使用を拒んだ入所者もいたという。その理由は、使い慣れた素材と形（木製の箸など）に対する執着と、自身の障害を受け入れていない当事者の意識の表れでもあ

（119）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』305頁。

（120）関連して、自助具のひとつであるブリキの義足を履くために、足の切断術後、断端面を包帯で圧迫、創が落ち着いた後に包帯で周径を調整したことによって、断端面の萎縮など、より障害を悪くしていった患者・回復者がいたという。後藤直生「義肢装具と自助具」（『第41回ハンセン病医学夏期大学講座教本』第41回ハンセン病医学夏期大学講座実行委員会、2019年）。包帯の圧迫に関する補足は、国立療養所多磨全生園の後藤直生義肢装具士による。2022年10月４日の電子メールによる聞き取り。

（121）「生活のデザイン」展の関連イベントであるトークセッション「生活のデザインをめぐって」（2022年６月17日　国立ハンセン病資料館企画展示室よりオンライン配信）において、担当学芸員が述べている。https://www.youtube.com/watch? v=Oi_U32lnVzc&t=0s（最終閲覧日2023年２月８日）。

（122）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』302頁。

（123）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』51-52頁。

るという[124]。

藤本の語りに関していえば、障害を補う自助具を使うことまでは受け入れているが、食事を他人には見せまいとする意識に、重症者の葛藤を見ることが出来る。関連して、藤本は失明したばかりの頃に白杖を使うことについて、「それが恥ずかしいのである。それより更にかなしいのである」[125]と書き、「手が悪いために、身丈に余る杖を小脇にはさんで両手で探って歩かなければならない」[126]忸怩たる思いを吐露している。

以上を総合すると、道具は必ずしも「その人らしさの実現」や「生活の中にある小さな自由の獲得」に円滑に繋がるとは限らず、特にスプーン、フォークとゴムにも見られる通り、身体に馴染ませることが難しい道具を使わざるをえなかった当事者の葛藤を知ることが出来た。

５．生活範囲の拡大

道具を使うことが日常生活動作の実現に繋がったにせよ、道具を使わざるをえなかった当事者の葛藤を知ることが出来た。では、そういった道具の使い手たちは療養所において、どのような状況に置かれていたのだろう。

藤本がハンセン病の治療薬プロミンの導入と隔離政策のあり様について記述している箇所が随筆には２箇所ある。

「昨今園内の生活は、日に日にといっていい程の変わりかたである。何十年もかたく錆びついていた門戸が、新薬のすばらしい力で押し開かれたからである。しかし深い海の波立ちは上層だけであるように、大きな後遺症をもつ者の前には、季節労務にまねく手も、長期帰省の喜びも、農繁期には何時でも帰れる許可証も、それどころか僅か一日の行楽バスさえも来ないのである」[127]。

「変わったものである。まったく変わったものである。プロミン出現前にこの明るさと自由を誰が予測し得たであろう。しかし、どこにでも何のばあいでも上下の差があるように、園内にもまた堤の下に道がある。このみちには外部への出口はない」[128]。

「何十年もかたく錆びついていた門戸」、「このみちには外部への出口はない」という表現が隔離の状況を伝え、合わせて判るのは、プロミンによってハンセン病は治癒したが、すでに「大きな後遺症をもつ」藤本が、「季節労務にまねく手」、「長期帰省の喜び」、「農繁期には何時でも帰れる許可証」がある比較的後遺症の軽い入所者とは対照的に療養所の中に留まらざるをえなかった状況である。藤本はその格差を「園内にもまた堤の下に道がある」と示唆し、「行楽バスさえも来ない」と園に取り残された状況を強調する。

この状況を、「病状の程度やその進行がもたらす身体感覚の変容が、夫婦という私的な空間のできごとのなかに封じられ、容易に浮上しにくい構造があった」という松岡の指摘[129]と合わせて整理をすると、藤本の身体は隔離の現場となった療養所の中にあり、くわえて生活範囲は重い障害と失明によって制限され、さらに夫婦という私的かつ閉じられた空間に置かれている。プロミンの登場は確かに患者にとっての光となったが、それによって重症者は軽快退所や長期帰省をしていく若者たちの背中を見送らなければならなかった。

「生活のデザイン」展に関連すると、田代の言葉が似た状況を示している。田代はプロミンの導入によって若者たちが「社会復帰」をしていく状況のなかで、自身を含む重症者の「自主自由」を問い、「歩けないものが歩き、箒を持たなかつた者が箒を持ち、フオークを持てなかつた者がフオークを持つことが更生である」と説いた[130]。

同様に『地面の底がぬけたんです』に登場する

(124) 2022年７月５日の聞き取り。

(125) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』123頁。

(126) 同前。

(127) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』148頁。

(128) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』220頁。

(129) 前掲、松岡弘之「藤本としにみるハンセン病療養所とジェンダー　―リプライにかえて―」41頁。

(130)「社会復帰のみが更生ではない。歩けないものが歩き、箒を持たなかつた者が箒を持ち、フオークを持てなかつた者がフオークを持つことが更生である。自主自由とはかかることを意味しなければならない。」田代馨「不自由者の自主性ということ」(『多磨』第41巻　第11号、1960年11月）11頁。2022年９月17日にYouTubeにて公開した「国立ハンセン病資料館　企画展「生活のデザイン　ハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具とその使い手たち」展示解説（ノーカット版)」において、「生活のデザイン」展の担当学芸員がこの一文について解説している。https://www.youtube.com/watch? v＝3Z28VWXPlHY&t＝1670s（最終閲覧日2023年２月８日)。

道具に「自主自由」の意義を直ちに見いだすのは判断が難しいが、後述する邑久光明園の盲人会の名称が当初は「杖の友会」[131] であり、同会の機関誌が『白杖』[132] と名付けられたのを考慮すると、自助具である白杖が、視覚障害者にとっての負い目ではなく、主体的な運動の象徴として扱われていたのが判る。

更生に関しては、失明した直後に「身丈に余る杖を小脇にはさんで両手で探って歩かなければならない。それが恥ずかしいのである。それより更にかなしい」[133] ため、「部屋の隅にうずくまったなりで外気に触れようとはしなかった」[134] 藤本だったが、「今から心を裸にするのだ」[135] と決心し、杖を持ち歩行を試みたその日から「更生したのである」[136] と書いており、田代と対照的だ。田代の場合は日常生活動作の実現に重きを置いたが、藤本は障害を受け入れ、道具を持つ決意のなかに更生を見出している。

このような背景と合わせて『地面の底がぬけたんです』を検討すると、藤本が書き綴ったのは制限された空間の苛酷さばかりではないことが判る。むしろ、藤本の筆が乗るのは療養所内における外出のシーンである。

「外へ出ると風がじつに心地よい。青葉の匂いが胸の底までしみとおる。私はゆうゆうと杖を歩道にあてた。といっても手先では持てない杖である。やむをえず小脇にかかえているので、カチ……カチ……なぞと気のきいた音は出ない。そのかわり古色蒼然の靴がガバッ、ガバッと鳴る。それに和して電線に並んだ小鳥たちのおしゃべり、煮えているジャガ薯の匂い、玉蜀黍の葉ずれ、谷の向こうの犬の声など、日曜の道はまことにのどかである」[137]。

ここに見られるのは、杖とゴム靴を補助として、さらに聴覚と嗅覚を存分に活かし、「全部なくす」[138] という、かつての自己認識を払いのけるようにして、歩き出した藤本の高揚である。誠に自助具などの道具が外出に果たした役割は大きく、それは生活範囲の拡大に繋がったばかりではなく、たとえ一時的にとはいえ、藤本が「夫婦という私的な空間」[139] から離れ、療養所の中の公的な空間に移動をしていたことも判った。それは、他の入所者と交流する場であり[140]、一方で無数の自転車、オート三輪、スクーターとすれ違い、時に残菜集めの車に白杖が折られてしまう偶発的な事故にも見舞われる場所でもある[141]。

公的な空間と関連して注目したいのは、『地面の底がぬけたんです』には、1955年の全国ハンセン氏病盲人連合協議会（全盲連）の結成について書かれている点だ[142]。藤本はそれを祝い、遠慮がちに「重症の私はその恩恵をうけるばかりの不甲斐なさなのである」[143] と書いているが、邑久光明園盲人会編『白い道標―邑久光明園盲人会40年史』（邑久光明園盲人会、1995年）によると、1953年に邑久光明園の盲人会（当時は「杖の友会」のちに「邑久光明園盲人会」）の結成にあたり、藤本は７名の準備委員のひとりであり、役員選挙実施時には９名の内のひとりとして幹事を務めている[144]。

(131) 前掲、邑久光明園盲人会編『白い道標―邑久光明園盲人会40年史』348頁。
(132) 前掲、邑久光明園盲人会編『白い道標―邑久光明園盲人会40年史』351頁。
(133) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』123頁。
(134) 同前。
(135) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』124頁。
(136) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』125頁。
(137) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』89頁。
(138) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』295頁。
(139) 前掲、松岡弘之「藤本としにみるハンセン病療養所とジェンダー　―リプライにかえて―」41頁。
(140) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』12頁、18頁、32頁、48頁など。
(141) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』101頁。
(142) 前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』10頁。
(143) 同前。
(144) 前掲、邑久光明園盲人会編『白い道標―邑久光明園盲人会40年史』348頁。

以降、会の結成により療養所内で点字学習が始められ（1953年）[145]、盲人会機関誌「白杖」の創刊（1954年）[146]、看護切替え運動（1961年～1968年）[147]などが進められ、藤本が療養所内における弱視・視覚障害者の待遇改善に直接・間接的に関わっていたことも判った[148]。

あわせて、『地面の底がぬけたんです』における、園内の売店[149]、点字講習会の会場[150]、浴場[151]、第一室戸台風の被災で亡くなった中野看護婦長の碑の前[152]及び、瀬戸内海をのぞむ丘[153]などの具体的な外出先を総合して検討すると、本書における藤本の暮らしぶりとは、療養所の中に制限されるも、「夫婦という私的な空間」に留まらず、療養所内の複数の空間を自らの意志によって横断していたことが判る。

おわりに

１）『地面の底がぬけたんです』に見る身体感覚

先に『地面の底がぬけたんです』の随筆は、生き抜く静かな決意を綴った表現が多いと書いた。結果として本書は、自身の障害を受けいれ、生活の矜持を大切に生きてきた語り手の毅然とした横顔を見せる仕組みとなっている。さらに細やかな自己省察によって、障害のある身体の内側で何が起こり、道具によって何が変化したのかという本稿の課題にも応える証言ともなった。

本稿を通じて判ったのは、①障害のある身体は残された感覚を活かし、②その過程に苦労や葛藤があったとしても、③自助具などの道具を補助として身体を日常生活に繋げる実践を行っていた。④その実践は生活のシーンや目的の日常生活動作に合わせて、適材適所に道具を使うことでもあり、⑤さらにその実践によって「明日へとつながる」生の充実感を得たことが判った。

加えて、⑥道具の使い手は、歩く、食べるなどの日常生活動作に留まらず、点筆に見られる自己実現や、⑦ラジオを通じた社会との繋がりをも求めた。⑧また、ラジオを聞く姿勢に身体と道具との心理的な結びつきを見ることが出来た。

次に、⑨隔離政策という自由が制限された状況、重症者という身体的条件、場合によっては夫婦という閉じられた空間の規律があったにもかかわらず、⑩道具の使い手たちは道具を補助として生活範囲を拡大し、⑪療養所内の複数の公的な空間にも足を踏み出すことが出来た。⑫一方で、治療薬であるプロミンの登場は「社会復帰」をした比較的後遺症の軽い入所と、それが適わなかった重症者との強い格差を生んだ。それに対して、⑬「生活のデザイン」展では、田代の言葉を前面に出すことによって、日常生活動作の実現における重症者の「自主自由」と「更生」の意義を強調し、本論ではさらに、⑭障害を受け入れ、歩こうとした決意の中にある「更生」を明らかにした。

身体感覚の変容は①②⑤⑧、自助具などの道具の意義は③④⑤⑥⑦⑩⑪⑬⑭、本稿で浮かび上がった隔離の構造については⑦⑨⑫となる。

２）『地面の底がぬけたんです』に見る知覚神経麻痺

合わせて、知覚神経麻痺への理解を本論及び、「生活のデザイン」展の課題としたが、藤本の語りによれば、むしろ、それへの接近の難しさがより明瞭になった。

「麻痺というのがねえ、ほんとにわかってもらいにくいのです。（略）　痛くて泣くことはめったにないんですけど、痛さのないつらさでどれだけ泣くかしれません。こんなことをしていて、これがわからなかったのかと思うとねえ、ほんとにた

（145）前掲、邑久光明園盲人会編『白い道標―邑久光明園盲人会40年史』349頁。
（146）前掲、邑久光明園盲人会編『白い道標―邑久光明園盲人会40年史』351頁。
（147）前掲、邑久光明園盲人会編『白い道標―邑久光明園盲人会40年史』358-362頁。
（148）藤本が1939年時点で「心光会」という失明者の団体の一員として「アンマの奉仕」を園の全舎を廻って行っていた記録も残っている。会長は藤本の夫の山田法水。前掲、邑久光明園盲人会編『白い道標―邑久光明園盲人会40年史』159頁、286頁。
（149）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』192頁。
（150）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』48頁。
（151）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』100頁、112頁など。
（152）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』208頁。
（153）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』111頁。

まらず泣けてきます」[154]。

知覚神経麻痺による受傷は、「これがわからなかったのか」と思わせるほどに、病の当事者にとっても理解が難しいものだが、「痛さのないつらさでどれだけ泣くかしれません」という身を切るような言葉が示すのは、知覚神経麻痺による受傷が単なる痛みの欠如ではなく、実際に身体及び精神までもが傷を負うという痛苦の表現である[155]。『地面の底がぬけたんです』には藤本が知らずに針を踏み抜き、それが骨に達し、肉が巻くほどに時間が経ったにも関わらず、それに気づかなかった様子も描かれている。藤本は「これが生きている人間のものであろうか……。私はつくづく麻痺の悲哀を感じた」[156]と吐露している。このような具体的な描写と自己省察によって、読者は知覚神経麻痺の痛ましさの一端を、藤本の言葉を通じて理解することが出来るのではあるまいか。

さらに、藤本自身の経験ではないが、「おつけものといっしょに、自分の指をきざんだ盲人」[157]についての語りもあり、失明と知覚神経麻痺に起因する手指の切断や受傷がいかに日常の生活動作と結びついて身近にあったのかを示している。

3）ハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具の意義

残された道具はモノ言わぬ歴史の遺物ではない。道具に見られる無数の傷や劣化、体液の跡が伝えるのは、固有の身体の具体的な経験であり、私たちは残された証言や文献と合わせて、それらの道具を使った・使わざるをえなかった、患者・回復者の「生のあかし」[158]をみることが出来る。それは、隔離政策という自由が制限された状況の中でも、自身の生活に変革（デザイン）の可能性を見いだし、生活の主体はあくまで自己であると考えた、道具の使い手たちの試行錯誤と創意工夫の表れでもある。

確かにハンセン病療養所は隔離の現場であった。しかし、藤本が外出の記述によって描いてみせたのは、自身の身体が外部に向かって開かれていくような自然との交歓である。藤本は花の生命や美を「心ゆくまで知覚のある舌と唇で愛し」[159]、知覚神経麻痺について繰り返し語りながらも、「うなじまで登ってきた蟻」[160]を見逃さなかった。この身体のすぐそばにあったのが、白杖、ゴム靴などの自助具である。

最後に本稿の背景にある筆者の立場について触れておく。本稿のように身体を主題とした研究の場合、本来は存命の入所者の証言を集めるべきだったのかも知れない。しかし、2023年２月現在も喫緊の問題となっている新型コロナウイルスの感染拡大と、療養所内の少人数化（2022年５月１日時点で全国13の国立療養所の在園者計927人）及び、高齢化（2022年５月１日時点で全国13の国立療養所の平均年齢87.6歳）も相まって、道具の使い手と会い、話を聞くことは困難を極めた。その代わりとなるものではないが、筆者は文学作品に使い手の肉声を求め、遺された道具から患者・回復者の身体のほてりを感じ取ろうとした。このように制約のあった研究ではあったが、そう遠くない将来、療養所に入所者が居なくなった時、そこから何が始められるかという新たな課題のための一助となれば幸いである。

藤本の語り及び、療養所で使われた自助具、義肢、補装具には見られる工夫は、障害に直面しながらも、生きぬくための術を教える生活の知恵でもあった。藤本が盥について「あなどるな。用具でも布でも触れるものを師と思え。愛情をもってすべてを扱え、そこから工夫が生まれる」と書い

（154）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』318頁。

（155）関連して、看護する側から知覚神経麻痺による受傷をどう受け止めるかを記した一文を紹介する。「結局、知覚麻痺について、“感じないのはしかたない”というあきらめではなく、患者自身も看護する者も互いに確かめあいながら、傷害の危険をさけるための努力と経験を積み重ねていくしかない。そして患者との協力は、「正常な者に知覚を失った者の体験はわかりようはずがない」という患者の声を看護婦が謙虚にうけとめるところからはじまるのだと思う」川野和子、外口玉子編『らい看護から』（日本看護協会出版会、1980年）50頁。

（156）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』149頁。

（157）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』247頁。

（158）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』30頁。

（159）前掲、藤本とし『地面の底がぬけたんです』146頁。

（160）同前。

たように、私たちもまた、遺された道具から多くを学ぶことが出来る筈だ。

表①『地面の底がぬけたんです』における障害・道具一覧

※第三区府県立外島保養院、第一区府県立全生病院（現・国立療養所多磨全生園）、第三区府県立癩療養所光明園（現・国立療養所邑久光明園）における藤本の暮らしに限定した。
※藤本の障害及び、藤本が使っていた道具に限定した。
※表は藤本の日常生活動作の実現及び、障害を補助する道具を検討するため、患者作業及び、戦時下の労働とそれに使われた道具は除外した。
※自助具及び、生活道具に関しては原則的に原文の表記に従った。また、［　］内は筆者による補足とする。

題	障害など	目的・目的の日常生活動作	自助具・障害を補う道具	生活道具
第一部 作品				
足あと	失明・手足の障害			
くだける	失明・知覚神経麻痺 ・手指の欠損	牡丹餅を食べる・お茶を飲む	杖・ゴム紐、さじ	湯呑・小皿・濡れタオル
アカシヤの土堤				
あの日この日　一	失明・知覚神経麻痺	桜、若葉の鑑賞・洗濯・散歩		
あの日この日　二	手指の障害・知覚神経麻痺	食事・飴玉を舐める		
あの日この日　三				
生きている	失明・知覚神経麻痺 ・足の変形	落とした物を探す・散歩 ・コンクリ―トの段を登る	インターホン・杖	
音に聞く	失明・知覚神経麻痺	座蒲団、蒲団を干す・薬罐の所在を確かめる・お茶を飲む ・厠にいく	火箸	風鈴・座蒲団・蒲団・菓子皿 ・小笊・薬罐
まぼろし		散歩		
点字教室	失明・知覚神経麻痺 ・手指の欠損	舌読・点字を打つ	点筆、ゴム・［点字器］・［練習用の］絵葉書	
鼓		ラジオ放送を聞く		ラジオ
こうさくするもの	後遺症による容貌の変化	お茶を飲む		コーヒー茶碗
季節	知覚神経麻痺・手指の欠損 ・失明・自律神経麻痺 ［暑苦症状／うつ熱症状］	暑苦症状を和らげる	扇風機	団扇
心の手をふって				
光芒	失明	手紙を読む［付添いが代読］		火鉢
ピンセット	失明・知覚神経麻痺	物をつまむ	ピンセット	
ある朝	視覚障害	椿の観察	杖	
盲杖日記	失明・手指の欠損・自律神経麻痺［暑苦症状］／知覚神経麻痺	外出・テレビ鑑賞	ゴム靴・杖・扇風機 ・ゴム、団扇	テレビ
謎				
くらしの絵　一	失明	着替え・お茶を飲む	杖	袖なし・湯呑
くらしの絵　二	失明・指の欠損	舌読	点字書［を開いて固定するための］ベニヤ板、ゴム紐・［眼を保護するための］眼鏡	
くらしの絵　三	失明	葉書、餡パンの所在を探す		火鉢
分身	失明・［入所前の］容貌の変化	容貌・視力を確かめる		鏡・木箱・塵箱
音と声から　一	失明			薬罐
音と声から　二	失明	海を見る［感じる］・味噌汁を飲む・外出	ホーク・ゴム靴	食卓・着物
秋	失明・知覚神経麻痺	マーガレットの花を愛でる		花筒
穴　一	失明	歩行	盲杖、杖	
穴　二		柿の収穫		笊
朝　一	失明・手指の欠損 ・知覚神経麻痺・足の障害	洗濯		洗濯機・盥・襦袢・タオル・座蒲団カバー・敷布・着物・掛蒲団・大包布・バケツ・ハンカチ
朝　二	失明	部屋の拭き掃除		雑巾・石鹸を塗る刷毛
底　一	失明・手足の障害	外出	杖	
底　二	失明・手の障害	食事・葡萄酒を他の入所者に飲ませる	ゴム、ホーク	湯呑
うたげ	失明・知覚神経麻痺	外出・着替え・蒲公英、桜を愛でる		
黴びたまま	失明・知覚神経麻痺 ・足裏の受傷	入浴・散歩	杖	風呂バケツ・タオル・針 ・座蒲団・火鉢
像　一	失明・知覚神経麻痺・足の障害	舌読・歩行・季節を確かめる	点字詩集	
像　二	たん瘤・失明・知覚神経麻痺	歩行・水を汲む・押入れに夜具を入れる・下駄箱から履物を出す・用便		蛇口・夜具・下駄箱 ・履物・ドア

題	障害など	目的・目的の日常生活動作	自助具・障害を補う道具	生活道具
いたみ	失明	外出・食事	杖	飯盒
私　一				
私　二	失明・知覚神経麻痺	散歩・くちなしの花を愛でる・ゴム靴を履く	ゴム靴	
私　三	手指の欠損	番茶、団子、杏の香を嗅ぐ		食卓・石鹸・髪油・ガスボンベ・小笊
福音	失明・手指の欠損	整髪・パーマ		
闇にある道 ※初出表記に倣う	失明・知覚神経麻痺	物の素材を確かめる・外出	盲導鈴・杖	［木製、ポリ製、ガラス製、瀬戸物、金物などの］容器、畳
闇にある道　声一	失明	声の聞き分け		
闇にある道　声二	失明	歩行	杖	
闇にある道　匂い	失明	空間と物の状態を確かめる		畳・タオル・着類・ごみ箱
峠みち　その一	失明・知覚神経麻痺	ラジオ放送を聞く	ラジオ・トランジスターラジオ	
峠みち　その二				
峠みち　その三	失明	行李から物を出し入れする		竹行李・タオルのねまき、毛糸のはらまき・皿・小鉢・大笊・小笊・ざぶとん・菓子罐・えもんだけ・下駄るい
盲友	失明	代筆［失明前］		
痛み		手紙の代筆［失明前］		
面影	足指の知覚神経麻痺	歩行	杖	下駄
この道	失明・手足の知覚神経麻痺	外出・物を持つ・お茶を飲む		タオル・匙・草履・湯呑
ほしかげ	失明・手指の障害・知覚神経麻痺			
うすら日　一	失明・手指の障害	体を拭く	［使いやすいように紐を取り付けた］タオル	
うすら日　二	失明・知覚神経麻痺	芍薬を愛でる・舌読	点字本	
うすら日　三				
第二部 地面の底がぬけたんです				
発病	歯が弱くなる	食事		
父の死＝通院	失明・知覚神経麻痺	戸の開閉・入浴・歩行など	［補助具をつけた］戸	タオル
母の死＝家出・深敬園へ				
外島保養院時代	手指の屈曲・知覚神経麻痺	代筆［失明前］		
外島保養院時代　結婚	失明・知覚神経麻痺	夫の食事の介助・夫の入れ歯の掃除		
外島保養院時代　逃走頻々				
外島保養院時代 赤化追放事件				
東京・多磨全生園の四年間				
光明園に帰る				
光明園に帰る 誰か死ぬ日々＝戦中	手足の知覚神経麻痺	食すために草、石蕚、貝を取る・調理・食事・用便		［泥をこねて作った小さな］竈
光明園に帰る　失明	失明・手指の欠損、反り足・足指の切断・知覚神経麻痺	夫の介助・歩行・食事など・舌読の練習・点筆で執筆・口述筆記	盲導鈴･［舌読練習用の］亜鉛板･点字本・点字をうつ、あの細い定規［点字器のこと］･ゴムと［ペン軸を改造した］点筆・［朗読などを聞くための］テープ	
光明園に帰る　日常素描	手指の障害・［口角下垂と思われる］唇の障害	着がえ･前掛けのひもをしばる･蒲団をたたむ・お勤め・食事・入浴・用便	［眼を保護するための］眼鏡・ひも・スプーン・フォーク・ゴム	着物・帯・前掛け・ふとん・食罐・石鹸・タオル・チリ紙
光明園に帰る　瀬溝架橋				
光明園に帰る　盲人の笑い	失明・知覚神経麻痺による受傷	文章を書く		

［講演記録］
鶴見俊輔「ハンセン病との出逢いから」

日　付：2001年７月１日（日）
場　所：多磨全生園コミュニティセンター
主　催：高松宮記念ハンセン病資料館

１．あるハンセン病患者との出会い

いま、成田〔稔〕運営委員長[1]からご紹介がありまして、大谷〔藤郎〕先生[2]のご挨拶がありました。お二人はハンセン病についての専門家なんですが、私はまったく素人としてこの中に導かれてきたので、私が会ったことからお話ししていきたいと思います。

1945年に、戦争は負けて終わったんですけれども、それから間もない頃に、リトアニア人の医者から私のところに電話がかかってきたんです。

「今日、県の役人が自分のところに来るんだけれども、自分は日本語がよくできないからうちまで来て通訳してくれないか」と言うんです。

そこに行くと、少年が座ってるんです。私はびっくりしたんですけれども、「あっ」と思うほどの美少年なんですよ。県の医者が来て、それに、リトアニア人の医者が、英語を使って言ってるんですが、「この少年を診ているんだけれども、膝が曲がらなくなって、自分はハンセン病だと思う」。県から来た役人も医者なんです。見て、「そうだと思う。県で引き取ろう」と言ったんです。

そこまでなんですよ。私が出会ったのは。戦争が終わってすぐなんです。

２．山荘に生きる帝政ロシア

それから10年経って、私は群馬県の草津の療養所〔国立療養所栗生楽泉園〕に、大江満雄[3]っていう詩を書く人に連れられて行ったんです。その時、『近代文学』を始めた山室静[4]も同行していました。

草津に行ったから、ふと思いついて私は、「ここにロシア人はいませんか？」って言ったんですよ。そしたら「いる」っていうんですね。彼の名は、コンスタンチン・トロチェフ[5]。

私は大江さんといっしょに、そのロシア人の家を訪問したんです。寒いところなんですが、掘っ立て小屋みたいなところで。一歩入ったらそこは、帝政ロシアなんですよ。これには驚いた。

どうして帝政ロシアかっていうとね、ロシア正教のアイコンが置いてあるのと、もうひとつは、占領下ですよね、占領軍の兵隊が『LIFE』やなんかのグラフ雑誌をとるでしょ。その頃、トルストイの『戦争と平和』っていう長編小説を、英語の映画にしたんですね。そういうものの断片が、切り抜いてこうやって、壁に貼ってあるんですよ。本なんか置いてあるんですが、ロシア語の本は、ポタペンコ全集が置いてあるんです。みなさん、ロシア文学に通じておられる方、あると思いますが、ポタペンコに通じておられる方はおられないでしょう。

少年は、青年になっていますが、その祖母、お

---

(1)　成田稔（1927-）。医師。多磨全生園園長などを経て、2007年～ 2021年国立ハンセン病資料館館長。この講演当時は、高松宮記念ハンセン病資料館運営委員長。講演会の司会を務めた。

(2)　大谷藤郎（1924-2010）。医系技官。厚生官僚としてハンセン病政策に携わる。1993年から高松宮記念ハンセン病記念館館長。らい予防法廃止に取り組み、1996年法律の廃止を実現。その後もらい予防法違憲国家賠償請求訴訟では証人となり2001年の原告勝訴に導いた。この講演は、同訴訟の判決に対し国が控訴を断念して判決が確定した2001年５月23日から１か月余しか経っていない高揚した雰囲気のなかで開催され、大谷も訴訟の意義について触れる挨拶をした。

(3)　大江満雄（1906-1991）。詩人。1950年代からハンセン病療養所の詩人たちと詩作を共にし、1953年には合同詩集として日本ライ･ニューエイジ詩集『いのちの芽』（三一書房）を編集・解説した。1991年に亡くなるまで、40年余にわたってハンセン病療養所の詩人たちと親交をもった。

(4)　山室静（1906-2000）。詩人。『近代文学』を主宰し、島比呂志の作品なども掲載。『高原』、『愛生』で創作（小説）や評論の選者も務めた。栗生楽泉園訪問を伝える文章に「ライ院訪問記」（『近代文学』第９巻第11号、近代文学社、1954年11月）がある。

(5)　コンスタンチン・トロチェフ（1928-2006）。亡命したロシア人貴族の両親のもと、神戸で出生。1946年栗生楽泉園入所。ロシア語、フランス語、英語、日本語を話したが、詩は日本語だけで書いた。詩集に『ぼくのロシア』（昭森社、1967年）、『うたのあしあと』（土曜日術社出版販売、1998年）がある。

ばあさんといっしょに住んでいたんです。ですから一歩入った家では、プーシキン全集とポタペンコ全集が置いてありました。ロシア文学は、ゴンチャロフまでしか認めないんですよ。

ゴンチャロフは私も読んだことがあります。面白いもんです。日本にも来たことがあるんです。『フリゲート・パルラダ』っていう旅行記を書いています。日本で川路聖謨（かわじとしあきら）と交渉した外交官ですね。川路聖謨とゴンチャロフは、通訳を介してお互いに認め合ってるんですよ。川路の日記にも出てきますし、ゴンチャロフの記録にも出てます。

おばあさんは、あとは認めないんですよ。「トルストイ？　あんな人が出たからロシアはアカになったんだ」って言うんですよ。ロシア正教をないがしろにした最初の文学者だって言うわけ。おばあさんは、トルストイの隣に住んでいたことがあるから、あんなやつは大嫌いだ。偽善者だということがわかっているって言うんですよ。びっくりしましたね。

そのおばあさんの話を聞いてみると、そのおばあさんは80歳を超えるまで生きていたんですが、80超えて、身振りの美しい人で、声も朗々としてるんです。１冊とって、プーシキンの朗読をしてくれましたが、私はロシア語がわからないんですが、見事な朗読でしたね。

彼女の話を聞くと、彼女はロシアの侯爵の生まれで、娘の時に、劇団で舞台に立ったこともある。やがてポーランドの伯爵と結婚したんです。ですから、プリンセスでカウンテス〔伯爵夫人〕ってわけですね。ロシアは、プリンセスの子どもはみなプリンセスなわけですから。

結婚した人は、第一次世界大戦、一次ですよ、戦争に行って戦死してしまうんです。彼女は非常に気落ちをして、ロシアの外に旅行に出ることを思い立って、中国、そして中国東北部、その頃の満州まで来たんです。その頃にロシアで革命が起こって、彼女の持っているルーブル紙幣は値打ちのないものになった。文無しで満州に、３人の小さな娘といっしょに向かった。

ハルピンにはロシア人がたくさんいましたから、ロシア語の新聞がいくらか出ています。日本から、松旭斎天勝（しょうきょくさいてんかつ）の手品が来ていることを知ったんです。手品のショーとして、自分を使ってくれないか、と言って、天勝に頼みに行くんです。ロシア人で大変美しい人ですから、天勝は、前座でちょっと出てもらうのはとてもいいでしょう、と、雇ったんです。天勝一座と一緒に日本に入ってきたんです。日本で非常に貧乏な暮らしをしているんです。

そのうちに、ロシアでは赤露軍と白露軍が闘っていますね。白露軍のほうに勇敢な侯爵がいて、巡洋艦をひとつ乗っ取って、九州の長崎まで入ってくるんです。その当時、大変なニュースだったんですね。それと、娘の１人が結婚しまして、息子が生まれた。だから、ロマノフ王朝の系図で言えば、息子もプリンスですね。

非常に貧乏な暮らしをしているので、そこで、ハンセン病にかかるのです。潜伏期間が長いですから、美少年のままずっと育っていくのです。

娘〔少年の母〕は大変な美人なんですよ。大正時代の日本というのは、普通には洋食を食べないですね。洋服っていうのは出てくるのですが、洋服の下に下着をどういうふうにして着るのか知らないんですよ。洋服を着て、どういうふうに歩いて、どういうふうに座るのか、知らない。それを教える人が必要なので、芝居だったらなんとか誤魔化せるのですが、映画を撮るとなると誤魔化せないでしょ。食べるときとか。座るときとか、立って歩くとか。そういうことを教えるための学校をつくったのです。

松竹では、新しい西洋流の身だしなみを身に付けなければいけないというので、演技部長のもとで教えたんですね。その１期生の中には、鈴木傳明（すずきでんめい）という、昭和の初めに大変名高い俳優もいました。

私は掘っ立て小屋の中で、その話を聞かされてびっくりしてね。私は、もともとその少年を連れていくきっかけをつくったけど、何にも知らなかったんですよ。うちへ帰ってすぐ、田中純一郎（たなかじゅんいちろう）の『日本映画発達史』（中央公論社、1957年）と

いう３巻ものの本があるので、ひっくり返してみたら、名前がちゃんと出てるんです[6]。そのおばあさんの言うことは、すべて真実だったんです。

そのおばあさんの娘は、日本の映画が始まった頃の主演女優なんですよ。２つ長編映画を撮っているんです。なぜ、今まで名前が知られていないかというと、関東大震災で２つともフィルムが焼けちゃったからなんです。残ってないんです。だが、正統的な映画発達史には名前が残っているんです。

おばあさんは、プリンセスでカウンテスですから、非常に誇りの高い人で、この話は外で言ってくれるなって私に釘を刺すんです。名前も出してくれるな。この家の父親は、自分の家の侯爵よりもっと身分が高いんです。ロマノフ王朝の皇帝に近いんですね。だから、さらに隠したいと言うんです。プライドがあるから、近所の人にも、自分はロマノフ王朝の侯爵家の生まれであるとか、この子は別の侯爵の息子であるとか、話をしないんですよ。

びっくりしましたね。いやあ、これには驚きました。

その夜、山室静と大江満雄と私を訪ねて、園長さんがやってきて、いっしょに飯を食べて夜遅くまで話をしたんです。そうしたら、〔鶴見は会場の壁を指さして〕そこに肖像画が出ています。矢嶋良一（やじまりょういち）という人です[7]。とてもざっくばらんな話をする人でね。この少年を引き取った過程について、話をしたんです。

検査をしたところ、おばあさんには、ハンセン病の菌は出ていなかったんです。だけど、少年１人を草津の療養所に放り込んだらどうなるかを考えて、自分〔矢嶋〕は母親も同病であるということにして、引き取って、ひとつの家を、その掘っ立て小屋なんですが、与えたというんです。

私は、その矢嶋さんの話にも感心しましたね。役人でしょ。役人にもこういう人がいるのかと思って。あっ、という感じでしたね。

その少年は、おばあさんと少年、という関係だけなんですよ。おばあさんから、ほとんど口移しで、ロシア語、それからロシアの貴族はみんなフランス語をしゃべりますからね、フランス語。それから英語。すべておばあさんから教えてもらったんです。読み書きをちゃんとできます。

それからその少年自身が近所の人と付き合いがなきゃいけないでしょ。その少年は付き合いの中から日本語の日常語を覚えたんです。いろんなお知らせなんかが来ますから、いくらか読み書きをできなきゃいけないから、それを覚えたんです。

その少年にとっては、ロシア語、フランス語、英語、日本語の順で覚えたんですね。彼はその最後の日本語で、詩を書き溜めてたんです。

３．母語でない言語で書かれた世界文学

私を草津へ連れて行った大江満雄さんは、非常に感動してね、彼は酒飲みなんだね。その掘っ立て小屋に行ったらとっておきのウォトカかなにかを飲ましてくれたんですよ。私は酒はぜんぜん飲めない。その80過ぎのばあさんは彼〔大江〕をものすごく歓迎して、抱擁してわあわあやってるんだ。

それは一時の感動じゃないので、東京に帰ってから、昭森社っていう彼の懇意な出版社と交渉して、その少年の詩集を出したんです。『ぼくのロシア』（昭森社、1967年）という詩集です。

それからさらに何十年も経って、第二詩集を出した。それは、『うたのあしあと』（土曜日術社出版販売、1998年）っていうんです。それから読んでみましょう[8]。

　　雪だるま

くるしい
ながい
ふゆ
まだ　つづく

(6)　田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ　活動写真時代』（中公文庫、1975年）318-319頁、344頁に、キティ・スラヴィナ、エカテリナ・スラヴィナの記述が見える。エカテリナ・スラヴィナはトロチェフの母の本名。キティ・スラヴィナは芸名。

(7)　矢嶋良一（1905-1994）。医師。栗生楽泉園、多磨全生園の園長を歴任。講演会の会場となった多磨全生園コミュニティセンターには、歴代園長の肖像画が掲げられており、鶴見はその肖像画を指さして話をしている。

(8)　コンスタンチン・トロチェフ『うたのあしあと』（土曜日術社出版販売、1998年）17-18頁。

白い　しずかさと
うつくしさを
ダイヤ　の　ほし　みつめてる

だれか　つくった
かわいい
雪だるま
くろい　くちで　わらって
よろこんでる
まだ　つづく　ながい
ふゆに……

私は、ジョゼフ･コンラッドを思い出しました。

コンラッドはポーランド生まれなんです。両親が早く死んでしまったので、叔父さんに育てられたんですが、彼が生まれついた言葉は、ポーランド語、ロシア語。それから彼は、両親が死んでますから、自活しなくてはいけないので、船乗りになって、フランスの船に乗ったのです。そこで、フランス語を覚えたんです。やがてイギリスの船に乗り換えた。そこで英語を覚えたんです。最後の英語っていうのを、なんでか知らないけど気に入ったんですね。これで小説を書き始めた。40歳くらいになって船長をやめて､イギリスに降りて、英語で書いた小説を発表して、イギリスで死んだんです。

ケンブリッジ大学の英文学の教授で、Ｆ・Ｒ・リーヴィスっていう人がいるんですが、リーヴィスはとても厳しいんですね。始まりから英語で小説を書いた人で、その英語が読むに堪える人は、５人しかいない。強いて言えば５人半だ。その半人分を入れてどういう人かというとですね、ジェーン・オースティン、これ、女ですから、大学を出てません｡台所で書いてたんだから｡ジョージ・エリオット。男の名前ですが、女です。大学を出てません。ヘンリー・ジェームス。これはアメリカ人で、これも大学出てません。イギリスに渡ってきて、イギリスの国籍を取った人です。それから、ディケンズ。これは貧しいところから出てきた人で、議会〔法廷〕の速記者をやってた人です。これも大学を出てません。まあ、大学の反対演説をやってるみたいだけれども（笑)。このディケンズは半分認めるって言ってるんですけれども。もう一人はＤ・Ｈ・ローレンスです。ローレンスは大学を出てることは出てるんですが、これは炭鉱夫の息子で、自分の教授の細君と駆け落ちしちゃったんですよ。まあ、駆け落ちしても大学出は大学出かな。

リーヴィスはケンブリッジ大学の教授なんですけれども、イギリスの大学で教える学術語っていうのは、暮らしの言葉、生活語から人を引き離す、と考えるんですね。

日本ではそういう考えがないから、日本のノーベル賞作家は２人とも東大出てるんです。珍しいことです（笑)。

そして、コンラッド。40歳になってから英語で小説書き始めたので、コンラッドのもともとの英語っていうのは、文法上の間違いがとても多いんですよ。それから、しゃべるのは相当下手だったんです。彼は、大作家になったから、アメリカのイエール大学の英文学で自作の朗読をしたんですね。彼を呼んだ、ウィリアム・ライアン・フェルプスという英文学の教授が、こんなでっかい自叙伝を書いて、そこに１章費やして書いています。

「こんなに素晴らしい英語が、こんなにひどく読まれたのを聞いたことがない」っていうんです。もの凄いひどい発音で、これは40歳になってからでは直らないですよね。

グレタ・ガルボって知ってますか？　私の最も好きな女優の１人ですが、ガルボはスウェーデンのデパートの売り子だったんだ。それをスウェーデンの俳優がスカウトして、ハリウッドに来た。ハリウッドはサイレント映画でしょ。だから、ぐーっと世界のガルボになるんですけれども、途中、トーキーに代わるでしょ。トーキーになっても、ガルボは勉強家だから、ある程度聞いてわかる英語をしゃべれたんですよ。ほかの連中はだいたいつぶれちゃうんです。ポーラ･ネグリとかね。そういうのはみんなつぶれちゃう。世界を席巻したヴァレンティノだってつぶれちゃうでしょ。だけど、ガルボは残ったんです。だけど、英語はうまくないね。

「ニノチカ」（1939年）っていう映画があるんで

す。聞いてみると、「ニノチカ」は素晴らしいんですよ。「ニノチカ」は、監督〔エルンスト・ルビッチ〕もよかったんです。フランスから来たんですけれども。1936～37年当時のソビエト、ロシアがどういう国だったかをきちんととらえている珍しい映画なんです。ソビエトから派遣された先乗りが、どんどん堕落しちゃって、愉快な暮らしにおぼれちゃうんで、ソビエトは今度は女の偉い官僚を送るんです。それがガルボなんです。ガルボは英語がうまくないんです。だけど、うまくない英語がものすごく効果を発揮してる映画でね。あれは映画史に残るすばらしいものですね。

いま、コンラッドの話をしてるんだけれども。コンラッドの英語はその域に達しなかったんです。これは、イエール大学の英文学の教授が、自伝に書き残しているくらいまずかったんです。

４．交流（むすび）の家建設運動

大江満雄さんといっしょに訪問して以来、私は、この少年といくらかのつきあいが生じました。私は京都に住んでるんです。当時、新幹線はなくて、私は東京で仕事があると夜行で京都に帰って、講義をしてたんですよ。

あるとき、東京に出る用事があって、この少年に会う約束をしました。病気が進行して、もう片足を失ってたんですよ。だけど、勇気のある人で、バーンとバイクで東京までやってくるんですね。電話で、神田美土代町のYMCAに予約してあるから、そこの玄関で会おうということになった。

私が行くと、彼はYMCAから宿泊の予約を取り消されて、宿泊を断られているところだったんですよ。私は口添えをして、もう予約を受け入れてるじゃないか。この人は、園長から伝染しないという証明をちゃんともらっているのに。園長さんはその矢嶋さんです。泊めるのは当たり前じゃないかと言って。

ここはYMCAじゃないか。Young Men's Christian Association。これはクリスチャンです。泊められないなんていうんだったら、YMCAのＣだけ取っちゃって、YMAって看板を書き換えてくれって言ったんですよ。今日は、大学反対と、キリスト教反対みたいになっちゃうけどね（笑）。

なかなかそんなことじゃ説得に応じませんね。「ほかのお客が不愉快に思うからだめです」って言うんです。ほかのお客が不愉快に思うかどうかが基準になっている。

私は、夜行で京都に帰ることになっていて、こりゃ困ったことになったなと思った。東京に家を持ってないんだ。

しかし、この少年は機転の利く人なので、公衆電話から何度も電話をかけて、横浜にアメリカ人の経営している会員宿舎があって、そこに予約が取れたから大丈夫だと言ったので、そこで別れたんです。

夜行で京都に帰って、大学のゼミがあったので、そこでその話をしたんです。相当、憤慨が残っているのでね。こういうことがあったと。そこは同志社ですから、キリスト教の大学です。キリスト教も困るっていう話をしたんですよ。学生は20人以下だったかな。そのうちの１人がいまここに来てます。木村聖哉（きむらせいや）。私といっしょに本〔『「むすびの家」物語：ワークキャンプに賭けた青春群像』岩波書店、1997年〕を書いた人です。

それから数日たったら１人、柴地則之（しばじのりゆき）っていう学生が、１人で訪ねてきて、「そういう人が泊まれる家をつくりましょう。もう土地は予約してきました」っていうんですよ。

満20歳ですよ。ぜんぜん財閥の息子でもなんでもないんです。柘植（つげ）というところの旅館の息子ですね。本当にびっくりした。

そういうことに憤慨することは、進歩的知識人は誰でもできるでしょう。だけど、自分が働いているところで信頼されて、よし、それじゃあ土地を提供しようって、言ってもらえる人がどれだけいるんですかね。本当にびっくりしました。忘れることができません。

それで、家をつくり始めたんです。それが交流の家[9]なんです。つくっている途中で、もちろん

(9)　交流の家は、奈良市大倭にあるハンセン病回復者の宿泊施設。現在も、特定非営利活動法人むすびの家として活動を続けている。1963年ハンセン病回復者が宿泊施設の利用を拒否された事を知ったフレンズ国際労働キャンプ（FIWC）関西委員会のメンバーが呼びかけ、大倭紫陽花邑から土地の提供を受けて建設運動を進め、1967年に竣工した。

受け入れた組織側、その人は偉い人ですよ。矢追日聖[10]っていうんです。大倭っていう宗教施設です。

しかし、建設の途中で、近所の人たちが、学生を取り囲んじゃったんですよ。こういうのは困る、って言うわけですね。その時に学生側は、「皆さんの同意を得ないで、ここにハンセン病回復者の宿舎を建てることはしません」と言って、みんなの見ている前で、途中まで積んだブロックを、自分で壊しちゃったんです。それにびっくりしたんですね、囲んでいるほうは囲みを解いて。

学生はあきらめません。それから、学生には夏ごとに大きな時間がありますからね、三々五々、その反対している人たちの家を訪ねて行って。京大の医学部に西占〔貢〕[11]っていう教授がいたんです。それは、さっき大谷〔藤郎〕先生の紹介された小笠原登[12]の流れを汲んでいる人なんですね。その西占という人が書いてくれた、プロミン〔化学療法の治療薬〕が出来てからハンセン病は伝染しなくなったという内容の文章を持って、学生が三々五々、男女が組になって訪問するんですね。それを家で迎えた側も、学生の誠意っていうものを感じるんです。なんとなく軟化してきたという感触を得たときに、ババっと家を建てちゃったんですよ（笑）。建てちゃったら、近所の人たちも、壊してくれって、もういっぺん囲むことはしなかったんです。

ここには、理想主義だけではとらえられない、一種の知恵があります。これは、戦前はよく知りませんが、戦後の学生運動の中では珍しいやり方です。妨害があってこれは突破できないと知ったときに、じっとそこで座り込んで止まってしまう。あるいは後退もする。しかし目標からは目を離さない。これは実現できるという状況を見極めて、すっとそこまで達してしまうんです。驚くべき知恵ですよ。私が知恵をつけたんじゃありません。別に参謀はいたんです。とにかく素晴らしい学生たちですね。

その運動はけっこう知れ渡ってきたんですね。いまNews23〔TBSテレビ〕に出てる筑紫〔哲也〕っていうのは同じ組織にいたんですよ。関東のほうの組織の一員だったんです。関東のほうはどうしても理論が中心になるんです。だから「ハンセン病の差別はするな」って理論はやるんだけれども、関西のほうは、バッとそれだけのものをつくっちゃう。だからどうも気後れをしてね、しかし彼は朝日新聞に入ってから、ずいぶんいろんなところにニュースを届けてくれたんです。

藤楓協会[13]、ここ〔高松宮記念ハンセン病資料館〕もその傘下にありますが、理事長との話し合いとか、そういうものの斡旋にあたってくれたんですね。藤楓協会理事長と私は会ったんです。藤楓協会っていうのは皇族の支援を受けてるし、貞明皇后とかいろんな話があるでしょ。保守的な人だろうと思って、叱られるだろうと思って行ったんですよ。そしたら、「あなた方のやってくれてることは、とてもいい。いい学生たちだ」って言うんですよ。本当に裏表がないんです。喜色満面で好意的なんだ。びっくりしたね。

つまり、ハンセン病に長く関わってる人間は、当面はその時の国策と結びついた医学理論、これは間違った理論なんですが、それを受け入れているように見えても、当事者はわかってるんですよ。「ああ、藤楓協会ってそういうところなのか」とわかってびっくりしました。理事長はもう老人でしたがね。個人の思い出です。

5．移民が文化をつくる

交流の家が出来てから、トロチェフさんは何回も来ました。２つの詩集が出て、先ほどの「雪だ

（10） 矢追日聖（1911-1996）。宗教家。1945年大倭教を立教宣言。1947年奈良市大倭町に生活共同体大倭紫陽花邑を創設。1963年ハンセン病回復者の宿泊施設（交流の家）建設のために土地を提供し、学生たちの建設運動を支援した。

（11） 西占貢（1920-1985）。医師。京都大学皮膚病特別研究施設で、小笠原登の後を継いで２代目施設長を務めた。交流の家建設にあたっては、住民の反対に対し当時のハンセン病が治療可能であることなどの知識を伝える役割を果たした。

（12） 小笠原登（1888-1970）。医師。戦前より京都大学皮科特別研究室（後の皮膚病特別研究施設）でハンセン病外来診療を行う。ハンセン病の発病は体質を重視すべきことや不治ではないことを主張し、当時行われていた患者の強制隔離・断種に反対した。

（13） 1931年に設立され絶対隔離政策を推進する役割を担った財団法人癩予防協会を前身として、1952年に貞明皇后の遺金をもとに藤楓協会と改組された。2003年から財団法人ふれあい福祉協会と改称されて現在に至っている。本講演会が行われた時点では、高松宮記念ハンセン病資料館は藤楓協会が運営していた。

るま」という詩があるわけですね。これは日本語としたら非常に傍系のものと思われますか？

それはね、100年経ち、200年経ち、もうあと何年も経てば、日本語についての見方は変わってくると思いますよ。ハンセン病そのものについての偏見だって、90年経って、ついに国が動いたでしょう。

もともとすべての人間の文化は、移民の文化なんです。移民の文化以外に何もありません。言語もそのようにして出来ているんです。

日本語について、これを純粋化する。純粋な日本文化、純粋な日本語なんて言っているけれどね、この純粋化っていうのは、ひとつの政治的手段として国家が使っているだけなんですよ。国家が国民を陥れるための罠です。

日本には、万葉集の頃には、長編の歌がありました。残っていますね。明治国家が出来てから、長編詩というものは書かれなくなったんです。どういうわけで書かれなくなったか。いろいろ考えられるんですが、ひとつは、長編詩を書くだけの持続した感情を、日本国民が詩人として持ち得なくなったからです。だから途中でやめちゃうんです。

非常にすぐれたもので、ひとつだけあるんですが、『昔の家』（木犀社書院、1929年）っていう千家元麿（せんげもとまろ）が書いた詩ですが、これは古本屋でよく見ていたら、運がよければ出会うかもしれません。いい詩ですよ。彼は１冊分書いたんだけれども、未完成のまま終わってしまったんです。

だって、こんなに国策がくるくる変わって、国民感情が変わる国では、長編詩なんて書けますか？　そこに問題があるんです。

その中で、感情が持続する人もいるんです。その人たちは、書いた。その人たちは日本生まれの日本語育ちではありません。在日朝鮮人です。その長編詩を書いたのは、金時鐘（キム シジョン）です。２つ書いてます。ひとつは『新潟』（構造社、1970年）。もうひとつは『猪飼野詩集』（東京新聞出版局、1978年）。この２つです。

在日朝鮮人の数は、大きく見積もっても60万人以下でしょう。その中から、唯一の長編詩人が生まれた。日本語で。このことに注目してほしいんです。あまり注目されていないんですよ。日本の文壇というのは国民の文壇ですからね。大学も出てるし、と、ぜいぜい皮肉を言いたい（笑）。

６．大江満雄と『いのちの芽』の詩人たち

大江満雄さんのことをお話ししましたね。

ここに電車で来る途中、西武池袋線に東長崎っていう駅がありました。あそこに大江さんは住んでたんです。あの駅で降りて、訪ねて行ったことがあるんです。大江さんの机の上に、山と原稿が置かれていた。「何ですか？」って言うと、「これは全国のハンセン氏病の療養所から集まった詩だ。これを集めて、選をして、本にしたいと思っている。本の題名は決まっている。『いのちの芽』。自分の肉体は蝕まれても、そこにはいのちの芽が萌え出でる。そういう姿勢でつくりたい」ってね。

これを読ませてもらったんです。その中で、今も記憶の中に残っているものがあります。

谺雄二（こだまゆうじ）[14]っていう人が書いた詩。存命です。「鬼瓦よ」[15]っていう詩なんです。

鬼瓦よ
おまえをみていると僕は勇気がでる。

呪詛する勇気。
その中に微かな純血性がある。

これはすごい詩だと思いましたね。

呪いの「呪詛」。その中にこもっている「純血」。やわな理想主義じゃないでしょ？　やわなヒューマニズムではないでしょ？　ここには、闘う意思の持続っていうものがあるんです。

これが、ハンセン病療養所の中に、90年、あきらめることなく、ずーっと保たれていた感情のかたちですね。

もうひとつ、山と積まれた原稿のなかに、島比（しまひ）

（14）谺雄二（1932-2014）。1939年多磨全生園入所。1951年栗生楽泉園に転園。大江満雄編『いのちの芽』（三一書房、1953年）に参加。詩集『鬼の顔』（昭森社、1962年）、詩・写真『ライは長い旅だから』（趙根在との共著。皓星社、1981年）。このほか評論集や児童向けの作品がある。らい予防法違憲国家賠償請求訴訟の東日本原告団の代表、のちに全国原告団の代表を務めた。

（15）谺雄二「鬼瓦よ」（大江満雄編『いのちの芽』三一書房、1953年）194-195頁。

呂志[16]の詩がありました。この人も現存。

「ふるさとの家を思う」[17]っていう詩です。

ふるさとの家を思う日
わたしの心は暗い

わたしが癩になった日から
ふるさとの家は灯が消えた
暗い空洞のような家の中で
父は
いつまでも顔をあげず
母は
愚痴にあけくれ
妹は
嫁にゆけぬ青春をのろい
弟は
みんなの不安にうちしおれ
ふるさとの家は
笑いを忘れてしまった
死のような十年が過ぎ
わたしは新薬プロミンのことを知らせた

ふるさとの家は
十年ぶりに灯がついたようだと
父より便りが来た
しかし　その後一年
曲がった指が伸びたか
脱落した眉毛が生えたか
わたしは　なんと便りを書こうか
いま　やっと明るんだ
ふるさとの家の灯が
また　不安におののくのを感じる
うそを書こうか
真実を書こうか
ふるさとの家を思う日
わたしの心は暗い

一九五〇、七、二七

ここには日付があります。1950年７月27日。これは51年前に書かれた詩ですが、現在の状況をしっかりとらえているじゃないですか。いま我々の前にある状況って、こういうものなんですよ。

後遺症が残っている。言葉の発音なども含めて。それをどういうふうに迎えるところが、この日本にあるのか。そのふるさとは、どこにあるのか。〔元〕患者そのものの家の中に用意しつづけるのか、ないのか。いまの問題なんですね。その時、詩の持つ射程って非常に広いでしょう。

その山のような原稿の中に、もうひとつ、志樹逸馬[18]の詩があったんです。偶然、志樹逸馬と私とのあいだには、その後、文通が生じたので、私は長島愛生園まで、志樹さんに会いに行きました。志樹さんの家に上がって、お茶を供され、書いたものをいろいろ見せてもらったりした。

そこに〔会場の壁に〕、肖像画がある光田〔健輔〕[19]さんが生きておられて、患者の家に上がり込んでお茶を飲んだってものすごく叱られたのを覚えていますよ（笑）。光田さんは、伝染するという説によって療養所をつくった人で、それを訪問客によっておかされるのが相当に腹が立ったんだろうね（笑）。

志樹逸馬は小学校６年のときにここに、全生園〔全生病院〕に入ってきたんです。光田さんはその時からの志樹逸馬を愛し、よく世話をし、彼を非常に愛していたことが、光田さんの言動からわかるんです。志樹逸馬も光田さんを敬愛していました。

そのことは、光田さんが誤った医学の理論をつくったということによって消されるものではあり

（16）島比呂志（1918-2003）。1942年大島青松園入所。１年で退園。1947年再入所。翌年星塚敬愛園に転園。『いのちの芽』に参加。文芸同人誌『火山地帯』主宰。小説・評論を中心に著書は10冊を超える。らい予防法違憲国家賠償請求訴訟の最初の原告13人のうちの１人。1999年社会復帰。生前に詩集はなかったが、死後、立石富生編『凝視』（火山地帯社、2003年）、立石富生編『現代のヨブに』（火山地帯社、2019年）が編まれた。

（17）島比呂志「ふるさとの家を思う」（大江満雄編『いのちの芽』三一書房、1953年）165-166頁。

（18）志樹逸馬（1917-1959）。13歳でハンセン病を発症し1928年全生病院（のちの多磨全生園）に入院。1933年長島愛生園に転園。生前、詩集はなかったが、死後、原田憲雄･原田禹雄編『志樹逸馬詩集』（方向社、1960年）、『島の四季』（編集工房ノア、1984年）、若松英輔編『新編・志樹逸馬詩集』（亜紀書房、2020年）が編まれた。

（19）光田健輔（1876-1964）。医師。1898年東京市養育院に医師として勤務。ハンセン病患者の隔離病室「回春病院」を設け治療にあたる。1909年全生病院医長に着任。1914年院長となり、1931年長島愛生園の園長になった。ハンセン病の医療と隔離収容とは一体であるという考えを最後まで捨てず、日本の強制隔離政策を主導する位置にあり続けた。

ません。

志樹逸馬っていうのは、話してみると面白い人でしたね。小学校６年でここに入ってきたんですから。彼の全教養は、この療養所の中で得られたものなんですよ。それは日本の一般社会の中にいて、もっと高い学校に行って、彼の身についたものでしょうか。率直に言えば、身につかなかったと思いますね。知能の高い者ほど、国民の一部に溶け込み、国民の指導者になり、軍国主義の旗を振るものです。そうでない人は少ないです。

志樹逸馬の詩をひとつ読んでみましょう。「種子」[20] っていう詩です。

ひとにぎりの土さえあれば
生命はどこからでも芽を吹いた

――ここから、大江満雄は『いのちの芽』というタイトルをとってますね。大江満雄と志樹逸馬は、詩人として親縁関係にありますね。

悲しみの病床でも
よろこびの花畑でも
こぼれ落ちたところがふるさと

種子は
天地の約束されたことばの中に
ただ　みのる

汗や疲れをなつかしがらせるものよ
夢
黒土の汚れ
生きてさえおれば
花開く憧れをこそ持って来る

この詩風はどのように育ったか。

志樹さんによれば、小学校６年で入ってきて、勉強が好きだった。それから文学が好きだった。療養所の中に文学の先輩がいたっていうんですよ。それがいろいろ「こういう本を読め」って教えてくれた。その先輩は、自分の家族以上のものです。家族と縁を切っちゃったんですから。自分の学校の先生以上のものだった。そういう先輩と後輩のつながりというのは、非常に強いものとしてここに脈打っていた時代があるんですね。それが、大正昭和なんです。

志樹逸馬はそういう先輩の助言を得て、図書館に残っているタゴールの詩集を読んで魅せられたっていうんです。タゴールってインドの人ですが、大正時代に日本に来たことがあるんです。日本を訪れるまでは、雑誌や新聞なんかでも、前評判は非常に高かったんです。日本に来たあと、評判はがたっと落ちちゃったんですよ。なぜだと思いますか？

タゴールは日本に来て、大学で、これも大学だ（笑）、「日本は欧米に倣って帝国主義の道を歩んではならない」と演説をしたからです。大学は帝国主義の先兵として、大正昭和とずっと駆け抜けたでしょう。例外は１人や２人はいますよ。しかし例外について私は言いたくはない。文壇も、国民の一部として大政翼賛会の一部となり、文学報国会をつくる。

そこではタゴールがいいなんて言わなくなるのです。タゴールもガンジーもいけないんですよ。前評判は高かったけど、落ちちゃった。

だけど、そんなことは、ハンセン病療養所の中には、入ってこないんですよ。文壇がここへは入ってこないんですから。だから、図書館にある好きな本を、12歳からこっちの志樹逸馬は読んだ。それで、10代の少年として、詩風の影響を受けているんです。ですから、志樹逸馬の詩というのは、明治以来の新体詩からの流れを引いたものではないんです。世界の中の潮流で、特に訳を通してなんですけれども、タゴールですね。タゴールのすぐそばに、隣にいる詩なんですよ。それが、文壇に対して占める、ハンセン病療養所の特別な位置なんです。文壇の一部ではないんです。

国家が国民に対して、政府が国民に対して仕掛けた罠に落ちない珍しい場所だったんです。

もうひとつ読んでみましょう。「闇」[21] っていう詩です。

（20）志樹逸馬「種子」（原田憲雄・原田禹雄編『志樹逸馬詩集』方向社、1960年）15頁。
（21）志樹逸馬「闇」（原田憲雄・原田禹雄編『志樹逸馬詩集』方向社、1960年）16頁。

闇の中にも目をひらいていたいと思う
人はたいてい
目をつむる
眠る

だが
このしずけさの中にこそある
闇の声に
わたしは耳をすましたい

むしろこういう詩から、大江満雄は、療養所の外にいて、影響を受けていますね。

7．転向研究への示唆

戦後、ことに終戦直後は、朝鮮戦争〔1950～1953年〕というものがあって、中国と北朝鮮とがアメリカに対抗したので、日本はアメリカに肩入れして、日本の経済の復興を呼び覚ましたんですね。これが戦後の高度成長と、オリンピック〔1964年〕と、そのあとにつづけて、大阪で万国博覧会〔1970年〕。そのあと突っ走っていくバブルの時代になるんです。

この万国博覧会のときに、規模はその何万分の一に過ぎないのですが、大阪の公園で、反戦万博というのをやったことがあります。戦争反対というものを中心とする催しなんです。その頃はベトナム戦争というものがありますからね。そこに行きますと、いろんな反戦団体が展示を出してます。その中に、小さい展示で、山行きのテントがひとつ張ってあって、そのテントの外側に、よく見ると、葉書がべったり、ずーっと貼ってあるんです。

たくさん人がかたまっているわけじゃなくて、テントの前に、二十歳そこそこの青年が、ただ座ってるんですよ。きわめておだやかな顔をした二十歳くらいの青年で、「この葉書、なんですか？」と聞くと、「これは、ハンセン病の療養所で、閉じ込められていて、家族からも切り離され、名前も変えてそこにいる人たちが、それでもわずかな通路で、ふるさとへの思いをつづった葉書なんです。答えが返ってくると集めてきて、それをこのテントの外側にペタペタ貼ったんです」と言うんですよ。

この青年は、京大医学部の１年生。さっきの交流の家をつくる運動の末端にいる若い学生ですね。彼は、10代の頃に少年として培った３つのことを実現したんです。

１つは、少年の頃好きだった女性と結婚した。これ、なかなかできることじゃないですよ。大変なことです。女性はその後、看護婦になって、彼を助けた。

その少年は、ふるさとの遊び友達を大切にして、京大に行っても縁が切れないように非常に注意していた。その仲間とふるさとに戻って何かやりたいという考えを持っていて、共同体ですね。その家をつくりたい。交流の家を奈良につくったのと同じように。それで彼はつくった。

次に、彼の生まれ育った鳥取県について、何人がハンセン病で隔離されて園にいるかを調べた。それについての事情を聞いて、１冊本をつくった。それは『隔離』〔徳永進『隔離：らいを病んだ故郷の人たち』ゆみる出版、1982年〕っていう本です。

彼がつくった家は「こぶし館」っていうんですけれども、そこで講演会を開くときには、園からそこに人が来て、話を聞き、討論に参加し、泊まれるようにした。

そこで私が初めて会った人がいるんです(22)。私にとってはそんなに昔のことじゃないんですけれども。その人の詩をあとで読んだんです。

島田等(23)「非転向」(24)っていう題なんです。転向しない。

望月を過ぎても
月は明るかった

(22) こぶし館の設立が1989年なので、鶴見と島田の初対面もそれ以降ということになる。

(23) 島田等（1926-1995）。1947年長島愛生園入所。1964年「らい詩人集団」結成。詩集に『返礼』（私家版、1992年）、『次の冬』（論楽社、1994年）。評論集に『病棄て』（ゆみる出版、1985年）がある。

(24) 島田等「非転向」（『次の冬』論楽社、1994年）113-114頁。

待つことの痛みが、こんなにも
汗をかかせる
感じさせる

愛する人から
愛されても理解されることのないかなしみは
私が選んだものだ

一人なら
孤独もない

生きつくし
生きつくしても
私を許さない私であり
私を貪りつづける私である

眠ろう
月は惜しいが
眠ってこそ夢を見る

私は、もはや79歳ですから、あと生きて、どれほどの自分の仕事があるかわからないんですが、いままでの79年を考えると、いちばん大きい仕事は、転向についての共同研究をしたことなんです〔思想の科学研究会編『共同研究　転向』全３巻、平凡社、1959-1962年〕。それは、国家が個人の思想を圧し潰す、そのプロセスの事例をずっと集めて、出したことがあるんです。ですから、転向の研究ですね。

それは、戦争中、1943年の２月にパッとひらめいたもので、だいたいそれが持続して、今日までやってきてるんです。

それと並行して、まったく違う、ことに好景気とバブルのなかで、日本の国民の理想はふやけてるでしょう。そのことについて、はっきり標準を定めて、この詩は書かれていますね。

ですから、私個人がした仕事に対して、非常に強い刺激を、まったく違うところから与えている。私を、研究者としての領域において叱咤鼓舞する仕事〔詩〕なんです。そういうものですね。

８．大江満雄の戦中・戦後を貫くもの

戦争の話を今までいくらかはしてきましたが、大江満雄という人は、戦争中いったい何をしたのか。彼は、昭和の初めのプロレタリア詩人です。

日本文学報国会の命令で、『辻詩集』（八紘社杉山書店、1943年）に書けって言われたときに、一篇書いてるんですよ。それは、街角のいろんなところに貼り出す短い詩なんです。

大江さんは、日本文学報国会の、つまり国民の一員として、彼はこれを書いたんです。どういう詩かというと、「四方海」[25] という詩なんです。四方（よも）の海ですね。

日本列島は不滅の巨艦
この巨艦を護る
艦船のあまた

――こう見るとなんとなく、戦争万歳みたいでしょ？

洋上にものを運ぶ　かの大小の船
きのふ海戦に勝てど
けふ我が方も撃沈されるとおもへ

かの渺渺たる海
おもひ見よ
機械と機械との戦ひ。

私はこれ、すごい詩だと思いますよ。

「いざ来いミニッツ、マッカーサー」とか、「鬼畜米英撃滅」とか書いてないんです。「出てくりゃ地獄へ逆落とし」なんて言っておきながら、来たら、「おお！　マッカーサー様、ミニッツ様」とか、そういう詩を書くんだからなあ。国会人と、文壇人はあまり信用できませんな。大学人も。そうすると、日本のなかで信用できるのは、ほとんどないじゃないですか（笑）。それが問題なんです。

かの渺渺たる海
おもひ見よ

（25）大江満雄「四方海」（日本文学報国会編『辻詩集』八紘社杉山書店、1943年）78-79頁。

機械と機械との戦ひ。

このイメージの使い方ですね。

大江さんは、敗戦後に『亜細亜詩人』〔1953年創刊〕っていう雑誌をつくったんですよ。さっきの山室静もそこへ入っていたんです。

大江さんの考えは、大江さんのその時の言葉でいうと、「アジアを結ぶものはらいだ」というものです。

ハンセン病っていうものはネガティブなものとして考えられているでしょう。しかし、この絆がアジアを結ぶ。共同でこの問題を解こうとする姿勢を、大江さんは持っている。だから、大江さんは、ハンセン病の問題に突っ込んでいったんです。それが『亜細亜詩人』という雑誌の題名にもあらわれています。

交流の家の命名にも、大江さんは関わっています。

ですから、ネガティブな絆は重大なんです。同じ病気を持っているという絆が、我々を結ぶ。

戦争中に大江さんが『辻詩集』として出した「四方海」は、戦後に大江さんが出した『亜細亜詩人』の理念と、非常に響きあうところがありますね。

そして、高度成長からバブル、その自己中心的考えが、盛んになんていくなかで、大江さんは、自己中心はいけない、っていうことを決して言わないんです。

「エゴの木」(26) っていう詩を書きます。

ぼくは思った
心のうちにしているぼくのエゴの木が燃え
隣人のエゴの木が燃え
次々無数のエゴの木が燃えひろがる

これはエゴの山火事だ
エゴの木の自己革命か
強風が吹いて火勢はすさまじくなる

これ、「エゴの木」といって、大江さんが死ぬ直前に書いた詩ですね。エゴの木が燃えることで何かがあらわれることがあるっていうことです。

今からひと月ちょっと前、韓国から金芝河（キムジハ）という詩人が訪ねて来て、私をご馳走してくれたんですよ。京都の餅料理。京都にいて京都料理をご馳走してもらうなんて変なもんですがね。その時は、４月の14日だったかな。

「いま韓国では、日本の教科書に対する批判が非常に高まっていて、なかなかこれは消えそうにない。だけど、ひとつこういうことが起こった。フィリピンでもシンガポールでも、もちろん中国でも、日本の教科書についての情報が伝わって、教科書批判の運動が起こって、お互いに情報を交換する動きが出てきた。これには未来がある」と、金芝河は言うんです。

この時私は、大東亜共栄圏というものを思い出したんですよ。大東亜共栄圏っていうのは、日本国の、日本政府が中心になって、アジアの国々を引っ張っていくという思想なんです。

日本という国が台湾と朝鮮とを取っちゃって、植民地にして大東亜共栄圏をつくるって、この「共栄」っていう考えがもともとどうかしてますよね。そういうことを日本国は平気でやるんです。それを日本国民は平気で支持するんです。闇の中に目を開いてないからです。

この日本の教科書批判の連帯は、日本政府が引っ張っているんじゃないです。まったく別の、大東亜共栄圏の芽を持っていると、私は思います。

この考え方は、大江さんが敗戦後に、『亜細亜詩人』という考え方を込め、学生がつくってる奈良の家に交流の家とchristenした〔命名した〕ということに、意味があるように思いますね。

今日は私が出会ったことをひとつひとつお話ししてきました。つまり私は、ハンセン病隔離はけしからんという大きな前提からずっと運動を始めた者ではないんですよ。なんとなく巻き込まれてきちゃったんだ。

ほぼ私の考え方はそこで終わりなんですが、もうひとつ。

(26) 大江満雄は、晩年、「エゴの木」を主題にくり返し詩を書いた。初出は、「エゴの木」（『キリスト新聞』キリスト新聞社、1978年１月１日）。次いで「エゴの木」（『詩学』第34巻第４号、詩学社、1979年３月）。鶴見がここで朗読しているのは「夢の中で人間のエゴの木が燃える時」（『木馬』第８号、四国学院大学、1979年７月５日）である。

９．自分の問題から解く

トロチェフの、その少年の家に入ると、そこは帝政ロシアだった。すでにニコライ皇帝が死んでから、40年、50年、60年、70年経っても、そこにロシアの文化があった。そこでは、ソビエトロシアがけしからん、トルストイまでさかのぼって叩くんですから。ずいぶん時代錯誤の考えだなと、日本の大学出の人たちは思うでしょう（笑）。

意外にそうではないんですよ。

私は、14歳くらいの時に、ある日、新聞を開けてみたら、大学助教授がヨーロッパから帰ってきて、日本に上陸してすぐに捕まったって書いてあるんです。名前は、高橋正雄（たかはしまさお）。人民戦線の系統ですね。山川菊栄（やまかわきくえ）の系統。「はあ」と思ったんです。その後、この人は戦中に、日本のアジア侵略万歳！なんてことを全然書いてないんです。戦後生きてて、「あ、まだ生きてるのか」と思ったら、極めて穏健な社会主義を代表する経済学者として、社会党の隅に名を置き、社会党の運動のなかでも、割合軽んじられる論客として90歳超えて生きていた。

その人に私は偶然、九州で会って、とても感心したんです。元気だった。階段なんか昇るのに、すたすた自分で昇るんですよ。ある時、私といっしょにエレベーターに乗ったから、「先生でもエレベーターに乗るんですね」って言ったら、「若い人と一緒の時には」って言ったんだ（笑）。まったくびっくりしたな。

彼の説は、「ロマノフ王朝が残って、ウィッテなんかの改革路線を活用していったら、そこからは必ず別の社会主義があらわれる。そして、ロシアにはもっと健全な時代が来ただろう」。

それが彼の持説なんですよ。その話を聞いて、一緒に中国に行った丸山眞男（まるやままさお）がびっくりしてた。穏やかな改革路線。そういう道はあるんです。

つまり、ロシアの問題は深刻です。それに対抗するには、「レーニンだけがただひとつの世界史のとらえ方だ、これがまだわからんのか」と言ってポカポカと、大変な数の人間がぶっ殺されたでしょう。あれが駄目だとなると、今度は資本主義がいいだなんて。

ロシアの問題は深刻です。問題はあるんですよ、そこに。問題に背を向けない。そこから考えていく。

今までの転向史、非転向論というのは、ことに非転向の立場を貫けと言ってるのは、ソビエトロシアの政府の世界把握を、一条たりとも惑わずに呑めってことなんですよ。そうでないやつは、理由を付けて殺しちゃったりすることを、ソビエトの中でも外でもやってきたんだ。今も。

手本を、ある政府のテーゼに求めるのではなく、問題に求めたらどうですか。人間には深い問題があるのです。これに目を背けることなく、問題の解き方を考えていく。この一つの解き方だけが解き方だと言えるんでしょうか。そのような、問題に背を向けないという非転向の道は、またありうる。

ハンセン病療養所のなかで、志樹逸馬が穏健な仕方で解き、島田等がもっと根本的な、ラディカルな仕方で解いたのは、そういう問題の解き方で、いずれの仮説の出し方も、問題に背を向けないということでは同じなんです。問題というのは、ハンセン病に、そこでとらえられている自分が問題なんですから。

ですから、転向・非転向の概念を、そのように変えていく、革命的な考え方の転回のきざしはここにありますね。そのことを私は教えられました。

日本の学会は、これだけたくさん大学があるんですが、目覚めていませんね。それが、私の話。終わります。（拍手）

質疑応答

質問者１　どうしてもわからない点が１点あるんですね。それは何かというと、ほかの先進国に比べて、日本だけが特別遅れちゃったわけです。1996年になるまで、隔離をやめることができなかったわけですね。それがなぜかっていうことが、どうしてもわからないんですね。

先生のお話をうかがっていると、光田健輔も決して悪い人ではなかったと。藤楓協会の理事長も決して悪い人ではなかったと。そういう状況にありながら、なぜやめることができなかったのか。

1953年に、らい予防法を廃止しようじゃないかという動きがあったと覚えているのですけれど

も。ここ全生園からデモ隊が行って途中で止められちゃったということがあったと思うのですが、あの時に厚生省が、こともあろうに、なぜ廃止しないかというと、いま〔入所者が療養所の外へ〕出されたらかわいそうじゃないかと。そんなことをするくらいだったら隔離するほうがましだということを言うわけですよね。それに対して日本人というのはそんなに奇異に思わないわけです。そのへんがどうしても不可解なんです。

例えば、中国残留孤児の問題でもそうなんですけれども、かわいそうだからほっとく、無視しちゃうわけなんですね。モダニスティックに解決しようという意思がどこからも出てこないんですね。それは世界において、日本が特殊な状況じゃないかと思うんですよ。

実際、鶴見先生も知識人として、1953年のらい予防法闘争のことはよくご存じだったはずです。しかし、何らかの運動が起きなかったということが、もうちょっとわからないことですし、先ほどの先生の言葉を使えば、どうして日本人の国民は、闇の中に目が開かないのか。どうしてもわからない。先生が言うように、国家が悪の主体であるとはぼくにはどうしても思えないんですね。共犯関係にあるような気がしてならないんです。どうして、特殊な精神状況を持ってしまったのかということをお聞きしたいです。

鶴見　「共犯関係」っていうのに、私は同感です。「共犯関係」なんです。それがいつ始まったかっていうと、私の考えでは、1905年が起点だと思います。

黒船が来たのが1853年ですが、それから1905年まで、じつによくやったと思うんですよ。政府の指導者も、1905年で力尽きて倒れたんです。

戦争をやりたくないっていうのが伊藤博文なんかの考え方なんですが、やると決めても金がないでしょ。金を集めるのに国債を買ってくれって回るんだけれども、売れないんですよ。

偶然、ユダヤ人のジェイコブ・シフっていう人物が日本の国債を買い始めて、ユダヤ人は非常に長い間の迫害の歴史を持ってますから。これが買いの運動の歴史を起こして、金がある程度できた。

だから、満州派遣軍の総司令官の大山巌は、うちに戻ってから、「シフさんの恩義を我々は忘れまい」って言ったんです。

その後、大正から昭和に入ると、四王天延孝・陸軍中将がさかんに「ユダヤ人が世界の陰謀だ」と言って、軍国主義へ持っていくでしょ。

ユダヤ人によってかろうじて、日露戦争は負けないで済んだんですよ。あれ、負けないで済んだだけなんです。その歴史的事実を、あのへんで歪曲するんです。負けないで済んだっていうことを嘘をつくから、嘘のつき始めは、1905年なんです。だから、国民運動が起こるんだ。最初の国民運動が。日比谷で起こって、交番やなんか焼いちゃうんです。その多くは、「もっと戦争をつづけろ！」「賠償金の金をもっととれ！」

もっとつづけたらどうなると思いますか？　日本は負けます。日本を取られちゃうかもしれません。

あの時から現実認識を失うということは、それは無理はないでしょう。長い犠牲を強いられた国民ということを考えたら。そこから起こって、政府指導者が、それに迎合したんです。ですから、日本はもはや世界の先進国になったという嘘は、そこから起こった。

大正時代になると、私の子どものころは、世界の五大先進国。それから三大国になって、最後、昭和の半ばになりますと、アメリカと覇を争う。まったく現実離れしたじゃないですか。

アメリカからくず鉄買って軍艦つくってるんですよ。それで最後は「神風が吹く」。

だから、国民と国家の共犯です。国家の指導者が、国民に迎合するんですよ。票が取れるから。今もつづいてるでしょう。

敗戦といえども、この共犯関係の絆を断ち切ることはできなかった。マッカーサー、マッカーサーって言いますけれども、マッカーサーは雇われマダムですよ。最後はクビになったじゃないですか。マッカーサーはそれをわかっています。

この占領の費用をなるべく安く上げないといけないと思った。当然でしょう。高くするとクビ切られるからです。そのためには、３つのアメリカにないものを活用しようと考えた。１つは天皇で

す。もう１つは文部省です。文部省ってアメリカにないんですよ。もう１つは東大です。東大っていうのはアメリカにはないんですよ。そのことが官僚にはわかってないんですよ。東大教授にもわかっていないんです。戦前は東大が一流大学だって、それも疑わしいと思うんだけど。戦後、負けたから今度はハーバードのほうが一流になったから、東大から留学してハーバードに行って、１年ぐらいいて帰ってくるんです。

官僚もそうですよ。大蔵省に入ってから、大蔵省の金でハーバードに１年留学してまた帰ってくるんです。ハーバードをアメリカの東大だと思ってるんです。ハーバードはアメリカの東大じゃありません。ハーバード出の大統領なんて、20世紀に入ってからほとんどいませんよ。戦後はケネディ、20世紀に入ってからだと、フランクリン・デラノ・ルーズベルトと、セオドア・ルーズベルト。

だいたいハーバード出の政治家っていうのは嫌われるんですよ。なぜかと言うと、言葉が違うからです。ちょっと言葉が違うんですよ。英語で言うと、例えばね、居抜きのそのへんの大学出た人間だと、「ボストン」って言わないんです。「ボーストン」って言うんです。「ボ」を長くするんですよ。それでわかっちゃうんです。「ボストン」というやつは、東部の居抜きの学生じゃないんですよ。ちょっと、３分聞いただけでわかるね。ですから、あんまり選挙に勝つ奴はいないんです。ケネディは偶然。カトリックであり、ハーバード出てるという２つのハンデキャップを克服した珍しい人です（笑）。

だけど、私は東大教授を前に、「東大教授はくだらない」「頭の中に脳みそじゃなくて豆腐が入っている」と言う。すると、その東大教授が、「どうしてそんなに東大教授を馬鹿にするんですか。あなたがそんなに馬鹿にするのは、あなたがハーバード出てるからじゃないんですか」って言うんだよ。そうじゃないんだ。アメリカの歴史っていうものを知らないからなんですよ。

日本だと、東大出の総理大臣がいちばん多いです。その次が、陸軍大学校です。その次が海軍大学校です。いま、少しは変わってきましたが。

私は関係ないんだが、肩入れしている日本共産党は、日本に数ある政党のなかで、ただひとつ、東大を信仰してる政党なんですよ（笑）。あれ、東大出じゃないと認めませんよ。ああいうことになってるから、日本の進歩思想はあんまり期待できないね（笑）。

国民思想っていうのが、また、日露戦争以来ずーっとあって、マッカーサーもその絆を断つことができなかったんですから、どうなるんでしょうね。

もともと、らい予防法〔1907年癩予防ニ関スル件〕をつくる背景にあったのは、先進国として、先進国じゃないんだけれども、かっこうが悪いから。外国人が来た時に、熊本の神社なんかにずーっと患者がいるっていうのは体面が悪いから、ひとところに閉じ込めたい。

「先進国」という、この前提が間違っています。この前提を、外国に行ってきたような国家の高等官僚が考え、国民が支持した。ここに共犯関係があります。これが、敗戦によっても絶たれなかったというのが問題なんです。

先進国っていうのは、金を持ってる持ってないじゃなくてね、まっとうなことをやってるかどうか。犯罪で考えたらどうですか。アメリカは犯罪の先進国ですよ。日本もだんだんアメリカに似て来て、犯罪先進国になってきたんですよ。戦前にはちょっと考えられないような犯罪が、次から次へと起こるでしょ。犯罪でアメリカを追っかけてるから、日本は２位、こういうふうに考えるならわかりますよ。

しかし、どうしたら、いい意味で、日本人の未来を見つけることができるでしょう。私は、大江満雄の『亜細亜詩人』。それから金芝河が言ったような、教科書批判の連帯。それに日本人が耳を傾ける。

日本人ですよ、国民じゃないですよ。日本国民がみんな耳を傾けるとは思えないね。この場にいる人たちは、日本国民の代表ですか？　私はそう思いません。日本国民だったら私は確実に袋叩きにあってるはずです。不敬なことばっかり言ってるんだから。文部省は殴るし、東大は馬鹿にするし。

皆さんは日本人なんですよ。日本に住んでる人間なんです。日本国民が、日本に住んでる人間になる道は遠いです。それを今まで引っ張ってきたのは、今も引っ張っているのは、今もハンセン病療養所にいる人たちだと思います。私は、そう信じてるんです。だから、このことを55年やってるんです。誰に頼まれたのではありません。きっかけは、前に言った、リトアニア人の医者からかかってきたひとつの電話に過ぎません。

この、ロシア人の家族に会ってから、とんでもない理想を、50年、60年、70年と、保って生きてるなと思ったけれども、高橋正雄という個人に立ってみると、それも、ロシアの問題に直面する仮説のひとつとして考える。これは、世界の法則から外れてるとして、考えないことにしちゃいけないんだというふうに、悟るようになったんです。

だから、この話は、ハンセン病者は、かわいそうだという話ではなくて、ハンセン病者から教えられたという、私個人の思い出なんです。それは、日本社会の歴史とまったく切り離された特別なところにある話ではありません。

皆さんはおそらく、日本国家のまったくの典型的なサンプルではないでしょう。だから、我慢して座って、私の話を最後まで聞いてくださったんです（笑）。（拍手）

質問者２　今日は心に沁みる話をありがとうございました。私、東村山市内から参加しております。質問に入る前に、個人的なことを申し上げますと、30年は経っていないかもわかりませんけれど、草津の楽泉園に行ったことがあるんですね。たまたま知り合いの看護婦が勤めていまして、そういう関わりがあって、楽泉園に行ったという経過があるんです。その時に、たまたまカトリックの方だったものですから、丘の上にある教会に入ったことがあるんです。その時に、看護婦さんが、「ハンセン病は感染しませんよ」と言われたことがあって、またそのあと、その看護婦さんの寮のほうに行ったことがあって、監獄〔重監房〕があった跡地も案内された、そういう経験があったんです。

ぼく自身、ハンセン病に対して認識がなかったということもあって、今回、政府が控訴しなかったということについて喜んでいるんですけれども。全生園にも初めて商工祭りに参加して、この中を自転車でぐるっと回ったんですけれど、お寺から郵便局から全部あって、ここは隔離されて一生を送る場所だとはっきり感じたんですね。そういう個人的なことをまず申し上げたいと思うんですけれども。

今回、控訴をしないということを政府が決定をしたということがありますけれども、その同時期に、外国人の選挙権の問題があったと思うんですね。これが与党の反対で見送られたということで、私は非常に複雑な思いがしたんですね。ハンセン病の問題と在日外国人の選挙権の問題とは関係あると思うのですけれど。

私は教育に関わっていて、教科書問題で、昨日、市民センターのほうで、在日韓国人の方から生活史を含めて、お話を聞いたっていう経過があります。このハンセン病の方のなかにも、在日朝鮮人の方がいらっしゃるということを聞いてるんですが、そのへんのことに関して、鶴見先生のお考えがありましたらぜひとも聞かせていただきたいと思います。

鶴見　最後のことからお答えしましょう。回復者のホームをつくる運動をやっていた学生のグループは、FIWC っていうんですけれども、フレンズ。つまりクウェイカーの運動から引っ張ってきたものなんですよ。

これは、韓国人の問題を非常に早くから取り上げて、今も、韓国に行って韓国のハンセン病者のための家を建てたりする仕事の手伝いをずっとつづけています。

また、このハンセン病療養所の中に韓国人もとても多いんですが、そういう問題は残っています。

もともと、日本人だからもっと親切に扱わなくてはいけないっていう考え方があって、90年間隔離されたんですから。しかも自分の子どもであっても父親であっても関係を切っちゃうんですから。日本人だから、っていうのは、このハンセン病に対する差別に対して強い力を働いてきたとは思えないんですが、もともとこの日本の土地に生まれて住んでいる人間は、誰でもいっしょにって

いうのが、当然の法であるべきでしょう。そういう法をつくろうっていう考え方は、1945年の敗戦の時にあったんですよ。その時、憲法の元型（もとかた）を書いた、制定委員会の最年少のメンバー、ベアテ・シロタですが、私より１つ若い22歳だったんです。彼女は、「All natural persons は、差別されるべきではない」。人間として生まれたすべてのものは。この日本の土地でですよ。つまり原案は、委員長だったケーヴィスが……。ベアテ・シロタもケーヴィスも２人ともユダヤ人です。ユダヤ人の迫害というものを身に染みて感じて、憲法の条文をつくってるんですが、ケーヴィスは、Law school、法律学校を出ている秀才なので、日本の世間というものに遠慮して、同じユダヤ人のシロタのつくった条項を消したんです。シロタはその証言をずっとしてます。ケーヴィスは死にましたが、シロタはまだ生きてますから。

私は、もし憲法を直すとすれば、「All natural persons」に変えるべきだと思いますね。今は、護憲か改悪かだから、私は護憲のほうに一票を投じますよ。だけど、直すべきところはそこにあるんです。

つまり、どうしたら日本の国民が人間になるかっていう問題なんですよ。結局、90年に及ぶハンセン病に対する差別もそこに根差してるんです。日本の国民が人間になる道は遠いです。そんなことは、国会議員の念頭にも浮かびません。大学出てるから、大学で習ったことは覚えてますよ。「人権は大切だ」。そのくらいのことは国会議員は知ってるでしょう。二世三世で裕福に育ってる人が大部分なんですから。しかし、「All natural persons」っていうグッという力は出てこないですね。思想がないからです。

私は自分の偏見をはっきり言うとすれば、国会議員だけ、海外渡航をやめたらどうかと思ってるんですよ。税金の無駄だから。だって、何にも学ぶ心構えがないもの。やめたほうがいいですよ。外交官にもやめてくれ、っていうのは、これ、いろんな仕事があるから仕方がないけれどもね。国会議員についてはやめる。金たくさん持ってるんだから、自分で行けばいいじゃないですか。

私はそういう偏見によって生きてるんです（笑）。よく殺されないで生きてるなと思いますよ。感謝してます。

私の友人は、このハンセン病療養所の中にいるんです。それはこの55年の私の感じです。私の友人の中には、大江満雄があり、トロチェフがあり、志樹逸馬あり、島田等あり。私のゼミの優れた学生の柴地則之、そういう人が、この50年、私を引っ張って啓発してくれた人なんです。

だから、みなさんはその友人なんだから、国民とは一味違った人たちであろうと、私は期待してるんです。（拍手）

質問者３　先生、今日はありがとうございます。さっきの「共犯関係」を断ち切るということについてお聞きしたいのですが、今のお話を聞きまして、それでいいんだろうと思うんですが、理解が間違っていたらいけないので確認のために質問させていただきます。

私は、母と父から生まれてきまして、息子がいるのですが、その母を母と思い、父を父と思い、子を子と思うところからものを発想するっていうか、ものの根源を考える。そういうことを我々が反省しながら見直すということでよろしいんでしょうか。

先ほどの、アジアのグループの方々とか、反教科書運動の今までと違う流れについて、先生が感じておられる内容なんですが。

鶴見　「全人類が」、っていうところから考えたり話をしたりするのは、私は好きじゃないんですよ。だから、自分の父親との関係、母親との関係、そういうことから考えたいですね。

私の母親っていうのは、ものすごい厳しい人だったので、２つ３つの時に、私がこっそりお菓子を盗む。母親から見れば、それは犯罪行為ですね。「あなたは悪い子だから、あなたを殺して私も死にます」って言うんですよ（笑）。そういう強迫にあって、ゼロ歳のときからずーっと生きてるっていうのはつらいですよ。だから、私の原哲学はね、「正義っていうのはハタ迷惑だな」（笑）。だから、自分が正義の人になりたくないんですよ。

だから今の話も、どうして私が、トロチェフと

いうハンセン病の人と巡り会ったか、どうして大江満雄に草津に連れて行かれてトロチェフと再会したか、という話なので、私は「正義はこうだ」っていうのはゼロ歳の時からもう懲りてるんだよね。だから私は「女なんか」なんて言葉は腹の中から出てこないんだよ。「女は怖い」と思ってるから（笑）。

国会議員に対しては非常な偏見を持ってますが、それは私の親父が国会議員で大臣だったからなんです。だから、そういうものに対して強い強い偏見を持ってるんです。しかも東大で１番だったんですよ。これも嫌いなんです。あらゆる１番は嫌いだ（笑）。学校の成績のいいやつも嫌いだ。そういう基本の考えがあるんですね。学校に入ると、「ニセ問題」を解くことが上手になるんですよ。自分の問題を前に置くことができなくなっちゃうんです。だから日本のように学校が発達すると困るんですよ。

志樹逸馬みたいに偉大な人間は、学校と離れたところで、ここで育ってきたでしょう。このハンセン病療養所の歴史っていうのは、いろんな仕方で考え直していくと、教育制度としても文学としても政治としても、重要な場所だったことがわかります。だいたい外の日本の社会で平和主義っていうものが衰えていくなかで、長島愛生園では社共共闘政権があったんですよ。そういうところを見ていくと、療養所内部のいろんな伝承というのは、語りつくせない、重大な国民批判の原点なんですよ。

日本が一等国に引き上げられたっていうのは、国民が金を持ってきたから言うんであって、金持ちが偉いということと同じじゃないですか。アメリカが金持ってるから偉いっていう、その程度の考え方が、重大な思想でしょうか。私は自分の偏見を以って対抗したい。（拍手）

質問者４　確認ですが、お話の中に出た、金時鐘という人の詩集は、『新潟』と『猪飼野』ですか？

金時鐘という人の詩集は、今も手に入るのでしょうか。ということと、トロチェフという人の詩集は、昭森社でしょうか？

それと、日本国民が人間になる道は遠いと思いますが、遠いからとっても毎日苦しんでいると思います。それは日本国内にいる別の在日韓国人の方がどうの、っていうことじゃなくて、私たち自身が人間になれないわけですから、表現の自由があると言いながら、表現が豊かにできない。苦しいことだと思います。

だから長い大きな詩がつくれないんですけれども、生きていること自体が、長い大きな詩を書こうとしてるんじゃないかと思うんですが、最近の詩の中に、まったくそういう芽生えはないのでしょうか。

いま、ハンセン病の療養所のなかから希望と、闇に開いている目から学ぶ、それが先生に力を与えているということだったんですけれども、私はハンセン病の療養所にいないんですが、毎日の暮らしから力を得たいですけれども、どうしたらいいだろうか。

先生は、私の母と同じ歳なんですけれども（鶴見「ハハハ！」）、ハハハと笑われると、私は元気になったんですけれども、どうして先生は、先生も日本国民ですし、けっこう暗い中に暮らしていらっしゃるんですけれども、先生のそのハハハと笑う力はどこから来たのか教えてください。

鶴見　いろんなことを言われましたね（笑）。

金時鐘の全詩集は、立風書房から出ているものがありますし〔『原野の詩 1955 ～ 1988 集成詩集』立風書房、1991年〕、大きな図書館に行けばあります。その中の『新潟』と『猪飼野詩集』。猪飼野っていうのは大阪に昔あった地名なんです。いま地名はなくなってるんです。在日朝鮮・韓国人がそこへ集まって住んでいる地域です。

この金時鐘っていう人は、散文も非常に見事なんです。今の日本で、文章を書く人のトップの人ですね。でも、自分で読んだら下手なんですよ。つまりコンラッドみたいなものだ。「ぼくの日本語は元手がかかってるから」って言うんだけどね。重さのある日本語なんですよ。軽くないんです。散文も素晴らしいものですよ。

そうですね、ひとつだけ例を挙げれば、金時鐘の『クレメンタインの歌』（文和書房、1980年）っていうのがあるんです。これはいいです。私がもっ

とも敬意を持っている友人です。日本に住んでる日本国民外の人です。

トロチェフは、前の詩集を出した昭森社ってつぶれちゃったんですよ。あんまりこういう本を出すものだから（笑）。バルザックって呼ばれている人〔森谷均〕が中心だったんだけれども。バルザックみたいな顔をしている人だから。新しい詩集は手に入るかもしれないです。

じつは、いまつくっている本があるんですよ〔『ハンセン病文学全集』全10巻、皓星社、2002～2010年〕。その中にはおそらく全部入るんじゃないかと思いますけれども、私の一存で言うわけにはいかないです。その部分の選者は私ではなくて、大岡信なんです。ですから大岡信がいいと思えば、そこで読める[27]。

さっき読んだ詩は、特別面白い詩なんですよ。草津に雪が降るでしょ。ロシアにも雪が降るでしょ。想像するわけ。彼はロシアに行ったことがないんだ。（雪だるまの）唇が黒い。愉快に笑っている。非常に複雑な詩ですね。

なぜ陽気でいられるかというと（笑）、医学的に言えば、長生きしてぼけてきたからでしょう（笑）。ゼロ歳から15歳までは本当につらかった。だってね、人間として生まれて来て最初に目を合わせるのは母親でしょ。自分より先に母親を人間として見るわけですから。彼女が私の中に良心を植え付けるわけだ。自分の中の自分なんだ。自分の中の自分によって、常に責められているわけですよ。

「the hound of heaven」という言葉がありますが、なんて訳すんでしょうね。天から犬が降ってきて、自分を追っかけまわすっていうんです。ああいうものが、私の中に植え付けられているんだな。お袋によって。自殺して終わって当たり前です。15歳の時に親父に追放されて日本を出たんで、自分を取り直して生き延びたわけですね。今は生き延びてるから、毎日割合に愉快なんですよ。毎日が日曜日ですね。ハハハ！（笑）

だから飯なんて子どものとき、うまいと思ったことないんです。叱られながら飯食うってうまくないですよ。今は飯がうまいですね。79歳になると未来が少なくなって、まずくなるはずなんです、医学的に。しかし医学者っていうのは、自然科学としての医学だけで判断できるものじゃないんですよ。未来は物理的に少なくなってるでしょう。しかし私が79歳の現在、２歳３歳のときより同じ一椀の飯がうまいんです。叱られながら食ってないからです。当たり前のことなんだ。

おふくろがものすごく怒って言ってたことは、79歳になると、いくらか背景なんかをいっしょにしてリバウンドするっていうかな、とらえるわけ。生き残ってみると。つまり、おふくろは自分を責める人だったんです。

ちょうど志樹逸馬が自分の先輩から文学の趣味をわーっと植え付けられたのは、中世の瀉瓶に似た関係だったでしょうね。そういう濃密な関係は、ハンセン病療養所の外にはなかったと思う。本当に、父子相伝という感じでね。

みなさんは昔の人ではないからわかんないだろうけど、新羅三郎、笙を伝うなんて、箱根の山奥で笙を吹いて、新羅三郎が弟子に笙の吹き方を伝えてるのがあるのですが、そういう師弟関係は、中世にはあったでしょう。ほとんどそれに近いものが、ハンセン病療養所にはあったんですよ。だから、これだけの文学が出てきたんです。

私のおふくろの私に対する関係っていうのは、つらいものなんだ。DV っていう言葉がいまはやってるでしょ。ドメスティック・バイオレンス。あの言葉を見ると私はおふくろを思い出すんですよ（笑）。おふくろは、私をぶったり叩いたり縛り付けたり、声涙俱に下る説教をするんですよ。「あなは悪い人だから、あなたを殺して私は死にます」って。だから、たいへん。

それはね、79年のパースペクティブでゆっくり見ると、おふくろの内部の自己嫌悪っていうものが、よくわかるんですよ。ああ、おふくろも一生懸命だったんだな、って。早く死んだの。そういうことがわかってくると、結局おふくろに対しても寛容になってくるし、大変に私を愛したことは事実なんですよ。愛するということがぶったり叩

(27) トロチェフの詩集『ぼくのロシア』（昭森社、1967年）、『うたのあしあと』（土曜日術者出版販売、1998年）は『ハンセン病文学全集７ 詩二』（皓星社、2004年）に抄録されている。

いたりすることなんだから（笑）。きょうだい４人の中で、私が愛されたことは確かなんですよ。いつも私をぶったり怒ったりしているから、ほかの３人は土俵の外ですからね。だからかえって愛情の疎外があるわけだな。

いま生きてみると、私が書いていることは、すべておふくろに対する手紙なんです。そんなこと言っても、私の言い分も出てきますからね。それが、私の著作の源泉でもあるんです。だから、どういうふうに人間になってくるか。これ、むずかしい問題なんですよ。人間１人１人が突き付けられてる問題なんです。

だけど、内閣にいる人たちは、先進国として、国民としての誇りを持つ。明治国家に返るっていう話でしょ。大東亜戦争まで誤魔化して、あれまで誇りにするところまで行くんだから。無茶な話ですよね。人間としての道を閉ざして、日本国民への道を、どんどん鞭をあてて攻め込んでいくんだ。どうしたもんでしょうね。

私は、今日は自分の偏見をぶちまけているようなところがあるんだけれども（笑）。人間になるというのは、偏見のない人間になるというのは、学校制度が植え付けている誤解なんですよ。ふだんは私も自分の持っている偏見を、いくらか行き過ぎを抑えるようにして、表に出さないように抑えてるんですよ。だけど、私を生かし動かしているものは、人間への方向に行かせているものは、私の持っている偏見なんです。

日本国民はどういうふうにして人間になれるのか。じつはそれこそが最大の問題なんです。私は、ハンセン病の文学が、人間になるその道しるべをつくっていると思いますね。（拍手）

凡例

・本講演は、2001年７月１日（日）、多磨全生園コミュニティセンターにて開催された、高松宮記念ハンセン病資料館開館８周年記念講演会、鶴見俊輔「ハンセン病との出逢いから」の記録である。音源は、当館所蔵のデータ（資料ID：74547、74548）を使用した。
・本講演記録には、現代の社会通念や人権意識に照らして不適切な表現や語句が見られるが、当時の時代的背景と資料的意義を考慮し、そのままとした。
・読みやすさを考慮し、文意を損なわない範囲で、字句の添削、整理を行った。
・見出しは木村が付けた。
・文中の〔　　〕内は、木村による補記である。
・内容を理解するうえで最低限必要だと思われる事項のうち、ハンセン病問題に関係する事項に限り、注釈を付けた。注釈は木村によるものである。
・本講演記録の公表について、鶴見俊輔氏の著作権継承者に同意を得た。

（木村哲也）

［講演記録］
解説

木村　哲也（国立ハンセン病資料館）

はじめに

本稿は、別途掲載した鶴見俊輔（1922-2015）による講演会「ハンセン病との出逢いから」の解説である。講演は、2001年７月１日（日）、多磨全生園コミュニティセンターにて、高松宮記念ハンセン病資料館の開館８周年記念講演会として開催され、420人を超える観客で盛況であったことが伝えられている[(1)]。

当館に音源が所蔵されていたが、これまで講演記録はどこにも発表された形跡がなく、今回文字起こしをし、初公開されるものである[(2)]。

鶴見は、戦後日本を代表する哲学者・評論家の１人である。プラグマティズムや記号論などアメリカ哲学の日本への紹介をはじめ、思想の科学研究会を主宰し雑誌『思想の科学』を発行するかたわら、転向研究に代表されるような共同研究を組織し、また日本の大衆文化の研究へと関心を広げる一方で、安保反対・ベトナム戦争反対の反戦運動を担い、晩年は九条の会呼びかけ人となるなど、93歳で生涯を閉じるまで幅広い活動をつづけた。

鶴見の仕事の中で、ハンセン病問題への関与もけっして無視できない一角を占めている。鶴見とハンセン病問題との関係については、当事者の証言をはじめ[(3)]、新たな研究もあらわれている[(4)]。

本講演記録では、鶴見が関係したコンスタンチン・トロチェフ、谺雄二、島比呂志、志樹逸馬、島田等といったハンセン病療養所入所者への言及が随所にみられる。鶴見が関係を持ったハンセン病入所者の多くは、詩人であった。

この講演記録を掲載する『研究紀要』は、2023年３月31日に発行され、おりしも当館企画展「ハンセン病文学の新生面　『いのちの芽』の詩人たち」の会期（2023年２月４日～５月７日）と重なる。講演内容は、企画展の主題とも深く関わり、相互に響きあう内容となっている。

そこでこの機会に、鶴見とハンセン病療養所の詩人たちとの関係とその意義を広く知っていただくことを目的として、本講演記録を掲載する次第である。

以下、講演内容と関係のある事項を中心に、鶴見がハンセン病問題とどのように関わりを持ったのかを記し、解説に代えたい。

１．ハンセン病との出会い

鶴見俊輔がハンセン病と出会ったのは、講演でも述べているとおり、コンスタンチン・トロチェフ（1928-2006）というロシア人少年のハンセン病療養所（以下「療養所」と記す）への隔離の現場に立ち会ったことがきっかけである。鶴見は具体的な年を述べていないが、トロチェフの栗生楽泉園への入所は1946年５月である。しかし、この時は、偶然隔離の現場に居合わせたに過ぎない。

鶴見が本格的にこの問題に引き込まれるのは、詩人・大江満雄（1906-1991）との出会いがきっかけであった。大江は、1950年代から療養所の詩人たちと詩作を共にし、1991年に亡くなるまで、40年余にわたって療養所の詩人たちと親交をもった人物である。

鶴見が知り合った当時、大江は全国の療養所の詩人たちの合同詩集を計画中で、やがてそれは日本ライ・ニューエイジ詩集『いのちの芽』（三一書房、1953年）として出版された。鶴見は大江が

（1）「資料館八周年記念講演／鶴見先生の話に感銘」（『資料館だより』第33号、2001年10月１日）２頁。本講演に関する活字となった記録は、この記事が現在確認できる唯一のものである。資料①も参照のこと。

（2）資料ID：74547、74548。

（3）木村聖哉、鶴見俊輔『「むすびの家」物語：ワークキャンプに賭けた青春群像』（岩波書店、1997年）、木村聖哉、湯浅進、黒川創『ハンセン病に向きあって：鶴見俊輔さんの仕事①』（編集グループSURE、2016年）。

（4）宮下祥子「鶴見俊輔のハンセン病者との関わりにみる思想―1953 ～ 1964年を中心に―」（『同時代史研究』第10号、同時代史学会、2017年）20-36頁。

暮らしていた東京都豊島区東長崎の自宅を訪ね、出版前の詩の原稿の束を目にしたことを講演で語っている。

大江との関係はこの後も継続し、1991年に大江が亡くなると、葬儀の席上、鶴見がお別れの言葉を述べた。

大江の没後も、著作集出版を支援し、『大江満雄集　詩と評論』として、鶴見と関係の深かった思想の科学社から1996年に出版された。また、木村哲也編『癩者の憲章　大江満雄ハンセン病論集』（大月書店、2008年）の帯に推薦文を寄せてもいる。現在では半ば忘れられている大江の仕事の意義を評価し、世に伝え広める労を惜しまなかった。

2．谺雄二との出会いから

鶴見俊輔は、大江満雄が編集した『いのちの芽』に言及するばかりでなく、同詩集に掲載された作品のいくつかを自ら朗読し、短評を加えるスタイルで講演を進行している。

谺雄二（1932-2014）の詩「鬼瓦よ」を読み上げ、「呪詛する勇気。／その中に微かな純血性がある。」という詩句に注目して、次のように述べている。

「これはすごい詩だと思いましたね。／呪いの「呪詛」。その中にこもっている「純血」。やわな理想主義じゃないでしょ？　やわなヒューマニズムではないでしょ？　ここには、闘う意思の持続っていうものがあるんです。／これが、ハンセン病療養所の中に、90年、あきらめることなく、ずーっと保たれていた感情のかたちですね」。

純粋なものよりも雑多なものが生み出す可能性を見てきた鶴見ならではの指摘がここにはある。

谺は、1939年多磨全生園入所。1951年栗生楽泉園に転園。詩集『鬼の顔』（昭森社、1962年）、『ライは長い旅だから』（趙根在（チョウゲンジェ）との共著。皓星社、1981年）の２冊の詩集のほか、評論集や児童向けの作品も上梓した。らい予防法違憲国家賠償請求訴訟の東日本原告団の代表、のち全国原告団の代表を務めた。

鶴見は谺雄二との個人的な関係には言及していないが、実際にはけっして浅くはないつながりがあった。

大江の発案で、栗生楽泉園に「教養大学講座」が開かれたとき、鶴見はその講師として同園を訪れている。1954年７月15日「庶民の哲学」、同年９月24日「マス・コミュニケーションについて」と題する講義をし、谺雄二ら栗生楽泉園の入所者たちと親交をもった[(5)]。

大江は、インドの詩人タゴールが、民族や宗教、階級の対立を超える学習の場として設立したタゴール国際大学にならい、入所者がさまざまな立場を超えて共に学ぶ場をつくろうと、栗生楽泉園に「教養大学講座」を設置することを構想し、実現した。

1953年３月26日に第１回講座が開講され、1958年10月28日の最後の講座まで、５年にわたり、じつに70回を超える息の長い活動が重ねられ、療養所で花開いた文化活動の中でも稀有な実践となった[(6)]。

3．コンスタンチン・トロチェフとの出会いから

栗生楽泉園には、鶴見俊輔がハンセン病問題と出会う最初のきっかけをつくったロシア人のコンスタンチン・トロチェフも入所していた。

鶴見は、1954年大江満雄と山室静（やまむろしずか）とともに栗生楽泉園を初めて訪ねたおり、トロチェフと再会し、その時の模様を、エッセイ「山荘に生きる帝政ロシア　亡命貴族三代記」（『太陽』第１巻第３号、平凡社、1963年９月）に綴っている。

トロチェフとの個人的な親交はつづき、やがてハンセン病回復者のための宿泊施設「交流（むすび）の家」（以下、「　」を外して交流の家と記す）の建設運動へとつながる経緯は、講演でもふれられているとおりである。

交流の家は、1963年ハンセン病回復者のトロチェフが都内の宿泊施設の利用を拒否されたことを鶴見から聞かされたフレンズ国際労働キャンプ（FIWC）関西委員会のメンバーが呼びかけ、大

(5)　宮下祥子「鶴見俊輔・ハンセン病関連年表」（『同時代史研究』第10号、同時代史学会、2017年）35頁。

(6)　教養大学講座については、栗生楽泉園患者自治会編『風雪の紋：栗生楽泉園患者50年史』（栗生楽泉園患者自治会、1982年）385-386頁に、開講年月日、講師名、テーマの一覧が掲載されている。

倭紫陽花邑から土地の提供を受けて建設運動を進め、1967年に竣工した。現在も、特定非営利活動法人むすびの家として活動を続けている。

建設運動のさなか、地域住民の反対にあった時、学生たちが建設途中のブロックをすべて住民の見ている前で壊してしまい、いったん白紙に戻してから、一人ひとりが地域に入って住民への説得をつづけ、空気が変わる機会をとらえて一気呵成に竣工を実現する動きを指して、「戦後の学生運動の中では珍しいやり方です」「驚くべき知恵ですよ」という評価をしている。党派や原理原則に拘泥して一般社会から遊離することもしばしばだった旧来の学生運動と異なる運動論がそこにあったと指摘している。

鶴見は、サークル論や運動論をさまざまなかたちで展開した思想家だが、それらを裏打ちしていた経験のひとつは、「いったん引いて形勢を整える」という交流の家建設運動から得られたものであった。ハンセン病問題との出会いによる思索の成果として注目をうながしておきたい。

トロチェフは、ロシア語、フランス語、英語、日本語の四か国語を話し、日本語で詩を書いた。『いのちの芽』への参加はなかったが、第一詩集『ぼくのロシア』（昭森社、1967年）は、大江の支援で出版され、解説も大江が書いている。

第二詩集『うたのあしあと』（土曜美術社出版販売、1998年）には、鶴見俊輔の解説が収録された。解説で鶴見は「これは、ひとりの世界詩人の詩集であり、ここにあるのは、未来の日本語だ」と、トロチェフの詩を評価する[(7)]。

本講演では、第二詩集から「雪だるま」が朗読され、コンラッドを引き合いに出して、「母語ではない日本語でつづられた世界文学」との趣旨で同じことを述べている。

日本のハンセン病文学を、このような角度から論じた例は他にはなく、世界文学として評価を試みようとするものであり、鶴見の着眼のユニークさを知ることができる。

４．島比呂志との出会いから

島比呂志（1918-2003）も、ハンセン病文学と患者運動の双方に大きな足跡を残した人物である。

島は、1942年大島青松園入所。１年で退所。1947年再入所。翌年星塚敬愛園に転園。『いのちの芽』に参加。文芸同人誌『火山地帯』主宰。小説・評論を中心に著書は10冊を超える。らい予防法違憲国家賠償請求訴訟（以下、「国賠訴訟」と記す）の最初の原告13人のうちの１人。1999年社会復帰。生前に詩集はなかったが、死後、立石富生（たていしとみお）編『凝視』（火山地帯社、2003年）、立石富生編『現代のヨブに』（火山地帯社、2019年）が編まれた。

鶴見俊輔は、講演の中で『いのちの芽』に収録された島の詩「ふるさとの家を思う」を朗読し、次のように述べている。

「これは51年前に書かれた詩ですが、現在の状況をしっかりとらえているじゃないですか。いま我々の前にある状況って、こういうものなんですよ。／後遺症が残っている。言葉の発音なども含めて。それをどういうふうに迎えるところが、この日本にあるのか。そのふるさとは、どこにあるのか。〔元〕患者そのものの家の中に用意しつづけるのか、ないのか。いまの問題なんですね。その時、詩の持つ射程って非常に広いでしょう」。

講演が行われたのは、ハンセン病回復者が原告となった国賠訴訟の判決確定直後の高揚感の中でのことであったが、ハンセン病回復者の家族が原告となったハンセン病家族国家賠償請求訴訟（以下、「家族訴訟」と記す）の判決で国が敗訴し謝罪・賠償に応じるようになるのは、時代がくだって2019年まで待たねばならなかった。鶴見がここで指摘しているのは、まさに病家族訴訟で焦点化した問題そのものであり、患者・元患者ならびにその家族と、一般社会の関係を問う、島の詩が照らし出す射程の広さであった。

鶴見は、島の最初期の詩文集『生きてあれば』（大日本雄弁会講談社、1957年）に解説「島比呂志の世界」を寄せている。鶴見はそこで、「ハンゼン

(7)　鶴見俊輔「この時代の井戸の底に」（コンスタンチン・トロチェフ『うたのあしあと』土曜美術社出版販売、1998年）82頁。

病療養所もまた、日本の最も深い場所の一つであり、ここから送りとどけられたメッセージは、日本の文化と本格的にとりくもうと思う者にとって、ハンゼン病者固有の問題を越えて、普遍的な意味をもつ」と論じた[8]。

島によれば、『生きてあれば』出版に対して予想をはるかに超える多くの読者からの反響が寄せられたことに驚き、それまでのように園内の機関誌に作品発表することにとどまらず、一般社会の読者に作品を届けようと、新たな文芸誌を1958年に創刊するに至った。島の代名詞ともいえる『火山地帯』がそれである。島は鶴見の誘いで、「『火山地帯』の歴史」を『思想の科学』に発表してもいる[9]。

『火山地帯』を舞台に、島は小説や評論を書きつづけ、晩年に至ってはらい予防法体制の見直しと、国の責任を明確にすべしとの主張を鮮明に打ち出してゆく。原告の１人として国賠訴訟を提起する直前に出された評論集『国の責任』（篠原睦治との共著、社会評論社、1998年）には、40年以上ぶりに鶴見が解説を寄せた[10]。

晩年まで関係が継続した稀有な交流の軌跡を、ここに見ることができる。

５．志樹逸馬との出会いから

志樹逸馬（1917-1959）は、鶴見俊輔によってしばしば「友人」と紹介される入所者である。

志樹は、13歳でハンセン病を発症し、1928年全生病院（のちの多磨全生園）に入院。1933年長島愛生園に転園。生前、詩集はなかったが、死後、原田憲雄・原田禹雄編『志樹逸馬詩集』（方向社、1960年）、『島の四季』（編集工房ノア、1984年）、若松英輔編『新編・志樹逸馬詩集』（亜紀書房、2020年）が編まれた。

講演中、鶴見は志樹の詩「種子」と「闇」を朗読し、次のようにコメントしている。

「ここから〔詩「種子」から[11]〕、大江満雄は『いのちの芽』というタイトルをとってますね。大江満雄と志樹逸馬は、詩人として親縁関係にありますね」。「こういう詩から、大江満雄は、療養所の外にいて、影響を受けていますね」。

ややもすると「大江満雄はハンセン病患者に詩の指導をした」というような、指導する者とされる者の役割を固定的にとらえる見方がなされがちだが、大江の側もまた影響を受けているという指摘は重要である。

鶴見は、1954年、1956年と志樹逸馬に会うため長島愛生園を訪れ、志樹没後の1960年には志樹の墓参を兼ねて同園を訪問している。

その間、志樹は鶴見のすすめで、「病人　西木延作の生活と思想」[12]、「看護婦牧野ふみの記録」[13]、「いかに生きるか」[14] などのエッセイを発表している。志樹没後には志樹逸馬夫人の志樹治代「私の夫の生涯」が『思想の科学』に掲載された[15]。

一方、鶴見も「若い友の肖像」を書いて、志樹逸馬の人となりを一般社会の読者に紹介している[16]。

志樹の死によって両者の交友は早くに途絶えたが、その関係は大変密なものがあった。

鶴見は、講演の中で、志樹逸馬は少年時代から療養所に入所し、先輩から文学の手ほどきを受けて詩作を始め、インドの詩人・タゴールの作品から影響を受けるなど独自の学びの場があったことを指摘する。タゴールは、日本の覇権主義を批判したことを理由に日本の文壇からは冷遇されたが、ハンセン病療養所という閉鎖空間がかえって、文壇の流行に左右されない文学の伝承の場とな

(8)　鶴見俊輔「島比呂志の世界」（島比呂志『生きてあれば』大日本雄弁会講談社、1957年）232頁。

(9)　島比呂志「『火山地帯』の歴史」（『思想の科学』第４次、第15号、中央公論社、1960年３月）11-16頁。

(10)　鶴見俊輔「解説」（島比呂志・篠原睦治『国の責任』社会評論社、1998年）205-207頁。

(11)　正確には、『いのちの芽』に「種子」は掲載されていない。ただし、「芽」という作品や、「新しい生命よ芽生えないか」という詩句を含む「癩者」という作品など、鶴見の指摘に合致するような志樹の作品が『いのちの芽』には見られる。

(12)　志樹逸馬「病人　西木延作の生活と思想」（『中央公論』第69巻第６号、中央公論社、1954年６月）214-219頁。

(13)　志樹逸馬「看護婦牧野ふみの記録」（『新女苑』第18巻第10号、実業之日本社、1954年10月）89-95頁。

(14)　志樹逸馬「いかに生きるか」（『思想の科学　会報』第20号、思想の科学研究会、1958年１月20日）35-44頁。

(15)　志樹治代「私の夫の生涯」（『思想の科学』第５次、第39号、思想の科学社、1965年６月）113-119頁。

(16)　鶴見俊輔「若い友の肖像」（『婦人公論』第40巻題１号、中央公論社、1955年１月）289-291頁。

り、志樹逸馬の文学を育む条件を備えていたとする見方を提示している。今後、療養所のサークル論を考えるうえで示唆に富む視点であろう[17]。

６．島田等との出会いから

鶴見俊輔が最後に取り上げているのが島田等（1926-1995）である。

島田は、1947年長島愛生園入所。1964年「らい詩人集団」結成。詩集に『返礼』（私家版、1992年）、『次の冬』（論楽社、1994年）。評論集に『病棄て：思想としての隔離』（ゆみる出版、1985年）がある。

島田は、文章を書くようになった経緯を次のように述べている。

「私が文章を書くようになったのは、長島愛生園の文芸協会の中に評論部会ができた（一九五三年）あとからである。評論部会は発足当初から鶴見俊輔さんの指導を受けてきた。鶴見さんの選評に“乗せられて”書き続けた者も何人かいたと思うが、私もその一人である」[18]。

ここで述べられているように、鶴見は1955年11月～1969年１月にかけて長島愛生園の機関誌『愛生』と、1956年５月～1972年10月にかけて長島愛生園盲人会の機関誌『点字愛生』の評論の選者をつとめている。鶴見の選によって採用された島田の論文は以下のとおりである（根来育（ねごろいく）は島田等の筆名）。

・根来育「感情」（第一位）[19]。
・根来育「〈転換期〉という意味」[20]。
・根来育「打ち込まれたままの杭」[21]。
・根来育「コミユニケイシヨンと創造」（佳作）[22]。
・しまだ・ひとし「強いられた問い」（入選）[23]。

文章家としての島田は、鶴見による選と選評によって見いだされたと言える[24]。

また、島田は詩人としての顔も持っていた。1964年には「らい詩人集団」を結成して、全国のハンセン病療養所の詩人たちとともに、「らいとの対決」を主題に掲げた。それまで療養所で生み出された詩が、「らいとの対決において不十分であり、無力であった」という自覚に立つものであった[25]。

講演会では、島田の詩「非転向」が朗読され、鶴見は次のようにコメントしている。

「好景気とバブルのなかで、日本の国民の理想はふやけてるでしょう。そのことについて、はっきり標準を定めて、この詩は書かれていますね。／ですから、私個人がした仕事に対して、非常に強い刺激を、まったく違うところから与えている。私を、研究者としての領域において叱咤鼓舞する仕事〔詩〕なんです」。

ここで言う「私個人がした仕事」とは、思想の科学研究会を通してなされた共同研究「転向」を指している[26]。

「同情」というかたちでしか語られることの少ないハンセン病をめぐる日本人の心理的土壌と闘い、生涯にわたってハンセン病問題の解決を求めて論じ続け、詩をつづった島田等の不屈の精神の発露を、「非転向」という詩作品から受け取ることができるであろう。

（17）この点について、療養所という隔離政策の被害の現場を肯定的に評価することなどできないとして、島田等は鶴見俊輔を批判している。島田等「隔離の生産性　鶴見俊輔氏への異論」（『裸形』第15号、長島詩話会、1961年３月）16-19頁。また、鶴見・志樹の関係性についての批判的な考察として、前掲、宮下祥子「鶴見俊輔のハンセン病者との関わりにみる思想―1953～1964年を中心に」も参照のこと。

（18）島田等「あとがき」『病棄て：思想としての隔離』（ゆみる出版、1985年）228頁。

（19）根来育「感情」（『愛生』第12巻第12号、長島愛生園慰安会、1958年11月）4-11頁。

（20）根来育「〈転換期〉という意味」（『愛生』第13巻第11号、長島愛生園慰安会、1959年11月）4-13頁。

（21）根来育「打ち込まれたままの杭」（『愛生』第14巻第10号、長島愛生園慰安会、1960年10月）5-9頁。

（22）根来育「コミユニケイシヨンと創造」は、鶴見俊輔「選評」（『愛生』第15巻第11号、長島愛生園慰安会、1961年11月）71頁に言及だけがあり、掲載は『愛生』（第16巻第１号、長島愛生園慰安会、1962年１月）18-21頁。

（23）しまだ・ひとし「強いられた問い」（『愛生』第23巻第１号、長島愛生園慰安会、1969年１月）5-10頁。

（24）鶴見によって見いだされた書き手として、もう一人、森田竹次がいる。鶴見の誘いで、森田竹次は「世の果ての闘い―ハンセン氏病患者の問題について」（『思想の科学』第４次、第３号、中央公論社、1959年３月）8-14頁を発表している。

（25）らい詩人集団「宣言」（『らい』創刊号、らい詩人集団、1964年９月）。

（26）思想の科学研究会編『共同研究　転向』全３巻（平凡社、1959-1962年）。

7．晩年の仕事

鶴見俊輔は、晩年に至ってもハンセン病問題への発言をつづけ、実際にいくつかの仕事を成し遂げている。

一つは、自らが関わった交流の家建設運動について、当時学生の１人であった木村聖哉（きむらせいや）との共著で、証言記録をのこしたことである[27]。これによって、ハンセン病問題に関心を持つコアな層だけでなく、一般の読者層にも、鶴見によるハンセン病問題との関わりが知られるようになったのである。

さらに二つ目に、ハンセン病問題をテーマに二つの重要な講演をしている。ひとつは、1996年11月30日、らい予防法廃止記念フォーラムでの講演「内にある声と遠い声」[28]。もうひとつが、今回掲載した、2001年７月１日、高松宮記念ハンセン病資料館開館８周年記念の講演「ハンセン病との出逢いから」である。1996年のらい予防法の廃止と、2001年の国賠訴訟判決確定という、日本のハンセン病問題史における２つの節目に合わせて講演を行ったことになる。それらは、はからずも当時の状況を伝える貴重な記録ともなっている。

そして三つ目に『ハンセン病文学全集』全10巻（皓星社、2002 ～ 2010年）の編集委員の仕事を引き受けたことである。このうち、記録・随筆と児童作品の巻には解説を寄せている[29]。あまり知られることのなかった、ハンセン病文学の主要な書き手たちの作品が、このようにして社会に広く示される基礎をつくったのも、鶴見晩年の大きな仕事のひとつであった。

おわりに

以上、見てきたとおり、鶴見俊輔は、戦後まもなくから晩年まで長きにわたってハンセン病問題と取り組んできた。

現在開催されている企画展「ハンセン病文学の新生面　『いのちの芽』の詩人たち」では、大江満雄とハンセン病詩人の関係性に焦点を当てるにとどまったが、療養所の外部からハンセン病問題に接近した文学者や知識人は少なくなかった。鶴見もまた、ハンセン病療養所入所者との出会いをきっかけに、多くの思索を重ねた一人であることが、本講演記録からも明らかになるであろう。

鶴見が親交を持った入所者の多くは詩人であった。講演で言及された詩人たちはみな、それぞれに個性的な生の軌跡を描き、多くの作品をのこしている。本講演記録が、それらの詩人たちの作品との出会いのきっかけとなることを願っている。

---

(27)　鶴見俊輔「五十年・九十年・五千年」（木村聖哉・鶴見俊輔『「むすびの家」物語：ワークキャンプに賭けた青春群像』岩波書店、1997年）159-241頁。

(28)　鶴見俊輔「内にある声と遠い声」（『らい予防法廃止記念フォーラム報告集～排除から共生への架け橋～』FIWC関西委員会、1998年）15-29頁。

(29)　鶴見俊輔「解説」（『ハンセン病文学全集4 記録・随筆』皓星社、2003年）761-772頁。鶴見俊輔「解説」（『ハンセン病文学全集10 児童作品』皓星社、2006年）439-445頁。

2001年10月１日　高松宮記念ハンセン病資料館　第33号　（季刊）

資料館八周年記念講演

鶴見先生の話に感銘

ハンセン病資料館は今年の六月ニ十五日で満八周年を迎えた。入館者は今まで一日平均四十人であったが国賠訴訟熊本地裁判決、政府の控訴断念に対するマスコミの度重なる報道に、国民のハンセン病に対する関心が急速に高まり、七月、八月の入館者は一日平均八十人前後で倍増となった。

資料館では七月一日、多磨全生園コミュニティセンターにおいて八周年記念講演会、講師・鶴見俊輔先生の「ハンセン病との出逢いから」を開催した。

当日は地元、近郊各都市をはじめ、神奈川、埼玉、千葉、栃木、福島、岐阜、和歌山、佐賀、熊本など遠方からの参加者も多く、会場は四百二十人を超す満員の盛況であった。

成田運営委員長の司会で大谷館長の挨拶があり、つづいて鶴見先生は「私とハンセン病との出逢いは終戦後、東京でロシア（米国籍）の一少年の通訳をしてあげることから始まった」と語り、その後その少年（トロチェフ）が叔母と栗生楽泉園に入園、私が栗生楽泉園を訪れ交際する中で、矢嶋良一（元栗生楽泉園園長元多磨全生園園長）や大江満雄（詩人）、入院者の衒雄二（栗生）・島田等（長島）・志木逸馬（多磨）などとも知り合いになったことを終始ユーモアを交えて語り会場の人たちに感銘を与えた。講演終了後会場の人との質疑応答があり三時三十分終了した。

満員の聴衆を前に講演する鶴見先生

資料①
「資料館八周年記念講演／鶴見先生の話に感銘」（『資料館だより』第33号、2001年10月１日）２頁。

執筆者一覧

木村　哲也　きむら　てつや　　国立ハンセン病資料館
事業部事業課　主任（学芸員）

辻　　央　つじ　あきら　　沖縄愛楽園交流会館
主任（学芸員）

吉國　　元　よしくに　もと　　国立ハンセン病資料館
事業部事業課　（学芸員）

国立ハンセン病資料館研究紀要　執筆要項

１．内　容　本研究紀要は、当館及び重監房資料館・社会交流会館等職員が、事業に伴う調査・研究等の成果を報告・公開する場、または当館の事業の目的に即した内容を有する研究論文を掲載する場とする。

原稿は、原則として他出版物に未掲載のものとする。

２．種　別　掲載原稿の種類・分量の目安は下記のとおりとする（すべて図表・写真等含）

①研究論文　：400字詰原稿用紙換算で40枚（16,000字）～ 80枚（32,000字）程度

②研究ノート：400字詰原稿用紙換算で20枚（ 8,000字）～ 40枚（16,000字）程度

③書　評　　：400字詰原稿用紙換算で20枚（ 8,000字）～ 40枚（16,000字）程度

④実践研究／研究動向／資料紹介

：400字詰原稿用紙換算で10枚（4,000字）～ 30枚（12,000字）程度

⑤評伝／聞き書き

：400字詰原稿用紙換算で10枚（4,000字）～ 30枚（12,000字）程度

３．構　成　原稿に必須の構成要素は下記の通りとする。

■研究論文／研究ノート：題名、著者名、本文、脚注（引用・参考文献等　以下同）

■書評：題名、著者名、本文、脚注、対象書籍・論文等の著者名、題名、出版元、出版年

■実践研究／研究動向／資料紹介／評伝／聞き書き：題名、著者名、本文、脚注

４．書　式

本　文：Ａ４用紙タテ、横書き、１段組、40字×30行　※縦書きを希望の場合は要別途連絡。

項目分けは、章、節を用いず、数字、英字を用いる。使用順序は以下のとおりとする。

１．　１）（１）　①　ａ．

投稿論文は執筆者名を伏せて査読審査を行うので、本文、脚注、図表に執筆者名を明示しないこと。自らの業績を引用するさいには、第三者による文献と同様の取り扱いをすること。

脚　注：頁ごとに記載。

脚注・引用もしくは参考文献の書式は原則として下記のとおり。

ａ．脚注：本文該当箇所に註番号を上付（□□□[(1)]）で示し、脚注欄に（１）…として記載。

ｂ．引用もしくは参考文献：

単行書…著者もしくは編者『書名』（出版社または発行者、発行年）頁。

論　文…著者「論文名」（編者『書名または雑誌名』巻号、出版社または発行者、発行年）頁。

脚注で引用箇所を示す場合は頁を記載のこと（「頁」とする。「ページ」「p.」「pp.」としない）。

前掲の文献を示す場合。

単行書…前掲、著者もしくは編者『書名』頁。

論　文…前掲、著者「論文名」頁。

図表・写真等：本文と別途作成し、完全版下にて入稿する。図表・写真タイトルは本文と別途作成し、配置希望箇所および掲載にあたっての留意事項と共に、本文中（プリントアウトした原稿等）にて指示する。大きさは、A4半枚程度で400字相当とする（図版タイトル・説明等を図版等に併記する場合はそれらを上記範囲に含む）。図表・写真等は出典を明記する。転載等にかかる権利処理等の責任は全て該当原稿の著者に在する。

5．投　稿

言　語：日本語（ただし全文日本語訳・訳者名を付して提出する場合はその他言語でも可）

形　式：①メール添付にて送付（wordで作成）

②郵送の場合は、USBメモリ等のデジタル媒体にwordで保存した原稿を１点提出。その際は必ずプリントアウトした原稿を同封する。

送付先：国立ハンセン病資料館　研究紀要編集担当宛

〒189-0002　東京都東村山市青葉町4-1-13　国立ハンセン病資料館　事業部

TEL 042-396-2909　FAX 042-396-2981

（メールアドレス等は同館内事業部に問い合わせのこと）

なお、原稿は返却しない。

投稿者：原則として当館及び重監房資料館・社会交流会館等職員とする。但し当館事業部において依頼を決定した場合はその限りでない。

6．校　正

原則として著者校正は初校のみとする。

7．採否および審査

原稿の採否にかかる審査は、研究紀要編集委員会が行う。研究紀要編集委員会は、事業部の編集担当及び館により委嘱を受けた外部有識者から組織する。また、必要に応じて外部査読を行う（査読者の人選は研究紀要編集委員会が行う）。なお、査読者のコメントに基づき、原稿に修正を求めることがある。

審査の結果については、執筆者に対し理由を付して文書等で通知する。執筆者から「不掲載」や「求修正」その他について疑義等が寄せられた場合は、文書等で、疑義等について必要な説明を行うこととする。

8．著作権の所在

掲載された原稿他著作物の著作権（財産権）は、国立ハンセン病資料館に帰属する。

9．その他

上記以外の内容については、研究紀要編集委員会が決定する。

2010年12月　作成

2012年９月　一部改訂

2019年８月　一部改訂

2022年３月　一部改訂

国立ハンセン病資料館　研究紀要　第 10 号

発　行　日　2023 年 3 月 31 日
編集・発行　国立ハンセン病資料館
〒 189-0002　東京都東村山市青葉町 4-1-13
TEL 042-396-2909　FAX 042-396-2981
印刷・製本　社会福祉法人東京コロニー
コロニー東村山印刷所

Ⓒ 2023 国立ハンセン病資料館　非売品

No. 10

The National Hansen's Disease Museum

Research Bulletin

CONTENTS

[Monographs]

Regarding the translation of "*Erabareta Shima (The Chosen Island)*" as "*Mission to Okinawa*"
Akira Tsuji 1

Bodies Using Tools : The Significance of Self-help Devices, Artificial Limbs, and Prosthetic Devices in Hansen's Disease Sanatoria in "*Jimen no Soko ga Nuketandesu*" (The Ground has Fallen Out from Under Me)
Moto Yoshikuni 11

[Lecture record]

My Encounter with Hansen's Disease
Shunsuke Tsurumi 31

Commentary
Tetsuya Kimura 51